

TOKYO WONDER SITE ANNUAL REPORT 2016

PART.1 ARTIST INTERVIEWS

- 1. Marico AOKI
- 2. Kenji YAMADA
- 3. Hokuto KODAMA

ARTIST INTERVIEWS 01

与えられた機会から 有形無形の「出会い」を 見出して前へと進む

Taking the opportunities presented, finding tangible and intangible encounters and progressing to the next phase.

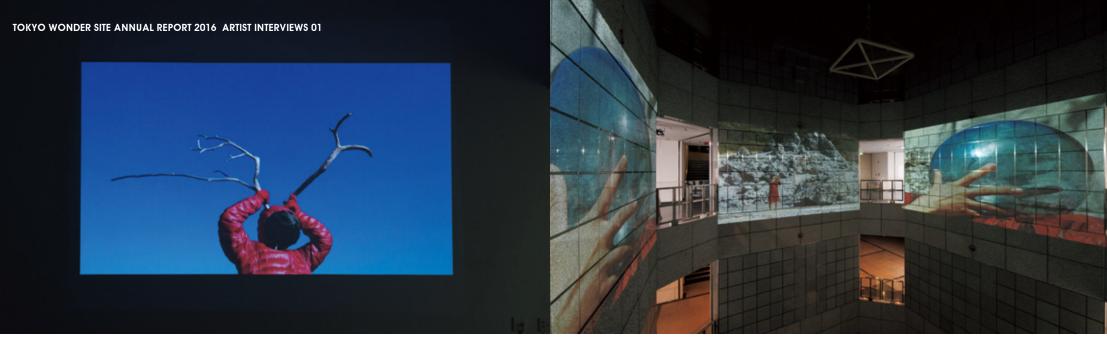
青木真莉子

Marico AOKI

2016年度のTWS-NEXT @tobikan「クウキのおもさ」展など、キャリアの要所でトーキョーワンダーサイト (TWS)のプログラムと関わってきたアーティスト、青木真莉子。現在は映像表現を軸に、万物の「魂/意識」を通じた宇宙観を表現する。そんな彼女に、創作を後押ししたTWSとの出会いを語ってもらった。

Marico Aoki is an artist who has long been involved in careering-defining Tokyo Wonder Site (TWS) programs, including "TWS-NEXT @tobikan 'air in between'" exhibition in fiscal 2016. She currently works primarily with video, expressing a view of the universe involving the "soul / consciousness" of all things. We asked her to talk about her encounters with TWS, which helped propel her creative career.





《Shining voices》2014「TWS-Emerging 2014」(TWS 渋谷) 展示風景 Shining voices, 2014 Installation at "TWS-Emerging 2014", TWS Shibuya

成長や変化の節目を体験した場

トーキョーワンダーサイト(TWS)との縁は、2013年の「トーキョーワンダーウォール公募2013入選作品展(TWW)」応募と入選が始まりです。そこからさらに、TWW入選者が応募できる個展形式の「TWS-Emerging 2014」での展示が叶い、さらに2017年は東京都美術館での「TWS-NEXT @tobikan 『クウキのおもさ』」展にも参加しました。

じつは私の場合、TWWへの応募時点から、狙いはTWS-Emergingでした。当初は毎年TWS本郷で開催されているのを観ていて、空間の魅力も含め、自分もやってみたいと強く思ったからです。絵画作品《オクリモノヲモッテ》を出展したTWWは、この後に制作が映像中心になり、やりたいことが明確になっていく、その過渡期における挑戦でもあったと思います。今の自分のテーマはごく短くいえば、生物/無機物を問わず各々に宿る魂あるいは意識を、私の作る「器」に落とし込み、無数の世界が存在するような宇宙を映し出

したいということです。TWWへの出展作は、 手探りながらそれを1枚の絵画に凝縮させられないかと、苦心した時期でもあります。

TWS-Emergingでは、前述のようにもともと目指していた展示でもあったので、プランは割と前から考えていました。ただ、ちょうどこの年に会場がTWS本郷からTWS渋谷に移ったんですね。私にとっては予定外の出来事でした(笑)。そこで展示への考え方も、それを通じてコミュニケーションする相手の想定も仕切り直し、自分の中でガラッと変える過程がありました。与えられた場所が何を求めていて、それにどうアプローチできるかを常に大切なことととらえたいので、これは必要なことでした。

渋谷という街はその名のとおり谷が入り 組んでいて、そこに世界の有象無象が溜まっ ていくイメージがあり、TWS渋谷はその中心 部にあるともいえます。その建物のなか、螺 旋階段を介して上下に分かれるスペースを 希望し、北海道で撮影した新作《Shining voices》を軸に展示に挑みました。この作品

《二つの心拍》2016 「NEW VISION SAITAMA 5 迫り出す身体」(埼玉県立近代美術館)展示風景 Two heartbeats, 2016 Installation view at "NEW VISION SAITAMA 5 The Emerging Body", The Museum of Modern Art, Saitama Photo: Ken Kato

は私にとって、初めて「ことば=文字」を映像に加える試みでもありました。それまで、さまざまなフィルターを超えて伝わる要素として「音」を使うことはありましたが、それをことばで実験的に取り入れてみたんです。結果として手応えがあり、以降も積極的に言葉を使う契機になりました。

「出会い」がアーティストの推進力

TWS-Emergingでは、アーティスト・トークでゲストの木村絵理子さん(横浜美術館主任学芸員)とお話しできたのも良い体験でした。私のしていることを客観的に言語化してくれて、作中でよく用いる「仮面」について西洋美術史や民俗史とも絡めた意見をもらえたことが印象に残っています。私もこの時期と前後して、作ることについて自ら言語化できる部分も増え、「次に何をすべきか」が制作ごとに見えるようになっていったと感じます。また、同時に2人の作家さんが別室で展示していて、これがなければ一緒に展示をするこ

となんてないかもなと思うくらい、互いにモチーフも表現法も全く違う3人だったのも記憶に残っています。でもその後、展覧会があると来てくれたり、互いの動向を何となく気にしていたり、面白い関係でもあります。

その後に参加したクウキのおもさ展は、TWS側でテーマを掲げたグループ展において、「自分のベスト」と「展覧会としてのベスト」を探る点で、多くを学んだ体験でした。会場を初見してすぐに自分のプランの原型(柱4本に囲まれた展示室中央の空間を「祭壇」のように見立てた映像インスタレーション)を発想できたのですが、三作家で空間を共有するので、互いの影響を考えつつ、各々でやりたいことをどう実現するかが課題でした。そのための打ち合わせでもアプローチは三者三様で、難しいこともあったぶん、勉強になりました。設営を助けてくれたスタッフの方々も心強かったです。

振り返ると私とTWSの関わりは、まだ確信 めいた主題がないまま「現代美術をやらなく ては」という気持ちだけが強かった時期から、



あおき・まりこ

1985 年埼玉県生まれ。2012年東京造形大学大学院造形研究科造形専攻美術研究領域修了。TWSの参加プログラムに「TWS-NEXT @tobikan『クウキのおもさ』」(東京都美術館、2017)、「TWS-Emerging 2014」(TWS渋谷)、「トーキョーワンダーウォール公募2013入選作品展」(東京都現代美術館)。

Marico AOKI

Born in Saitama in 1985. Graduated with an MFA from Tokyo Zokei University in 2012. Participated in TWS programs: "TWS-NEXT @tobikan 'air in between'" Tokyo Metropolitan Museum, 2017, "TWS-Emerging 2014" TWS Shibuya, "Tokyo Wonder Wall 2013" Museum of Contemporary Art Tokyo.

→ P.057

実践をとおして自分のやりたいことを見定め、実験的かつ自由にチャレンジできるようになった過程と割と重なるようにも感じます。

さまざまな場でのコミュニケーションのあり方についても考えるようになりました。最近は北海道や長崎など個性の豊かな土地を訪れて撮影などをした後、その再構成や仕上げを拠点の東京で行うことが多いです。前者の場には発想や発見があり、他方の東京には情報や移動の便利さがあって、自分には良いバランスのようです。一方、私のテーマといえる「意識の移動」を考えたときも、こうした制作と発表の場の対比は面白いものだ

と感じます。逆にもし今後、東京でつくることがあればどんなものになるだろう、というのもありますね。

今までの経験から、より新しい世代の作家さんに何か伝えられるとすれば、私にとって、やはり人との出会いが大切だったなということです。自分は大勢の人を巻き込みながら作るタイプでもないし、人との出会いが直に作品に影響することは少ないとは思いますが、多くの出会いに助けられて作家としての今があるのは確かです。出会いなしには何かをつくれない、とすらいえるかもしれません。

A place where I passed milestones in growth and change

My relationship with Tokyo Wonder Site (TWS) began in 2013, when I applied for "Tokyo Wonder Wall (TWW)" and was accepted. I then participated in the exhibition "TWS-Emerging 2014", featuring selected artists from "TWW". and "TWS-NEXT @tobikan 'air in between'" at Tokyo Metropolitan Art Museum in 2017. The main idea of my work is to place the soul, or consciousness, that resides in both organic and inorganic matter into vessels that I make, and to present a universe containing countless worlds. When I was applying for "TWW" was a time I was exploring ways to condense this idea into a single painting. After that, the next edition of "TWS-Emerging" was an exhibition where I was particularly conscious of what the place I was allotted required and how I could approach it. The name Shibuya literally means "bitter valley," and I had an image of entering valleies where tangible and intangible things of the world accumulate. At TWS Shibuya, more or less in the center of this area, I used a space split into upper and lower levels by a spiral staircase primarily to show a new video, Shining voices, filmed in Hokkaido. This was the first time I added words to the images. and this connected to my later embrace of text. Another important memory for me is an artist

talk where I spoke with Eriko Kimura (Curator, Yokohama Museum of Art), who expressed what I was doing in linguistic form and offered new perspectives on it. In "air in between", I learned a lot about exploring "my personal best" and "the exhibiting group's best" in a thematic group exhibition. No two people have the same approach to this, and because it was difficult, it was all the more a learning experience.

In retrospect, I feel the relationship between TWS and me overlaps with the process of becoming able to see what I want to do through practice, and to take new challenges experimentally and freely. Recently, I often film in areas with distinctive character like Hokkaido, then finish production at my home base in Tokyo. This provides me with a positive balance, because I often arrive at new ideas and discoveries in places like the former, while in Tokyo there is information and movement at my fingertips. I feel this contrast is interesting in terms of my theme of "transfer of consciousness." I am not the type who works well with large numbers of people, and encounters with others do not often affect my works directly, but no doubt I am the artist I am today thanks to encounters with and assistance from many people along the way.



2016年度の二国間交流事業プログラムで、ロンドン芸術大学チェルシー・ カレッジ・オブ・アーツに滞在した山田健二。テート・ブリテンも含む現 地アートシーンの重要エリアである同地で、かつてそこに流刑者のため の刑務所があった歴史に光をあてるプロジェクトを展開した。東西各地 を訪れ創作を重ねる作家は、滞在制作の枠組はまだ進化中だと考える。 Kenji Yamada participated in the fiscal 2016 Exchange Residency Program and stayed at the University of the Arts London, Chelsea College of Arts. In an area that is crucial to the local art scene, being home to venues such as Tate Britain, Yamada carried out a project that shed light on its past history as home to a prison for exiles-to-be. Having visited and worked in many places both East and West, the artist believes strongly in the potential of residency programs.



《Smurfed remain》2016 「TWS レジデンス 2016-2017 『C/Sensor-ed Scape』」(TWS 本郷、2017) 展示風景 Smurfed remain, 2016 Installation at "TWS Creator-in-Residence 2016-2017; C/Sensor-ed Scape", TWS Hongo, 2017

現地の歴史や地域社会に迫る

僕は2012年からイギリスで暮らしており、 チェルシー・カレッジ・オブ・アーツやテート・ ブリテンの敷地に、かつて19世紀には刑務 所があったという歴史に着目したプロジェク トを考えていました。これを支援してくれる 制度を探すなかで、同大学で勤務する知人 に教えてもらったのがトーキョーワンダーサ イト(TWS)の派遣滞在プログラムです。彼 らの間では、東京に作家を招聘するTWSの レジデンス・プログラムは広く知られており 「君は日本から国外への派遣制度を活用し ては | と勧められました。

プロジェクトで試みたのは、陽のあたりに くい歴史や遺構を、コミュニティと共に美術 的もしくは表現の視点から扱うこと。前述 のミルバンク刑務所は全展望監視型のパノプ ティコン式建築で知られ、オーストラリアへ の流罪者を中心に収容されたそうです。また、 今も近隣のパブにその遺構とされる地下通 路があり、監視カメラを通じてその様子を店 内で見られるユニークな計らいをしています。 学側のレジデンス担当者が公的組織として、

これらを通じ、現代社会における公共性と監 視の問題、またちょうど議論の最中にあった 英国のEU離脱問題とも重ねて考えられる可 能性を感じました。そこで、今その敷地にあ るテート・ブリテンやチェルシー・カレッジの 研究者らと歴史を掘り起こし、現在とつなげ る試みができたらと考えたのです。

具体的には、このパブの2階で彼らと公開 の「市民カンファレンス」を開催し、こうした 歴史やトランスナショナルな文化意識を語り 合う様子を地下に投影、それが監視カメラで パブに映し出されるという映像的サイクルを 作り上げました。すでにロンドンで生活して いたとはいえ、移住者である自分が現地の込 み入った歴史的問題に個人としてアプローチ するのは決して簡単なことではありません。 今回二国間交流事業プログラムの参加者と してTWSと同大学の信頼関係も背景に、コ ミュニティに入っていけたのはありがたいこ とでした。これは作家個人が滞在先と交渉す るスタイルとも違う、TWSのプログラムの仕 組みの面白さでもあると思います。また、大 また地域の一員としての立場から必要な関 係者とつないでくれるなどのバックアップも ありがたく、これはプロジェクトに加速度や 飛躍を与えてくれたと思います。

プロジェクトは、続けてチェルシー・カレッ ジ・オブ・アーツの地下ギャラリーで展示を 行いました。こちらは軍医大学の遺体安置所 だった場所で、通路を利用した展示空間を前 述の映像を使った投影モニターで寒ぐような 展示になりました。さらに、同年度のレジデ ンス・プログラム派遣作家8名による東京で の成果報告展「TWS レジデンス 2016-2017 『C/Sensor-ed Scape』 (TWS 本郷、2017)で は、背中合わせの映像と監視カメラを用いた インスタレーションになりました。

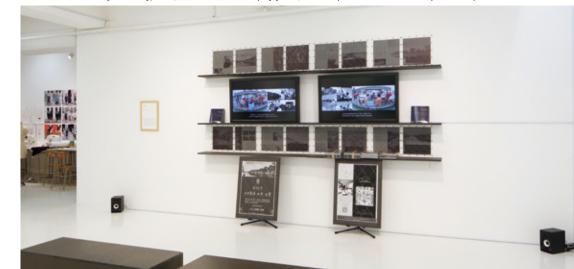
プロジェクトを始めたら、その場だけで終 わらせないようにしたいとも思っています。 前述の東京や、ミルバンク刑務所をとおして 人が移動した先のオーストラリアで、さらに 再びロンドンでこのプロジェクトを、という こともあり得る。どう繋げて継続できるか を考えることで、形式にとらわれずにいられ るとも思っています。これは、自分の活動は 作った内容そのものと共に分配=ディストリ ビューションされる移動の連続であると考え ていることともつながりそうです。

レジデンス制度の可能性

見る側に何が届くかという点では、ロンド ンでは英豪の歴史的関係について当事者特 有とも言えるコメントが不意に飛び出し、強 く心を動かされました。一方、東京でこうし た文脈がどこまで伝わるのかは未知数でした。 当初、自分ではディテールを寄せ集めること で何かの地平が見えてくることを目指したの ですが、東京の展覧会場での反応からは、引 いた視点で見ることで感じるものもあるのか なと実感しました。昨今、オセアニアとアジア がどうつながるかということには多くの関心 が集まっていますし、イギリス経由でそうし た視点を見出せたと言えるかもしれません。

振り返ると、秋吉台、別府、ロッテルダム、 ロンドン、上海など、自分は移動しながら多 くの制作をしてきました。滞在制作も、単に 与えられた 「枠組み」としてその中で制作を 完結させるというより、地域や場に入り込ん で、何かを組み立てていくことが面白いと思っ ています。ときには距離を取りながら、発見 をとおしてアプローチしていく感覚もある。 そうした際に、レジデンスというのは美術館 や社会的コミュニティ、行政組織など多様な 場のミドルグラウンド=中間的な位置にある

《漕港河会議》2017 「ソーシャリー・エンゲイジド・アート展」(アーツ千代田3331) 展示風景 Cao Gang River meeting practice, 2017 Installation at "Socially Engaged Art", 3331 Arts Chivoda, Photo: Keizo Kioku, Courtesy of Art & Society Research Center





ゆえに、他の場からは手の届かないところに も市民経由で接近していける可能性を感じ ています。

TWSのレジデンス・プログラムは、海外での経験を積むきっかけとしても、また多様な文化圏を渡り歩くことでその接点を熟考しつつ、トランスナショナルな自分の文化的意識に光をあてる機会としても、素晴らしいものだと思います。アーティスト・イン・レジデンスは広く一般的になったけれど、まだ進化を続けている枠組みではないでしょうか。作家は提

供された環境をただ利用するのでなく、個人としてその場に加わっていく。受入側や派遣側もその可能性を共有し、新しい試みの実現を支える。そうして進化していくのかもしれません。世代や文化や制度のギャップというのは常にありますが、そこで単なる「やりたいこと」を超え、混交の中で新しいことに挑んでいけたら良いですね。特にTWSは公的機関なので、そこが個人と協働して互いにどう変わっていけるか、という可能性は今後も楽しみにしています。

Engaging with history and the local community

I have been living in the UK since 2012, and was thinking about a project focusing on one aspect of the history of Chelsea College of Arts and Tate Britain, namely that in the 19th century there was a prison on the land they now occupy. When I was searching for a program that might support this effort, friends who work at the college told me about the TWS residency program that sends Japanese artists overseas. These friends were all quite aware of the other side of the exchange residency program, which invites artists to Tokyo, and suggested that I apply for the program for Japanese artists to stay in other countries.

In this project, I sought to work with the community in artistically addressing a history, and some ruins from the past, that seldom see the light of day. The prison I mentioned, Millbank Prison, is famous for having been a Panopticon-type structure that could be observed in its entirety all at once, and where offenders scheduled for exile to Australia were housed. In a neighborhood pub, there is an underground passageway said to have originally been part of the prison, and they have a unique setup where people in the pub can see the passageway via a surveillance camera. I saw the potential for juxtaposing this with the issues of public vs. private and mass surveillance in contemporary society, as well as the Brexit debate that was raging just then. And I wanted to explore this history with researchers from Tate Britain and Chelsea College of Arts, which occupy the site now, and try to connect the past with the present. In specific terms, this entailed holding "Public

Conference - open to the public -" with my associates, on the second floor of this pub, and projecting the scene of us, talking about these historical topics and transnational cultural awareness, in the underground passageway, which was then picked up by the surveillance camera feed viewed in the pub, creating a sort of visual cycle. I was grateful that we were able to engage so intensely with the community, thanks in large part to the strong relationship between TWS and Chelsea College of Arts. The project was then restaged at an underground gallery at the college. Then I also participated in an exhibition, "TWS Creator-in-Residence 2016-2017: C/Sensor-ed Scape" (TWS Hongo, 2017) in which eight artists sent overseas via the residency program the same year presented their results, and altered the format of the installation to make it something I can continue presenting in a variety of settings moving forward.

Residencies occupy a unique middle ground, between various actors such as museums, communities, and government-affiliated organizations, and I feel the TWS Residency Program is wonderful in that it not only gives artists opportunities to acquire experience abroad but also considers points of contact between diverse cultural spheres and creates occasions for highlighting transnational cultural awareness. What's more, TWS is a public institution with tremendous potential for synergies with individuals. I look forward to seeing what directions it will take and how the program will evolve in the future.





「Trace(s)」(TWS 本郷、2017) 公演より "Trace(s)", TWS Hongo, 2017

枠組を超えた発想と挑戦

現在はストックホルムを拠点にダンサー/ 振付家として活動しています。もともと美術 にも興味があり、トーキョーワンダーサイト (TWS)については友人の音楽家のパフォー マンスなどを通じて知っていました。今回は Twitter経由でTWSの「オープンサイト」を知 り、応募しました。

TWS本郷で上演した「Trace(s)」は、中国 の現代美術家、宋冬のインスタレーションと の出会いがきっかけで生まれたものです。そ れは、彼の母が長年捨てずにいた膨大な日用 品を、父の死をきっかけに作品化した《Waste Not》という一作でした。無数のミネラル ウォーターの空ボトルを前に僕が感じたのは、 むしろそこには不在の水のことでした。つま り、それらが形を変えてまだ世界のどこかに あるという「存在感」です。

ちょうど僕も、小さなころから自分のバレ エの師でもあった父を失い、当たり前に感じ ていた自分とダンスの関係性が不安定になっ ていた時期でした。そこから何かがリンクし、ムを体験しました。当然ながら劇場での表現

水をモチーフにする作品を発想したと言えま す。やがてそれは、実体を持たない経済や貨 幣と現代社会の関係、というイメージにもつ ながっていきました。

これをまず、いま僕がコレオグラフィーを学 ぶ大学院の入試に向けてソロ・パフォーマンス 作品にしました。それを発展させる案が「オー プンサイト2016-2017」に選出され、会場の TWS本郷も訪ねたうえで、試行錯誤を通じて レクチャー的要素も含むものになりました。そ の背景には、前述の経験も通じて、自ら踊る ことを前提とはしない 「振付 | という立場から ダンスと向き合うことでの気づきがありました。 具体的には、スピーチアクト(言語行為)の理 論やレクチャーパフォーマンスなどとの出会い から、体だけでなく、言葉、モノを使った表現 への関心が生まれたのだと思います。

これまで主にヨーロッパでは「劇場に所属 するダンサー として活動してきましたが、オー プンサイトではTWS本郷のギャラリー空間を 使い、かつ上階の2層では別の展覧会が開か れる、というクロスジャンルのプラットフォー

ロイ・アサフ [Ballader] (スウェーデン王立歌劇場、2015) 公演より [ダンサー: 児玉北斗、木田真理子] Roy Assaf "Ballader", Royal Swedish Opera, 2015 [Dancer: Hokuto Kodama, Mariko Kida] Photo: Hans Nilsson, Royal Swedish Opera

とは、期待されるもの、可能なことが異なりま す。劇場の持つ既存のコードから少し距離を 置いた表現を探る、クロスフェード的な挑戦 ができた点でも良い機会になりました。

会場の3室(層)それぞれで、自分を含め全 く違う表現者たちのパフォーマンスや展覧会 が同時展開されたのも印象的です。「壁」は 最近では特に世界の諸課題を考えさせますが、 このときは壁越しの世界でも各々の出来事が 起きていると実感でき、一方で足元の床材に 含まれる貝殻からは、折り畳まれた時間の層 も連想しました。来場者にとってもそうした 要素はあったかもしれず、それらも含め「壁を 超えた創造 | という考えも抱きました。

創造の交差点で、次の道を探る

近年はコラボレーションが続いていたとこ ろ、今回はほぼ一人で作り、演じるソロ作 品になりました。音楽や照明も、コレオグラ ファーとしてどう関われるかとの視点でやっ てみると発見があり、自分の創作における重

回、「ソロ作品も含め全ての創作行為はコラ ボレーションでは? とも改めて感じました。 様々な人から力や発想を得たという点では、 ソロもコラボも違いはない。公演後のお客さ んとのやりとりも何かしら自分に響きますし、 連続公演でも全て同じコンディションではあ りません。そうした「揺らぎ」の要素と、どう ネゴシエートしていけるかだと思っています。

劇場や舞台芸術は、現実からしばし離れた 息抜きの場としても大切なものです。ただ僕 は、人々がそれらを、別の問題を持った世界 としても捉えてくれたら良いと思っています。 「Trace(s)」の中にも、水を通じた経済/政治 的問題と同時に、舞台芸術の世界における 疑問提示があります。いわゆる「現実を写す 鏡 とも違い、舞台空間における政治性や問 題から露わになるもの、あるいは現実と、パ フォーマンスというもう一つの現実とのあい だで生じるズレのようなもの。そのズレでで きた隙間が、物事の核心に迫る重要な空間 ではないか、と感じています。

実験的表現の場ということでは、東京の 要なものだと考えています。しかし同時に今アートシーンはストックホルムより大きいと



思う一方、舞台芸術について言えば、多様な表現の場がより確保されていくと面白いとも感じます。たとえばスウェーデン王立バレエ団は歴史もあるぶん仕組みはしっかりしていますが、僕らはそこで、ダンサーたちだけで振付を共作・上演する試みなどもしてきました。伝統ある場でさえも、固定観念に抵抗し、それを崩していく実験精神のための扉が、小さいながら開かれています。その点でも、TWSのオープンサイトのような場は大切ではないでしょうか。

なお、より広く「アジア」を考えたとき、ヨーロッパでは、アジアは多様性とそれゆえの可能性が宿る場とみなされていることを感じま

す。ただ、彼らにとってのアジアは極東の日本から中東までに至る広い範囲を含んでいて、日本から見た「アジア」像はまた違う。こうしたギャップの中にも、考察できる課題は折り畳まれている気がします。

オープンサイトはアーティストも来場者も含めて、多様な文脈が集まり、交差するプラットフォームだと感じました。複数の道が交差するジャンクションのようで、表現者として参加する立場からは、そこに立ったとき色んな方向性が見えてくる。自らの立ち位置がわかっていれば、この先どんな道を辿って行きたいのかを考える「転換点」になり得ると思います。

Concepts and challenges that transcend boundaries

"Trace(s)", which I performed at "OPEN SITE 2016-2017", was first inspired by an installation by the Chinese contemporary artist Song Dong. His work *Waste Not*, which he created following his father's death, comprised a staggering number of everyday items that his mother had hoarded over many years, and seeing the countless empty water bottles that were part of the exhibition, I felt the "presence" of the absent water.

At that time I had also just lost my father, who had taught me ballet from a young age, and it was a period when I felt my relationship with dance, which had always been an integral part of my life, was rocky. Seeing this work of art, something clicked, and I thought of doing a piece relating to water. This theme also related to the role in present-day society relates of the economy and currencies, which have no tangible reality. The work arose from these ideas and developed into the performance selected for "OPEN SITE", including elements of lecture incorporating the body, words, and objects.

"OPEN SITE" is a cross-genre platform, and it was an excellent opportunity to explore modes of expression outside the conventional boundaries of the theater. On the two upper floors of the space, an art exhibition was being held, an entirely different world of creative expression unfolding above the ceiling, and participating in this

project gave me ideas about "creativity without boundaries." At the same time, "Trace(s)" was a solo work that I composed and performed nearly all alone. As a choreographer, figuring out how to deal with things like music and lighting brought me new discoveries, which I believe are important for my practice. On the other hand, I also got the feeling that all creative activity, including solo work, is actually some form of collaboration.

One of the important roles of theater and other performing arts is to let people escape from reality and breathe easy for a while. However, I think people should also be able to perceive the stage as another world that has other issues of its own. I believe the performing arts are not a "mirror held up to reality," but they can address political and other issues in their own unique way, and when a gap opens up between the real world and the world of performance, this gap can become a vital gateway that lets us see into the essence of things.

To me, "OPEN SITE" was a platform where diverse artists and viewers came together and intersected, bringing different contexts to the table. Participating as an artist, I felt I was standing at a crossroads with various possible directions. I think that if you know where you stand, an opportunity like this can be a "turning point" that lets you find your path for the future.

INDEX B次

PART.1 インタビュー ARTIST INTERVIEWS

002 青木真莉子 Marico AOKI

008 山田健二 Kenji YAMADA

014 児玉北斗 Hokuto KODAMA

PART.2 プログラム PROGRAMS

028 トーキョーワンダーウォール Tokyo Wonder Wall

034 TWS-Emerging 2016

053 ワンダーシード 2017 WONDER SEEDS 2017

056 TWS-NEXT @tobikan「クウキのおもさ」 "air in between"

061 クリエーター・イン・レジデンス・プログラム Creator-in-Residence Program

106 トーキョーワンダーサイト レジデンス 2015-2016 TWS Creator-in-Residence 2015-2016

117 オープンサイト 2016-2017 OPEN SITE 2016-2017

138 若手のための現代音楽企画ゼミ 2016 Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists

PART.3 講評/審査員評 REVIEWS

142 TWS-Emerging 2016

163 オープンサイト 2016-2017 OPEN SITE 2016-2017

164 若手のための現代音楽企画ゼミ 2016 Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists

022 はじめに Foreword

024 ミッションと活動 Missions & Activities

166 施設案内 General Information

TOKYO WONDER SITE ANNUAL REPORT 2016

トーキョーワンダーサイト アニュアル 2016

TOKYO WONDER SITE ANNUAL REPORT 2016

はじめに

トーキョーワンダーサイト (TWS) は東京から新しい芸術文化を創造・発信する先駆的なアートセンターとして、2001年の開館以来、多彩なプログラムを実施してきました。2016年度は、新しい公募プログラム「オープンサイト」を始動。国内外から250件を超える応募があり、TWS本郷を舞台に幅広いジャンルの企画を開催しました。また、TWSのレジデンスプログラムには、53組のクリエーターが参加し、東京や世界の各都市で、滞在制作やリサーチを実施。TWSは国内外のクリエーターが行き交う、世界のアートの拠点としての活動を展開しています。

『トーキョーワンダーサイト アニュアル2016』では、2016年度のプログラムや参加クリエーター263組の紹介に加え、2016年度のプログラムに参加し、今後の飛躍が期待されるアーティストへのインタビューを掲載しています。また、プログラムにご協力をいただいたゲストや審査員、講師の皆様にもご寄稿いただき、TWSの活動を広く伝えるものとなることを目指しました。本書をとおして、公募展、海外派遣など、クリエーターの経験や成長に応じた段階的・継続的なTWSの育成プログラムに、ご注目いただければ幸いです。

今後もTWSは3つのミッションである、「若手クリエーターの発掘・育成・支援」「国際文化交流」「創造における実験を応援」のもと、若手アーティストやアーティストを目指す若い世代の挑戦する場でありつづけるとともに、TWSの持つ国際的なネットワークを通じて、未来を担うクリエーターが更なる活動を広げていけるよう、プログラムの充実に努めて参ります。今後の活動にぜひご期待ください。

トーキョーワンダーサイト

Foreword

Since its opening in 2001, Tokyo Wonder Site (TWS) has organized a wide range of programs as a pioneer of art centers, creating and presenting new art and culture from Tokyo. In 2016, we launched the new open-call program "OPEN SITE." More than 250 entries were submitted from Japan and overseas, and projects in diverse genres were introduced at TWS Hongo as the venue. In addition, 53 creators (individuals or groups) participated in the TWS residency programs, staying in Tokyo or other cities around the world, creating art works and conducting research. TWS continues to assume its role as a global hub for art and culture and platform for creators from Japan and around the world.

Tokyo Wonder Site Annual Report 2016 introduces the programs conducted in fiscal 2016 and the 263 participating creators. In addition to that, it features interviews with the promising artists who participated in the programs in fiscal 2016. Texts were also contributed by guests, juries and speakers who cooperated in the programs, with the aim of publicizing TWS' activities as widely and effectively as possible. We hope that this report will provide an overall picture of our step-by-step programs, including open-call exhibitions and international residency, which TWS continues to offer to creators at various levels of experience and career. TWS will continue to offer opportunities to young, emerging and aspiring artists in line with our three missions - "Discover, nurture and support young creators," "Promote international cultural exchange," and "Support creative experimentation" and will further enhance the programs so that creators in the next generation will be able to expand their activities through the international network we have developed. We appreciate your continued interest and support in our activities.

Tokyo Wonder Site

TOKYO WONDER SITE MISSIONS & ACTIVITIES

ミッションと活動

トーキョーワンダーサイト(TWS)は、東京から新しい芸術文化を創造・発信するアートセンターです。「TWS本郷」、「TWS渋谷」、「TWSレジデンス」の3館を拠点に、若手クリエーターの発掘・育成・支援や、さまざまなジャンル、ステージのアーティストによる国際文化交流を目的とした展覧会やレジデンス・プログラム、教育事業など、多彩な活動を展開しています。

Tokyo Wonder Site (TWS) is an art center dedicated to the generation and promotion of new art and culture from the heart of Tokyo. Based in TWS Hongo, TWS Shibuya and TWS Residency, TWS organizes and promotes multiangular activities in supporting and nurturing young talent in all fields as well as takes, a role as a hub for international cultural exchange between the artist in various career stage and genre through exhibitions, residency program, educational program etc.

Mission

若手クリエーターの発掘・育成・支援

展覧会を通じて段階的・継続的な活動をサポート

若手アーティストの登竜門として公募展「トーキョーワンダーウォール」の開催をはじめ、「TWS-Emerging」「TWS-NEXT」といった次のステップとなる場も提供しています。また、作品を展示・販売する「ワンダーシード」など、さまざまな機会をとおして若手クリエーターの活動を支援しています。

Along with "Tokyo Wonder Wall", an open-call program that is a steppingstone to success for young artists, TWS also organizes "TWS-Emerging" and "TWS-NEXT" as platforms for emerging artists to move on to the next stages in their careers. In addition, TWS supports young artists through presenting a wide range of opportunities such as "WONDER SEEDS", which exhibits and sells artwork.

PROGRAMS

トーキョーワンダーウォール Tokyo Wonder Wall **ワンダーシード 2017** WONDER SEEDS 2017

TWS-Emerging 2016

TWS-NEXT @tobikan「クウキのおもさ」 TWS-NEXT @tobikan "air in between"

国際文化交流

クリエーターの派遣・招聘で世界と東京をつなぐ

才能あるクリエーターを世界に派遣し、また各国から東京へと迎え入れ、リサーチや創作の機会を提供するレジデンス事業を展開。その成果を展覧会やオープン・スタジオで紹介しています。こうした活動を継続して行うことで、世界的なアートセンターとのネットワークを構築しています。

TWS organizes vibrant creator-in-residence programs, sending Japanese artists abroad as well as hosting overseas artists in Tokyo who want to conduct research and create new projects. In order to showcase the results of their research and work, TWS also organizes exhibitions as well as open studio events, developing its activities by utilizing an international network of art centers across the globe.

PROGRAMS

トーキョーワンダーサイト レジデンス 2015-2016

TWS Creator-in-Residence 2015-2016

Part 1 リターン・トゥ Part 2 イマジナリー・シノニム RETURN TO Imaginary Synonym

Part 3 アートセンター・アズ・ワールド・シチズン

art center as world citizen

クリエーター・イン・レジデンス・プログラム

Creator-in-Residence Program

創造における実験を応援

ジャンルを問わず、あらゆる表現に創造の機会を開く

観る人にも表現する人にもオープンで創造的な場 (=サイト)を目指し、アート、映像、ダンス、音楽など、あらゆる表現に門戸を開いた公募プログラム「オープンサイト」をはじめ、表現を社会に届ける企画力を養う「若手のための現代音楽企画ゼミ」などをとおして、創造における実験の機会を提供しています。

TWS offers opportunities for creative experimentation through "OPEN SITE", which opens the door to accept multiangular activities in creative fields to create a "site" for creators from all genres to interact, "Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists", which cultivates abilities to disseminate creativity.

PROGRAMS

オープンサイト 2016-2017 OPEN SITE 2016-2017

若手のための現代音楽企画ゼミ2016

Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists

Mission

Mission

3

D (9)

- ・人名をフルネームで記載する場合の姓・名の順は、特に指定がない場合は各言語における 標記の順に従った。
- ・アーティスト、クリエーター、委員、講師の名前は敬称を省略し、委員、講師の肩書さは事業 開催当時のものを記載した。
- ・アーティスト、クリエーターのプロフィールは、2017年3月時点の情報を記載した。 プロフィールは、アーティスト、クリエーターより提供のあった資料に基づき編集・作成した。
- ・作品名は≪≫、プロジェクト名・展覧会名は「」、書名は「」で示した。
- ・作品情報は、作家名、作品名、制作年の順に記載した。
- ・作品名が日英とも同じ場合は、英語表記のみを記載し、展覧会風景、公演風景はキャブションを省略した。(Part.1をのぞく)
- ・展覧会情報は、「展覧会名」(会場名、都市名、都道府県名/国名、開催年)の順。ただし、会場名に都市の名が含まれるものは、都市名を省離した。また、展覧会名に開催年の記載が含まれるものは、開催年を省略した。日本での展覧会は、都市名が県庁所在地、政令指定都市などにおいては、都道府県名を省略した。海外での展覧会は会場名、都市名、国名、開催年の順とし、首都や世界都市においては国名を省略した。
- ・受賞歴については会場名を省略し、賞名に開催年の記載の無いものについては、最後に開催年を記した。
- ・写真クレジット:展示風景、活動風景、およびポートレートの撮影者は奥付にまとめた。アーティスト、クリエーターから提供された写真には、クレジットを記載した。
- ・著作権:特に記載のない場合、著作権はすべてトーキョーワンダーサイトに帰属する。

Explanatory Note

- Names are listed in the appropriate order for each language, with the exception of Japanese names, which are written in the Western order (given name followed by surname).
- Honorific titles for artists, creators, jury members, and lecturers have been omitted. Job titles for jury members and lecturers were current at the time of each event.
- Artist and creator profiles are current as of March 2017.
- · Profiles are based on documents provided by the artists and creators.
- Titles of artworks and publications are given in italics. Quotation marks are used for exhibition and project titles.
- Information on the artworks is listed in the following order: name of artist, title of work, and year of production.
- When the title of a work is the same in both Japanese and English, only the English title is listed, and captions are omitted for installation views and the performance views (except in Part 1.)
- Information about exhibitions is written in order of exhibition title (venue name, city name, prefecture name/ country name, year of exhibition). In cases where the exhibition name includes the year the exhibition was held, the year is omitted. Exhibitions held overseas are written in order of venue name, city name, country name, and year of exhibition, though country names of capitals and major international cities have been omitted. For exhibitions in Japan, the names of prefectures are omitted when the city is a prefectural capital or government ordinance-designated city, etc.
- In award histories, venue names are omitted, and when award names do not contain the year of the award, the last year it was presented is listed.
- Photo credits for exhibition views, activities, and portraits are listed in the colophon. Credits for photos provided by the artists and creators appear next to each picture.
- \cdot All rights reserved by Tokyo Wonder Site unless otherwise specified

TOKYO WONDER SITE ANNUAL REPORT 2016

PART.2 PROGRAMS

- 1. Tokyo Wonder Wall
- 2. TWS-Emerging 2016
- 3. WONDER SEEDS 2017
- 4. TWS-NEXT @tobikan "air in between"
- 5. Creator-in-Residence Program
- 6. TWS Creator-in-Residence 2015-2016
 Part1 RETURN TO
 Part2 Imaginary Synonym
 Part3 art center as world citizen
- 7. OPEN SITE 2016-2017
- 8. Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists

プログラム

- 1.トーキョーワンダーウォール / 2. TWS-Emerging 2016 / 3. ワンダーシード 2017
- 4. TWS-NEXT @tobikan 「クウキのおもさ」/ 5. クリエーター・イン・レジデンス・プログラム
- 6.トーキョーワンダーサイト レジデンス 2015-2016
- Part 1 リターン・トゥ Part 2 イマジナリー・シノニム Part 3 アートセンター・アズ・ワールド・シチズン
- 7. オープンサイト 2016-2017 / 8. 若手のための現代音楽企画ゼミ 2016









若手アーティスト育成のための公募プログラム

Open call program aimed at fostering young emerging artists

「トーキョーワンダーウォール(TWW)」は、全国の若手アーティストの育成・支援を目的とし、作品発表の機会を提供する公募プログラムです。東京都とトーキョーワンダーサイトが連携して実施しています。「TWW公募2015」の入選者の中からTWW賞に選ばれた12名の内3名が東京都庁で実施する「TWW都庁2015」で展示を行ったほか、2016年度は、816名の応募者の中から48名が入選し、TWS渋谷で3期にわたって開催された「TWW公募2016」で作品を発表。入選者には個展形式の展覧会「TWS-Emerging」への参加のチャンスなど、更なるステップアップのプログラムを用意しています。

"Tokyo Wonder Wall (TWW)" is an open call program offering opportunities to exhibit works of art, with the goal of cultivating and supporting young artists nationwide. It is implemented by a partnership of the Tokyo Metropolitan Government (TMG) and Tokyo Wonder Site (TWS). Works by three artists, out of the 12 selected from "TWW 2015" applicants as TWW Prize winners, were exhibited at "TWW 2015 at TMG bldg.", and in fiscal 2016, 48 people were selected from among 816 applicants and their work shown at "TWW 2016", held at TWS Shibuya over three periods. For these selected artists, we have prepared a further "step-up program," including a chance to participate in the solo-format exhibition "TWS-Emerging".

トーキョーワンダーウォール公募2016入選作品展

Tokyo Wonder Wall 2016

会期: 2016.6.25 (土) — 8.21 (日)







「トーキョーワンダーウォール (TWW) 公募2016入選作品展」では、応募総数816名から入選した48名のアーティストによる作品を3期にわたってTWS渋谷で展示しました。TWW大賞、TWW賞、審査員賞の受賞者をはじめ、次代を担う若い才能による意欲的な作品の数々が発表されました。

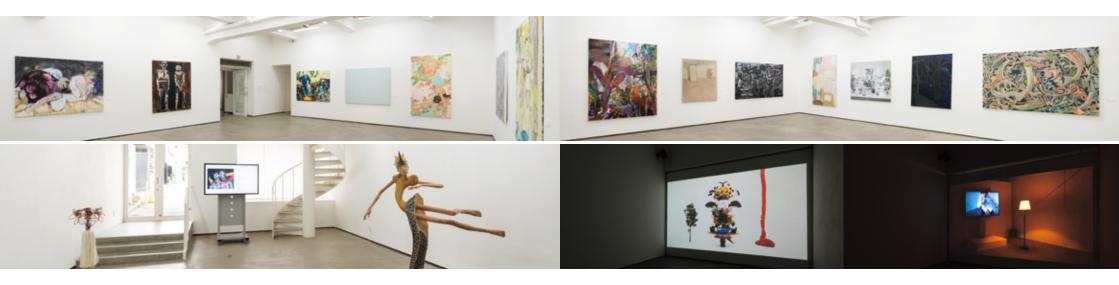
"Tokyo Wonder Wall 2016" presented works by 48 artists, selected from 816 entries, at TWS Shibuya over three separate periods.

DATA

②会場: トーキョーワンダーサイト渋谷 ◎審査員: 石田尚志 (画家・映像作家、多摩美術大学准教授)、石原慎太郎 (作家)、大巻伸嗣 (美術家、東京藝術大学教授)、鴻池朋子 (美術家、杉戸 洋 (美術家、東京藝術大学社教授)、丸山直文 (美術家、武蔵野美術大学教授)、今村有策 (トーキョーワンダーサイト館長) ◎入選者数: 40名 (平面作品)、8名 (立体・映像・インスタレーション部門) ◎応募者数: 739名 (平面作品)、7名 (立体・映像・インスタレーション部門) ◎主催:東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団トーキョーワンダーサイト ◎協力: 公益財団法人東京都歴史文化財団トーキョーワンダーサイト ◎協力: 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

Tokyo Wonder Wall

トーキョーワンダーウォール公募2016入選作品展



入賞者

[トーキョーワンダーウォール大賞] 黒田恭章

[トーキョーワンダーウォール賞] 〈平面部門〉

伊藤夏実、川上喜朗、杉藤良江、 田中秀介、谷崎桃子、都築崇広

〈立体・映像・インスタレーション部門〉 井原宏蕗、山内祥太

[トーキョーワンダーウォール審査員賞]

伊藤夏実(今村有策賞)

奥村彰一(石原慎太郎賞)

片江公紀(大巻伸嗣賞)

黒石美奈子(鴻池朋子賞)

佐藤天音(石田尚志賞)

林 菜穂(丸山直文賞)

渡部仁美(杉戸洋賞)

入選者 / Selected artists

[第1期] 平面作品 Part 1 2D works section

2016.6.25 (±) -7.10 (B)

石井佑果、伊藤夏実、江上真織、奥村彰一、 片江公紀、川上喜朗、菊岡穂、黒石美奈子、 黒田恭章、小林 A、佐藤天音、

JOGAN HESSE、John Yellow、杉藤良江、田中秀介、谷崎桃子、都築崇広、

長嶺高文、林菜穂、渡部仁美

Yuuka ISHII, Natsumi ITO, Maori EGAMI, Shoichi OKUMURA, Hironori KATAE, Yoshiro KAWAKAMI, Minori KIKUOKA, Minako KUROISHI, Yasuaki KURODA, Kobayashi A, Amane SATO, JOGAN HESSE, John Yellow, Yoshie SUGITO, Shusuke TANAKA, Momoko TANIZAKI, Takahiro TSUZUKI, Takafumi NAGAMINE, Naho HAYASHI, Hitomi WATANABE

[第2期] 平面作品 Part 2 2D works section

2016.7.16 (±) — 7.31 (日)

秋山実生、池上怜子、石井早希子、石川優太、 氏江樹穂、笠原秀樹、勘田ユリカ、黒田恭章、 佐々木可奈子、神 祥子、照沼敦朗、

中野由紀子、Notate with Nerve、馬場かおり、 浜口麻里奈、フカミエリ、古川穂波、mizuki、 森裕子、矢作亮太、YUMI

Mio AKIYAMA, Ryoko IKEGAMI, Sakiko ISHII, Yuta ISHIKAWA, Kiho UJIE, Hideki KASAHARA, Yurika KANDA, Yasuaki KURODA, Kanako SASAKI, Sachiko JIN, Atsuro TERUNUMA, Yukiko NAKANO, Notate with Nerve, Kaori BABA, Marina HAMAGUCHI, Eri FUKAMI, Honami FURUKAWA, mizuki, Yuko MORI, Ryota YAHAGI, YUMI [第3期] 立体・映像・インスタレーション作品 Part 3 3D / Video / Installation works section 2016.8.6 (土) — 8.21 (日)

井原宏蕗、鹿野洋平、髙崎洋祐、葉栗里、 林暢彦、平田尚也、堀園実、山内祥太

Koro IHARA, Yohei SHIKANO, Yosuke TAKASAKI, Sato HAGURI, Nobuhiko HAYASHI, Naoya HIRATA, Sonomi HORI, Shota YAMAUCHI

Tokyo Wonder Wall

トーキョーワンダーウォール都庁 2015

Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building

会期: 2016.4.7(木) — 4.21(木) 村上早

4.26 (火) — 5.12 (木) 香月美菜 5.17 (火) — 5.31 (火) タナカヤスオ







1. タナカヤスオ(N088 分岐時間)Yasuo Tanaka *No. 88 Divergrence Time*, 2015 **2.** 村上早〈めぐらす〉Saki Murakami *circulate*, 2015

2016年度の「トーキョーワンダーウォール (TWW) 都庁2015」では、「TWW公募2015」の平面作品部門で入賞した12名の内3名 (村上早、香月美菜、タナカヤスオ)の作品を展示しました。展覧会初日には、展示のテーマや作品についてプレゼンテーションするアーティスト・トークを開催しました。

At "Tokyo Wonder Wall (TWW) 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building" held in fiscal 2016, works were shown by three artists (Saki Murakami, Mina Katsuki, and Yasuo Tanaka) selected from the 12 winners of the "TWW 2015" in the two-dimensional works category.

DATA

◎会場:東京都庁第一本庁舎 3 階南側空中歩廊



^{3.} 香月美菜 Mina Katsuki From one stroke, 2015

Emerging 2016

トーキョーワンダーウォール入選者のステップアップ・プログラム

Step-up program for Tokyo Wonder Wall winners

「TWS-Emerging」は、公募展「トーキョーワンダーウォール」の入選者から希望者を 募り、審査を経て選出されたアーティストの個展開催を支援するプログラムです。 2016年度は18名が選ばれ、TWS渋谷を会場に6期にわたって展覧会を開催しまし た。各アーティストは作品の制作に加え、展覧会タイトルの決定、展示レイアウト や照明、作品解説にいたるまで、さまざまな事柄に挑戦しました。また、展覧会初日 に行うアーティスト・トークでは、作品や制作背景などを自身の言葉で伝えました。 * P.142~P.150 にアーティスト・トークのゲストによる講評文を収録しています。

"TWS-Emerging" is a program to support solo exhibitions by artists, who are selected by screening candidates from among those accepted to the public open-call exhibition "Tokyo Wonder Wall". In fisca 2016, 18 people were selected and held exhibitions over six different periods at TWS Shibuya. In addition to producing work, each artist took on various challenges, from deciding the exhibition's title and layout to lighting and explanations of works. Also, at Artist Talks held on the opening day of each exhibition, they spoke about the works and the background behind them in their own words. P.154-162 contains comments by Artist Talk guests.

◎会場:トーキョーワンダーサイト渋谷

DATA

◎ トークイベント: 2016.5.7 (土) 17:00-18:00 ゲスト: 野口卓海(美術批評家, 詩人)

田中秀介

Shusuke TANAKA

円転の節

Section of the circle

会期: 2016.4.9 (±) — 5.8 (目)





毎日繰り返される日常の一事象や一場面を切り取り、描きました。1階から2階の展示室に向かっ て、一日の時間が進んでいくように作品を配置。田中がアルバイトの行き帰りに目にした大阪 のとある街並みを、早朝の光が差し込む景色と夕方の景色を同じ構図で描いた2枚の大きな絵 など、展示空間を時間で区切ることで、ギャラリー全体をうまく構成した展示となりました。

Tanaka isolates recurring events and scenes from everyday life and renders them on canvas, arranging the works so that the time of day moves forward. This exhibition made effective use of the entire gallery, which was divided according to time, such as with two works with the same composition depicting the streets of Osaka in the early morning and evening.

PROFILE

1986年和歌山県生まれ。2009年大阪芸術大学美術学科油画コース卒業。主な展覧会に「私はここにいて、あなた は何処かにいます。」(Gallery PARC、京都、2015)、「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、 「CONSTELLATION 2014 - 星座的布置展 - 」(上野の森美術館) など。受賞歴に「Art Camp 2009」サントリー賞。

Born in Wakayama in 1986. Graduated with a BA in Oil painting from Osaka University of Arts in 2009. Recent exhibitions: "I'm here, and you're somewhere.", Gallery PARC, Kyoto, 2015, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "CONSTELLATION 2014", The Ueno Royal Museum, Tokyo. Award: "Art Camp 2009", Suntory Prize.

田中里奈

獅子吼の庭 Shishiku Garden

Rina TANAKA

会期: 2016.4.9 (土) — 5.8 (日)

大杉好弘

Takahiro OSUGI

不確かな現実、確かなイメージ uncertain reality, certain image 会期: 2016.4.9 (土) — 5.8 (日)







おもちゃの車やスタイロフォームで作った人形などが置かれた、大杉の仕事場や自宅の作業机の上を描いた、淡い色合いの油彩画やモノタイプのプリントで展示を構成しました。別の展示室には絵画作品のモチーフと同じ、陶器で作られた鳥などのオブジェも展示し、鑑賞者は絵の中に作られた世界とオブジェを行き来して見ることによって大杉が作り出したイメージをより確かなものに変えることが出来ました。

Osugi exhibited oil paintings and monotype prints depicting his workplace and work desk at home, which are decorated with toy cars and dolls. He also exhibited the actual objects which were the subjects of pictures shown in another room, and by seeing both the picture and the object, viewers were able to gain a clearer grasp of Osugi's imagery.

PROFILE

1984年愛知県生まれ。2010年愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻油画・版画領域修了。主な展覧会に「Framing 鈴木雅明・大杉好弘2人展」(ギャラリーnoivoi、愛知、2015)、「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、「群馬青年ビエンナーレ2015」(群馬県立近代美術館)、「大杉好弘展 -不確かな景色-」(アートハウスあいち、2014) など。

Born in Aichi in 1984. Graduated with an MA in Oil painting and Woodcut printing from Aichi University of the Arts in 2010. Recent exhibitions: "framing Masaaki Suzuki, Takahiro Osugi joint exhibition", Gallery noivoi, Aichi, 2015, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "Gunma Youth Biennale 2015", The Museum of Modern Art Gunma, "Takahiro Osugi Solo Exhibition 'uncertain view'", Art House Aichi, 2014.

京都の嵐山にある天龍寺、宝厳院の獅子吼の庭を散策した体験や記憶をもとに描いた4枚の絵を展示。この庭は嵐山の景観を取り入れた借景回遊式庭園で、絵の中には複数の遠近法や視点が取り込まれ、鑑賞者は順番に絵を見て行くとあたかも自身が庭園を回遊しているかのような感覚を覚えます。計算して描かれているようにも見える画面には、染み込ませたり、垂らしたりといった偶然の要素も取り入れられました。

Tanaka created and exhibited four pictures based on experiences and memories of a walk in Shishiku Garden at Tenryu-ji Temple Hogonin in Arashiyama, Kyoto. These pictures adopt multiple perspectives and viewpoints, and as viewers looked at the pictures in turn, they felt as though they themselves were traveling around the garden.

PROFILE

1990年愛知県生まれ。2012年名古屋芸術大学美術学部美術学科卒業。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、「アーツ・チャレンジ2015」(愛知芸術文化センター)、「Another World」(Gallery Valeur、愛知、2013) など。受賞歴に「名古屋芸術大学卒業制作展」ブライトン大学賞3等 (2012)。

Born in Aichi in 1990. Graduated with a BA from Nagoya University of Arts in 2012. Recent exhibitions: "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "Arts Challenge 2015", Aichi Arts Center, "Another World", Gallery Valeur, Aichi, 2013. Award: "Nagoya University of the Arts Graduation Work Exhibition", University of Brighton Award 3rd Prize, 2012.

0.37

Part.2 TWS-Emerging 2016

中野奈々恵

余白の話

Nanae NAKANO

The Stories in the Blanks

会期: 2016.5.21 (±) — 6.19 (日)

花沢 忍

Shinobu HANAZAWA

Conspiracy of ecstasy

会期: 2016.5.21 (±) — 6.19 (日)











生と死は切り離されたものではなく、つながっているという花沢の死生観に基づいて展示が構成されました。1階の展示室には、世俗的な空間として革やキャンバスに描かれた絵画とテキスト、そして花沢がダンスを踊る映像が投影されました。螺旋階段を上ると2階には祈りの空間として、約7メートルの大きなキャンバスに描かれた《Conspiracy of ecstasy》が壁面いっぱいに展示されました。

Based on Hanazawa's view of life and death as inseparably connected, the first floor was cast as a secular space featuring paintings and texts executed on leather and canvas, and projected video of Hanazawa dancing. The second floor was a space of prayer with a painting on canvas about seven meters long covering an entire wall.

PROFILE

1989年神奈川県生まれ。2015年多摩美術大学中退。主な展覧会に「第19回 岡本太郎現代美術賞展」(川崎市岡本太郎美術館、2016)、「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、「うつつ」(Bambinart Gallery、東京、2015)、「昨日の口紅で天国へいく」(洞窟現代、神奈川、2014) など。受賞歴に「第2回 宮本三郎デッサン大賞展」山本容子賞(2013)。

Born in Kanagawa in 1989. Withdrew from Tama Art University in 2015. Recent exhibitions: "The 19th Exhibition of the Taro Okamoto Award for Contemporary Art", Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki, 2016, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "Utsutsu", Bambinart Gallery, Tokyo, 2015, "get to heaven in yesterday's lipstick", Cave Contemporary, Kanagawa, 2014. Award: "2nd Miyamoto Saburo Biennial Award for Original Sketch", Yoko Yamamoto Prize, 2013.

中野の絵画における「余白」とは、自由と想像力を生み出す源のような存在であり、見る人に「余白」を感じさせることを目指して制作しています。今回の展示では、本を読んでいて印象に残った言葉を抜き出して、絵画に取り入れました。マンガのようなコマ割の形式や雑誌などの切り抜きをコラージュして新たな物語を創出することにも挑戦しました。

Margins in Nakano's pictures are a source of freedom and imagination, intended to spark emotion on the part of the viewer. This time, she incorporated words that had made a powerful impression on her when she was reading, and took on the challenge of creating a new story with comic book-style frame divisions and collages.

PROFILE

1983年大阪府生まれ。2006年京都造形芸術大学美術・工芸学科洋画コース卒業。主な展覧会に「すべてが通り過ぎた箱の中」(芝田町画廊、大阪、2015)、「トーキョーワンダーウォール都庁2015」(東京都庁第一本庁舎)、「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)など。受賞歴に「トーキョーワンダーウォール公募2015」トーキョーワンダーウォール賞、審査員賞(杉戸洋)。

Born in Osaka in 1983. Graduated with a BA from Kyoto University of Art and Design in 2006. Recent exhibitions: "The box all have gone past", Gallery Shibatacho, Osaka, 2015, "Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building," Tokyo Metropolitan Government Building, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, Awards: "Tokyo Wonder Wall 2015", Tokyo Wonder Wall Prize, Jury Prize (Hiroshi Sugito).

Part.3 TWS-Emerging 2016

松浦 進

Susumu MATSUURA

Artificial propagation planet

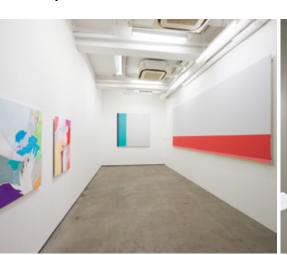
会期: 2016.9.3 (土) — 10.2 (日)

吉田裕亮

Hiroaki YOSHIDA

OVERLAP

会期: 2016.5.21 (±) — 6.19 (日)





吉田の「OVERLAP」では、自分と他者、内と外、水平と垂直などの二項対立が重なることで、境界が曖昧になる事象に注目しました。入口すぐの展示室には、寒色と暖色を用い、対になった絵画《perspective》と、その2枚をつなぐ装置《virtual》を展示。別のスペースには、山の中、独りテントで過ごした経験をもとに、テントや寝袋、日記、ランタン、写真、テキストを使ったインスタレーションを発表しました。

Yoshida focuses on phenomena in which dichotomies such as between self and other and inside and outside overlap, and boundaries become ambiguous. He presented a pair of paintings made with cold and warm colors, a device that connects the two pieces, and an installation based on the experience of staying in a single tent in the mountains.

PROFILE

1994年群馬県生まれ。東京造形大学美術学科絵画専攻在籍。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール都庁 2015」(東京都庁第一本庁舎)、「トーキョーワンダーウォール公募 2015」(東京都現代美術館)、「シェル美術賞展 2015」(国立新美術館、東京)など。受賞歴に「ターナーアワード2015」ターナーアワード未来賞 (2016)、「トーキョーワンダーウォール公募 2015」トーキョーワンダーウォール賞。

Born in Gunma in 1994. Enrolled in a BA at Tokyo Zokei University. Recent exhibitions: "Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building", Tokyo Metropolitan Government Building, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "Shell Art Award 2015", The National Art Center, Tokyo. Awards: "Turner Award 2015", Turner Award Future Prize, 2016, "Tokyo Wonder Wall 2015", Tokyo Wonder Wall Prize.

恐ろしさと美しさが共存する人間の内面をテーマに、これまで出会ってきたさまざまな人間の 感情をシルクスクリーンで表現しました。平面作品のほか、木板を組み合わせた半立体作品を 展示。版画を刷ることを、人間の手によって増殖し続ける街とリンクさせ、人工物を肯定的に とらえながら、それらの存在意義や背景を考えることを提起しました。

Matsuura expressed various human emotions in silkscreen, with the theme of human beings' inner countenances coexisting with dread and beauty. In addition, he drew parallels between the multiple printings and the endless proliferation of urban communities, provoking thoughts on their significance and background.

PROFILE

1989年北海道生まれ。2012年道都大学美術学部デザイン学科卒業。主な展覧会に「松浦進展 -artificial propagation city-」(JR札幌駅 JRタワーARTBOX、2015)、「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、「松浦進展 -persona-」(RED AND BLUE GALLERY、東京、2013)、「松浦進展 -cryptic-」(黒い森美術館、北海道、2013)など。受賞歴に「第70回記念全道展」八木賞 (2015)。

Born in Hokkaido in 1989. Graduated with a BFA in Design from Dohto University. Recent exhibitions: "Susumu matsuura exhibition -artificial propagation city-", JR Sapporo station JR Tower ART BOX, Hokkaido, 2015, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "Susumu Matsuura exhibition -persona-", RED AND BLUE GALLERY, Tokyo, 2013, "Susumu matsuura exhibition -cryptic-", Kuroimori Museum, Hokkaido, 2013. Award: "70th Zendouten", Yagi-Award, 2015.

倉田 悟

Satoru KURATA

アジワルラの思い出

Memories of Ajewarlae

会期: 2016.9.3 (土) — 10.2 (日)



◎協賛: CMET株式会社 (3Dプリント)

井田大介

Daisuke IDA

ただいま、ハニー Honey, it is my home

会期: 2016.9.3 (土) — 10.2 (目)





アジワルラという架空の島をテーマに絵画を制作し、それと対になるテキストとともに展示空間を構成。鑑賞者が実際の出来事かどうか判断することが難しくなるように、時代や場所の設定を綿密に行い、作品に反映させました。事実や歴史認識の正しさを追求するのではなく、事実を持たない物語的絵画が現実へ介入する可能性を提示しました。

Kurata created pictures of a fictitious island called Ajewarlae and paired them with texts for the exhibition. Time and place settings were minutely reflected in the works, which did not pursue facts and accurate historical perceptions, but presented the possibility of fact-free narrative pictures intervening in our consensus reality.

PROFILE

1991年東京都生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程美術専攻油絵コース在籍。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、「理化学研究所 展示プロジェクト2014」(独立行政法人理化学研究所、神奈川、2014-2015)、「TURNER MUSEUM vol.1」(ターナーギャラリー、東京、2012) など。受賞歴に「シェル美術賞2013」審査員賞。

Born in Tokyo in 1991. Enrolled in an MFA in Oil Painting at Musashino Art University. Recent exhibitions: "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "RIKEN Exhibition Project 2014", RIKEN Yokohama Institute, Kanagawa, 2014-2015, "TURNER MUSEUM vol.1", Turner Gallery, Tokyo, 2012. Award: "SHELL ART AWARD 2013", Jury Prize.

インスタレーション作品《ただいま、ハニー》では、実家の養蜂場を模した養蜂箱と映像を展示。 井田が生まれ育った鳥取県日吉津村と戦後の日本に共通するイメージを抽出・視覚化し、現 在について考えるきっかけを提示しました。ほかの展示室では、観光客がインターネット上にアッ プロードした美術作品の画像を再構成し、3Dプリンターで制作した立体作品を展示。インター ネット環境における現代人の身体性を考察しました。

In *Honey, it is my home*, an installation featuring beekeeping boxes, evoking his family's apiary, and video, Ida isolated and presented images relating both to the village of Hiezu, Tottori where he grew up, and to the collective experience of postwar Japan. This offered viewers opportunities to think about the present day.

PROFILE

1987年鳥取県生まれ。2015年東京藝術大学大学院美術研究科修了。主な展覧会に「富士の山ビエンナーレ2016」 (富士、静岡)、「彫刻一気概と意外」(東京藝術大学美術館陳列館、2016)、「カオスラウンジ新芸術祭2016市街劇『地獄の門』」(いわき、福島)、「第19回岡本太郎現代芸術賞展」(川崎市岡本太郎美術館、2016)、「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)など。

Born in Tottori in 1987. Graduated with an MA from Tokyo University of the Arts in 2015. Recent exhibitions: "FUJINOYAMA BIENNALE 2016", Fuji, Shizuoka, "sculpture - anachronism & flash", The University Art Museum, Tokyo University of the Arts, 2016, "Chaos*lounge SIGAIGEKI 'The Gates of Hell'", Iwaki, Fukushima, 2016, "The 19th Exhibition of the Taro Okamoto Award for Contemporary Art", Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki, 2016, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo.

Part.4 TWS-Emerging 2016

村井祐希

Yuki MURAI

千年に一度のムライ MURAI once in Thousand years

会期: 2016.10.15 (土) — 11.13 (日)

DATA

◎協力:森栞(人形アニメーション作家)

桜間級子

Shinako SAKURAMA

SEVEN

会期: 2016.10.15 (土) — 11.13 (日)







「マントル」をコンセプトに、キャンバスを立体的に組み合わせ、絵画を三次元的に表現。彫刻やオリンピックといったモチーフを取り入れ、絵画の様式を問う作品を制作しました。壁や床に敷き詰められたキャンバスには、「オムライス絵具」と村井が名付けたシリコンを混ぜた絵具が盛られ、観客はそれを体感しながら作品を鑑賞しました。会場には村井が歌うグスタフ・マーラーの「交響曲第5番」が鳴り響きました。

Working with the concept of the mantle, Murai combined canvases into three-dimensional structures, creating paintings with three-dimensionality that questioned the basics of painting as a format. Canvases placed all over the walls and floor were covered with paint mixed with silicone, and the audience physically experienced the work while appreciating it.

PROFILE

1995年神奈川県生まれ。多摩美術大学絵画学科油画専攻在籍。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール都庁 2015」(東京都庁第一本庁舎、2016)、「市街劇『小名浜竜宮』」(清航館、福島、2016)、「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)など。受賞歴に「第18回岡本太郎現代芸術賞」特別賞(2015)、「第2回 CAF賞」優秀賞(2015)。

Born in Kanagawa in 1995. Enrolled in a BA in Oil Painting at Tama Art University. Recent exhibitions: "Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building", Tokyo Metropolitan Government Building, 2016, "city theater 'Onahama-Ryugu'", Seikokan, Fukushima, 2016, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo. Awards: "The 18th Taro Okamoto Award for Contemporary Art", Special Prize, 2015, "The 2nd CAF Art Award", Excellent Prize, 2015.

身体と現代社会の関係性をテーマに制作している桜間は、世の中に溢れている脱毛の広告に 着目し、その暴力性を7点の写真作品をとおして表現しました。女性モデルが脇を露に手を挙 げ魅惑的に写る作品には、他者の視線が内在化され、現代においてもなお開放されることのな い女性の在り方を問いかけます。「鎌倉七口」を引用して作品タイトルを付けるなど、作品や コンセプトには数字の7にまつわる事柄が散りばめられました。

Sakurama, whose work deals with relationships between the body and contemporary society, focused on advertisements for body hair removal that flood the media today, expressing their latent violence through seven photographic works. In pieces where the female model exposes her underarms, she questioned the role of women today, who internalize the gazes of others and are never released from their expectations.

PROFILE

1989年愛知県生まれ。2015年東京藝術大学先端芸術表現専攻修了。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)など。受賞歴に「トーキョーワンダーウォール公募2015」トーキョーワンダーウォール賞、「第12回写真『1_WALL』コンペティション」鷹野隆大審査員奨励賞(2015)、「MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013」水野誠一賞。

Born in Aichi in 1989. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts. Recent exhibition: "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo. Awards: "Tokyo Wonder Wall 2015", Tokyo Wonder Wall Prize, "12th edition of 1_WALL competition", Ryudai Takano Prize, 2015, "MITSUBISHI Chemical Junior Designer Award 2013", Seiichi Mizuno Prize.

Part.5 TWS-Emerging 2016

片貝葉月

Hazuki KATAGAI

現代実用私的装置展覧会

水上愛美

Emi MIZUKAMI

Undercurrent / Large eddy

底流 / Large eddy

会期: 2016.10.15 (±) — 11.13 (日)



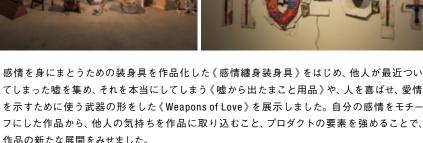




DATA

◎ギャラリー・トーク: 第1回12.3(土)15:00-15:40 第2回12.23(金・祝)15:00-15:40





Katagai created and exhibited Accessories for Wearing Emotions, which help wearers physically manifest their emotions, as well as Implements of Truth Fashioned from Lies, where lies that people have recently told are collected and turned into truths, and Weapons of Love, weapons intended to delight people and express feelings of love.

壁に取り付けられたパイプに吊り下げられた画布。テレビや広告、SNSなどから絶えず受け取っ ているさまざまな情報が蓄積され、脳内に出来上がった景色を、大きなストロークで鮮やかに描 きました。もうひとつの展示室の壁にはドローイングや絵画が展示され、床には女性の顔が毛並 で描かれたラグマットが敷かれ、鑑賞者は靴を脱ぎ、くつろいだ雰囲気で作品を楽しみました。

On a piece of cloth hanging from pipes mounted on the wall was projected an accumulation of information derived from TV and social media, creating images in the viewer's mind painted in broad strokes. In another gallery space containing a rug with a picture of a woman's face, viewers took off their shoes and enjoyed the work.

PROFILE

1992 年東京都生まれ。多摩美術大学絵画学科油画専攻在籍。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール都庁 2015 | (東京都庁第一本庁舎、2016)、「トーキョーワンダーウォール公募2015 | (東京都現代美術館)、「million bubbles in my mind」(多摩美術大学、東京、2015)、「= action/x」(多摩美術大学、東京、2014)、「table cross」(ターナー ギャラリー、東京、2014) など。受賞歴に「トーキョーワンダーウォール公募2015」トーキョーワンダーウォール賞。

Born in Tokyo in 1992, Enrolled in a BA in Oil Painting at Tama Art University, Recent exhibitions; "Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building", Tokyo Metropolitan Government Building, 2016, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "million bubbles in my mind", Tama Art University, Tokyo, 2015, "=action/x", Tama Art University, Tokyo, 2014, "table cross", TURNER GALLERY, Tokyo, 2014. Award: "Tokyo Wonder Wall 2015", Tokyo Wonder Wall Prize.

PROFILE

神奈川県生まれ。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール都庁2015」(都議会議事堂1階都政ギャラリー、2016)、 「トーキョーワンダーウォール公募2015 | (東京都現代美術館)など。受賞歴に「トーキョーワンダーウォール公募 2015」トーキョーワンダーウォール賞、トーキョーワンダーウォール審査員賞(山村浩二)、「第19回文化庁メディア 芸術祭」審査委員会推薦作品 (2015)。「International Talent Support 2016」ファイナリスト (イタリア)。

Born in Kanagawa, Recent exhibitions: "Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building". 1F Tosei Gallery, Tokyo Metropolitan Assembly Building, 2016, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo. Awards: "Tokyo Wonder Wall 2015", Tokyo Wonder Wall Prize, Jury Prize (Koji Yamamura), "The 19th



Japan Media Arts Festival", Jury Selections, 2015. Finalist of "International Talent Support 2016", Italy.

Part.5 TWS-Emerging 2016

新宅睦仁

Tomoni SHINTAKU

コンビニ弁当の山 – Time is money.

Mountains of Bento meals from convenience store -Time is money.

会期: 2016.11.26 (土) — 12.25 (日)



収穫祭

Harvest Festival

会期: 2016.11.26 (±) — 12.25 (日)









コンビニ弁当が賞味期限を1秒でも過ぎれば廃棄物になるという現実をテーマに、揚げ物、ス パゲティ、バランなどからなる弁当の山を描きました。積みあがった弁当の具でできた山の稜 線は、日本の国内総生産の数値を表しています。それぞれの絵には時計の針が取り付けられ、 コンビニで収録した環境音が時報となり、時を刻みました。見慣れたコンビニ弁当が現代社会 を反映する展示となりました。

Shintaku depicted mountains of boxed lunches, addressing the reality that massive volumes of convenience stores' boxed lunches become waste. The ridgeline of the mountains made from stacked lunch boxes reflected the GDP of Japan, and clock hands were mounted on each picture, while ambient sound recorded at convenience stores became background information and marked the passage of time.

PROFILE

1982年広島県生まれ。2005年九州産業大学芸術学部美術学科卒業。2013年新宿調理師専門学校調理師本科卒業。 主な展覧会に「カップヌードルの滝」(HAGISO、東京、2015)、「退廃藝術展2015」(DESK/okumura、東京)、「トーキョー ワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)など。受賞歴に「CCC展覧会企画公募」入賞(2016)。

Born in Hiroshima in 1982. Graduated with a BA in Kyushu Sangyo University in 2005. Graduated from Shinjuku Culinary Institute in 2013. Recent exhibitions: "Streams of Cup noodles", HAGISO, Tokyo, 2015, "Exhibition Entartete Kunst 2015", DESK/okumura, Tokyo, 2015, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo. Award: "CCC New Creators Competition 2016".

予備校時代に描いたデッサン、大学生の時に制作した絵、何も描かれていないキャンバスなど、 さまざまなテーマや技法で描かれた作品を壁面に隙間なく展示しました。会期中は染谷が展 示室に在廊し、無地のキャンバスに描き足していきました。これまでに描いた作品から制作中 の絵画を全て見渡すことで、作家がこれからの制作について一度立ち止まり思索する機会と なりました。

Someya covered the walls completely with drawings from his preparatory school days, paintings made in university, blank canvases, etc. During the exhibition he painted on the blank canvases, and the overall view of works ranging from past efforts to works in progress gave opportunities to explore art's arc of development.

PROFILE

1982年茨城県生まれ。2015年東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻油画技法材料第一研究室修士課程修了。 主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、「見ること・描くこと 一油画技法材料 研究室とその周縁の作家たち」(東京藝術大学、2014)など。受賞歴に台東区長賞(2013)。

Born in Ibaraki in 1982. Graduated with an MFA in Oil Painting from Tokyo University of the Arts in 2015. Recent exhibitions: "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "The Oil Painting -Technique and Material Department and the Writers of the Periphery", Tokyo University of the Arts, 2014. Award: "Mayer of Taito City incentive award", Mayer of Taito City prize, 2013.

Part.6 TWS-Emerging 2016

稲川江梨

Eri INAGAWA

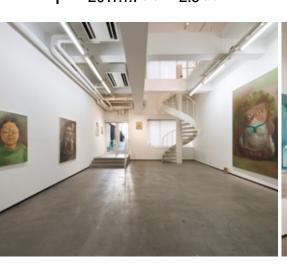
タヌキ Tanuki

会期: 2017.1.7(土) — 2.5(日)

赤池千怜 Chisato AKAIKE

pathos

会期: 2017.1.7(土) — 2.5(目)







実家の電気店を題材に、事務所にあるタヌキや招き猫などの縁起物、そこで暮らす家族を描いた作品を発表しました。螺旋階段でつながるTWS渋谷の2つの展示空間を3階建ての実家に見立て、1階を事務所、2階を住居として展示を構成。初めて挑んだ200号の大作《タヌキ》は圧倒的な存在感を放ち、非現実な空気をまとう縁起物をキャンバス上で表現しました。

Focusing on the electric appliance shop run by her family, Inagawa created works depicting good fortune-bringing mascots in the shop, like Tanuki (raccoon dog) and Manekineko (beckoning cat) figurines, and her family members that live there, presented in a gallery space made to resemble her family home. *Tanuki*, her first work at the massive size of 259 × 194 cm, asserted an overwhelming presence, conveying the totemic object's sense of unreality.

PROFILE

1988年岐阜県生まれ。2011年名古屋造形大学洋画コース卒業。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール都庁 2015」(東京都庁第一本庁舎)、「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、「稲川江梨個展 ハッピーエンドレス」(千葉市民ギャラリー・いなげ、2015)、「460人展」(名古屋市民ギャラリー矢田、2012)など。受賞歴に「トーキョーワンダーウォール公募2015」トーキョーワンダーウォール賞。

Born in Gifu in 1988. Graduated with a BA from Nagoya Zokei University of Art & Design in 2011. Recent exhibitions: "Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building," Tokyo Metropolitan Government Building, "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "Eri Inagawa Solo Exhibition 'Happy Endless'", Chiba Citizens' Gallery Inage, 2015, "460ninten", Nagoya Citizens' gallery Yada, Aichi, 2012. Award: "Tokyo Wonder Wall 2015", Tokyo Wonder Wall Prize.

ギリシャ語で感情を意味する「pathos」と題された本展では、視野と感情の解放をテーマにインスタレーション作品を発表しました。緻密に描かれた絵画のほか、展示空間の中心に置かれたハンマーを使って破壊した流木など、さまざまな形態の作品で構成することによって、鑑賞者が自身の感情と向き合うことを意図しました。

With the title of *pathos*, the Greek word meaning emotion, Akaike presented an installation work on the theme of liberation of viewpoint and emotion. It consisted of works of various forms, including meticulously executed paintings and driftwood destroyed with hammers, and was intended to encourage viewers to face their own emotions.

PROFILE

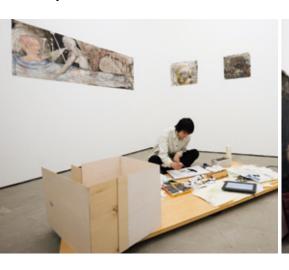
1989年東京都生まれ。2014年女子美術大学大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域修了。主な展覧会に「トーキョーワンダーウォール公募2015」(東京都現代美術館)、「ワンダーシード2015」(トーキョーワンダーサイト 渋谷)、「赤池千怜個展」(ギャラリーマルヒ、東京、2015) など。受賞歴に「トーキョーワンダーウォール公募2015」トーキョーワンダーウォール審査員賞 (鴻池朋子)。

Born in Tokyo in 1989. Graduated with an MFA in Oil Painting from Joshibi University of Art and Design in 2014. Recent exhibitions: "Tokyo Wonder Wall 2015", Museum of Contemporary Art Tokyo, "WONDER SEEDS 2015", TWS Shibuya, "Chisato Akaike Solo Exhibition", Gallery Maruhi, Tokyo, 2015. Award: "Tokyo Wonder Wall 2015", Jury Prize (Tomoko Konoike).

庄司朝美

Asami SHOJI

夜のうちに during the night 会期: 2017.1.7(±) — 2.5 (日)





蛇と鳥の目線で描かれたアクリル板の作品とアニメーションを、2つの展示室にわけて発表。油絵具の流れるような筆致に人間の身体性が表現され、等身大のアクリル板の作品では、描かれた人物に鑑賞者が同化していくような絵画空間を作ることを試みました。また、《画家の机》と題されたスペースでは公開制作を行い、即興性の高いドローイングを制作しました。

Shoji exhibited drawings and animation, including works on acrylic panel drawn from the points of view of snakes and birds. Human physicality was expressed through oil paint brushstrokes, and a life-sized acrylic panel work attempted to assimilate the viewer with the people rendered. She also did a public painting performance in a space entitled *The Painter's Desk*.

PROFILE

1988 年生まれ。2012年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。主な展覧会に「きぬぶるい」(0ギャラリーup.s、東京、2016)、「トーキョーワンダーウォール都庁2015」(東京都庁第一本庁舎、2016)、「トーキョーワンダーウォール公募 2015」(東京都現代美術館)、「Mondi Paralleli」(Atelier Controsegno、ボッツォーリ、イタリア、2015) など。受賞歴に「トーキョーワンダーウォール公募 2015」トーキョーワンダーウォール賞、「第1回宮本三郎記念デッサン大賞」審査員賞 (2011)。 Born in 1988. Graduated with an MFA from Tama Art University in 2012. Recent exhibitions: "Kinuburui", O Gallery up.s, Tokyo, 2016, "Tokyo Wonder Wall 2015 at Tokyo Metropolitan Government Building", Tokyo Metropolitan Government Building, 2016, "Mondi Paralleli", Atelier Controsegno, Pozzuoli, Italy, 2015. Awards: "Tokyo Wonder Wall 2015", Tokyo Wonder Wall 2015", Tokyo Wonder Wall Prize, "1st Miyamoto Saburo Biennial Award for Original Sketch", Jury Prize, 2011.

WONDER SEEDS 2017

フンダーシード 2017

2017.2.25 (±) -3.26 (B)











若手アーティストの作品を展示・販売する展覧会 An exhibition to show and sell works by young artists.

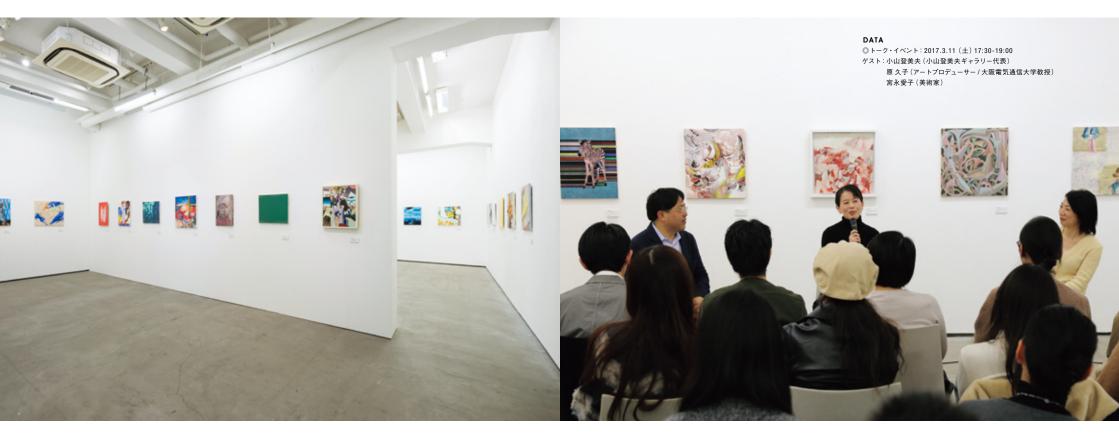
「ワンダーシード」は"BUY = SUPPORT"(作品購入が支援となる)をコンセプトに、若手アーティストを対象に公募を行い、入選作品を展示・販売する展覧会です。 S10号以下の作品をとおして、多くの美術愛好家が若手アーティストの良作に触れる場を作ることを目的としています。15回目となる2016年度は、本展公募審査員の小山登美夫氏と宮永愛子氏、アートプロデューサーの原久子氏を迎えたトーク・イベントを実施。作品を言葉で伝える力の磨き方、作品の売り方や値付けの考え方など実体験をもとに、自分の作品を伝え、見る人を広げていくコミュニケーションの大切さを共有しました。

"WONDER SEEDS" is an exhibition that solicits submissions of works from young artists, and selects works to show and offer for sale, based on the concept of "BUY = SUPPORT". By accepting works no larger than S10 (53 x 53 cm), the aim is to present works by a large number of young artists and create a space where many art lovers can encounter them. For the fifteenth show in the series, in fiscal 2016, a talk event was held with exhibition juries Tomio Koyama and Aiko Miyanaga and art producer Hisako Hara. Based on their actual experiences regarding honing the verbal skills to convey ideas, and approaches to selling and pricing, they discussed the importance of communication in explaining one's own work and reaching a wider audience.

DATA

◎会場:トーキョーワンダーサイト渋谷 ◎審査員:桑久保徽(美術家)、小山登美夫(小山登美夫ギャラリー代表)、宮永愛子(美術家)、吉野誠一(コレクター)、今村有策(トーキョーワンダーサイト館長)

WONDER SEEDS 2017 WONDER SEEDS 2017



入選者

荒木名月 岡本裕希子 近藤夕琴 津川奈菜 平松実紗 村野正徳 飯田翔之介 岡村よるこ 近藤勇介 辻野理恵 深田桃子 森下 光 仲 衿香 池上怜子 緒方桜奈 齋藤華奈子 福島寧子 森田可子 池田 樹 沖見かれん 笹久保 忠 中田日菜子 福西鮎子 れなかわかた 石田浩美 奥谷風香 白熊いずみ 中野 優 福原穂奈美 山田 茜 五十川 祐 加藤理佐子 松園彩芽 永井 優 富士和則 游 伊藤由貴 金森満理奈 鈴木晃平 沼野伸子 藤森 哲 渡部未乃 今井 恵 川上喜朗 隅井研太 野堀佳代子 松尾 龍 上野あづさ 岸田めぐみ 瀬戸口祐佳 濱口綾乃 松村咲希 氏江樹穂 九鬼知也 たかはし 浜口麻里奈 松本マニコ 内山総一郎 栗原祐太 瀧聞沙世 林 もえ mizuki 岡本博紀 古賀一樹 田中義隆 朴 東竜 宮崎浩太

Selected artists

Natsuki ARAKI Shonosuke IIDA Ryoko IKEGAMI Itsuki IKEDA Hiromi ISHIDA Yu ISOGAWA Yuki ITO Kei IMAI Azusa UENO Kiho UJIE Soichiro UCHIYAMA Hiroki OKAMOTO Yukiko OKAMOTO Yoruko OKAMURA Ohna OGATA Karen OKIMI Fuka OKUTANI

Risako KATO Marina KANAMORI Yoshiro KAWAKAMI Megumi KISHIDA Tomoya KUKI Yuta KURIHARA Kazuki KOGA Yuko KONDO Yusuke KONDO Kanako SAITO Atsushi SASAKUBO Izumi SHIROKUMA Ayame SHOEN Kohei SUZUKI Kenta SUMII Yuka SETOGUCHI TAKAHASHI

Sayo TAKIGIKU Yoshitaka TANAKA Nana TSUGAWA Rie TSUJINO Erika NAKA Hinako NAKATA Yu NAKANO Masaru NAGAI Nobuko NUMANO Kayoko NOBORI Ayano HAMAGUCHI Marina HAMAGUCHI Moe HAYASHI Tong Ryong PAK Misa HIRAMATSU Momoko FUKADA Yasuko FUKUSHIMA

Ayuko FUKUNISHI Honami FUKUHARA Kazunori FUJI Satoshi FUJIMORI Ryu MATSUO Saki MATSUMURA Maniko MATSUMOTO mizuki Kota MIYAZAKI Masanori MURANO Hikaru MORISHITA Kako MORITA Rena KAWAKATA Akane YAMADA You Mino WATABE

Marico AOKI 青木真莉子

「TWS-Emerging 2014: Shining voices」参加



《はねあがるは - 刻む、少し昔の鳥の唄 - 》 Tooth jumping up -An old bird song embedded in memory - , 2017

私たちの目には見えない次元に存在する、無数の世界を可視化しようと試み続けている青木。 今回は展示室の中央に舞台を設置し、3つのスクリーンと立体を含む新作の映像インスタレーションを発表しました。

Aoki consistently seeks to render visible the myriad worlds that exist in dimensions invisible to our eyes. For this exhibition, she set up a stage in the center of the gallery and presented a new video installation including three screens and three-dimensional works.

PROFILE

1985 年埼玉県生まれ。2012 年東京造形大学大学院造形研究科造形専攻美術研究領域修了。主な展覧会に「NEW VISION SAITAMA 5 迫り出す身体」(埼玉県立近代美術館、2016)、「終いには宇宙 をつくった。」(Art Center Ongoing、東京、2016)、「Unusualness Makes Sense – Alternative Art Practices by Thai and Japanese Artists」(チェンマイ大学アートセンター、タイ、2016) など。

Born in Saitama in 1985. Graduated with an MFA from Tokyo Zokei University in 2012. Recent exhibitions: "NEW VISION SAITAMA 5: The Emerging Body", The Museum of Modern Art, Saitama, 2016, "Finally I made a space.", Art Center Ongoing, Tokyo, 2016, "Unusualness Makes Sense -Alternative Art Practices by Thai and Japanese Artists", Chiang Mai University Art Center, Thailand, 2016.



3名の若手アーティストがとらえた「クウキ」

"Atmosphere" as interpreted by three young artists

「TWS-NEXT」は、「TWS-Emerging」やレジデンス・プログラムなど、トーキョーワンダーサイトの事業に参加した若手アーティストの継続的な支援を目的に開催するプログラムです。私たちは、空気を本来の物質的なものとは別に、心理学的な見地から「空気感」としてとらえることがあります。本展では、自然や物、人との関わりから生まれる「クウキ」をテーマに、作品をとおして他者や自己の存在を顕在化させ、そこから見えてくる人間の心理や社会環境を考察しました。3名のアーティストによってとらえられた「クウキ」が、私たちを取り巻く関係性に新たな可能性を提示することとなりました。

"TWS-NEXT" is a program aimed at offering continuing support to young artists who have participated in Tokyo Wonder Site projects such as "TWS-Emerging" and the Residence Program. All of us sometimes feel "atmosphere" in a psychological sense, apart from its original material meaning. In this exhibition, the works rendered manifest the presences of the Self and the Other, and examined the psychology and social environment of human beings, with the theme of "atmosphere" as created by relationships among nature, things, and people. "Atmosphere," as interpreted by these three artists, presented new possibilities for the relationships that are all around us.

DATA

◎会場:東京都美術館 ギャラリーB ◎協力:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館

伊藤 久也、Hisavalto *Colony* 2017

友政麻理子 Mariko

伊藤久也 Hisaya ITO

「平成26年度 二国間交流事業プログラム 〈ソウル〉」派遣

DATA

◎ハッシーさんの絵本読み聞かせ会: 2017.3.4 (土) 114:00-15:00 216:00-17:00

企画: 友政麻理子

Mariko TOMOMASA 友政麻理子

「平成25年度 二国間交流事業プログラム〈台北〉」派遣



《おぼえておきたいこと》something remember, 2011-2017

《あれは、私の父です》That is My Father., 2016

伊藤は日々出会う人やモノ、ごくありふれた日常に「潜むもの」を取り出して作品化しています。 今回は長野のある地域に伝わる迷信や広島の団地が作り出す小世界を題材にした映像作品、 弟の等身大の彫刻と旅をする写真シリーズを展示しました。

Ito draws forth things that lurk within the wholly unremarkable people and objects that we encounter each day and transforms them into works of art. This time, he exhibited video works dealing with superstitions that are preserved in a certain area of Nagano and with the miniature world that exists in a public housing complex in Hiroshima, and a photo series of himself traveling with a life-size statue of his younger brother.

PROFILE

1987 年東京都生まれ。2014 年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。主な展覧会に「まちをとらえ る一記憶のドキュメント」(藤沢市アートスペース、神奈川、2016)、「トーキョー・ストーリー2015」(TWS 本郷)、「未見 の星座<コンステレーション>」(東京都現代美術館、2015)など。

Born in Tokyo in 1987. Graduated with an MA in Inter-media Art from Tokyo University of the Arts in 2014. Recent exhibitions: "Perspective of an artist -the minutes of memory", Fujisawa City Art Space, Kanagawa, 2016, "TOKYO STORY 2015", TWS Hongo, "Constellations", Museum of Contemporary Art Tokyo, 2015.

友政は見知らぬ人と食事の間だけ親子関係になる映像シリーズや、モノを介し間接的にコミュ ニケーションを取ることで生み出される他者との関係性を示す新作を展示。また絵本好きのハッ シーさんによる読み聞かせイベントも企画しました。

Tomomasa presented a video series exploring the quasi-parent-child relationships that can arise between strangers only during meals, and new works representing the relationships with others created by indirectly communicating through things. She also organized an event in which picture book lover Hassy read stories aloud.

PROFILE

1981年埼玉県生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。主な展覧会に「もう1つの選 択 Alternative Choice」(横浜市民ギャラリーあざみ野、2015)、「近づきすぎてはいけない - Have a meal with Father-」 (TALION GALLERY、東京、2015)、「トーキョー・ストーリー2014」(TWS 本郷) など。

Born in Saitama in 1981. Earned her PhD from Tokyo University of the Arts in 2012. Recent exhibitions: "Alternative Choice", Yokohama Civic Art Gallery Azamino, 2015, "Trying Not to Be Too Close -Have a meal with Father", TALION GALLERY, Tokyo, 2015, "TOKYO STORY 2014", TWS Hongo.



Creator-in-Residence Program

クリエーター・イン・レジデンス・プログラム



在期間中に、世界25カ国から62名のクリエーターを迎 催したランチ・ミーティングでは、滞在クリエーター同士に加え、国内外のこ 台北、ベルリンに8名の日本人クリエーターを派遣しました

ar, the second year after the facilities relocated to Sumida-ku and resumed full-scal , we implemented four programs: Exchange Residency Program, International Creator idency Program, Institutional Recommendation Program, and Research Residency Program. For the International Creator and Research Residency Programs there were 321 applicants, more than twice the number of the previous fiscal year, and 62 creators from 25 countries were we over three periods (May-July, September-November, and January-March). Regular lunch gatherings created opportunities for resident creators, as well as artists from Japan and other countries, to interact. In the Exchange Residency Program, eight Japanese creators were sent to Basel, Seoul, London, Taipei and Berlin.

二国間交流事業プログラム提携機関 Partner Institutions for Exchange Residency Program

MMCA Residency Goyang (Seoul), Artist-in-Residence Taipei, Treasure Hill Artist Village (Taipei)















二国間交流事業プログラム

Exchange Residency Program

提携を結んだ海外のアートスペースや文化機関と相 互にクリエーターの派遣・招聘を行うプログラム。

Residency Program in collaboration with overseas residencies and cultural art institutes to send and receive creators between the institutions.

派遣クリエーター Creators from TWS

[TOKYO-BERLIN]

2016.4.4 (月) -6.28 (火)

児嶋サコ Sako KOJIMA

2016.7.4 (月) -9.27 (火)

瀧 健太郎 Kentaro TAKI

2016.10.3 (月)-12.27 (火)

大和田俊 Shun OWADA

2017.1.5 (木) -3.31 (金)

持田敦子 Atsuko MOCHIDA

[TOKYO-BASEL]

2016.4.12 (火) -6.30 (木)

村上華子 Hanako MURAKAMI

[TOKYO-SEOUL]

2016.5.6 (金) -7.29 (金)

山本高之 Takayuki YAMAMOTO

[TOKYO-LONDON]

2016.6.7 (火) -7.7 (木)

山田健二 Kenji YAMADA

[TOKYO-TAIPEI]

2016.11.25 (金)-2017.2.22 (水)

丸山美紀 Miki MARUYAMA

招聘クリエーター Creators to TWS

[SEOUL-TOKYO]

2016.5.6 (金) -7.29 (金)

コ・ジェウク KOH Jaewook

[LONDON-TOKYO]

2016.6.27 (月) -7.29 (金)

ダンカン・ウールドリッジ

Duncan WOOLDRIDGE

[BERLIN-TOKYO]

2016.9.1 (木) -11.24 (木)

シリン・サバヒ Shirin SABAHI

[MADRID-TOKYO]

2016.10.11 (火) -11.22 (火)

アンドレア・カネパ Andrea CANEPA

2016.10.11 (火) -11.22 (火)

フェラン・プラ Ferran PLA

[TAIPEI-TOKYO]

2017.1.6(金)-3.31(金)

チャン・カイチュン CHIANG Kai-chun

[BASEL-TOKYO]

2017.1.6 (金)-3.31 (金)

クレマンス・ショケ & ミカエル・ガミオ

Clémence CHOQUET & Mickaël GAMIO

海外クリエーター招聘プログラム

International Creator Residency Program

海外の実力ある中堅クリエーターに新たな創作活動 の機会を提供する公募プログラム。

Residency program based on open call, targeting middle-careered international creators.

2016.4.28 (木) -7.26 (火)

アンドレアス・グライナー

Andreas GREINER

2016.5.6 (金)-7.29 (金)

ミルナ・バーミア Mirna BAMIEH

2016.9.8 (木) -11.25 (金)

リギョン Ligyung

2017.1.6(金)-3.31(金)

トビアス・ツィローニィ Tobias ZIELONY

2017.1.6(金)-3.31(金)

グリッサゴーン・ティンタップタイ

Krissakorn THINTHUPTHAI

芸術文化・国際機関推薦プログラム

Institutional Recommendation Program

公的機関や民間の芸術文化学術団体の推薦により、

リサーチや学術研究を目的としたプログラム。

Residency program for creators selected by public

institutions or private art organizations to pursue their artistic or academic research.

2016.5.1(日)-6.27(月)

パトリス・バルヴェイ Patrice BALVAY

2016.5.11 (水)-7.29 (金)

ベッティーナ・ホフマン Bettina HOFFMANN

2016.5.11 (zk) -7.27 (zk)

レイウィン・ヒル Raewyn HILL

2016.7.1(金)-7.29(金)

ラース・キャリアン Lars CARLÉN

2016.7.26 (火) -9.30 (金)

チョウ・ユンジュ CHOU Yun Ju

2016.8.24 (水)-9.24 (土)

マーセ・ロドリゴ・ガルシア

Merce RODRIGO GARCÍA

2016.9.1 (木) -11.23 (水・祝)

シャルル・ケヴィヨン Charles QUEVILLON

2016.10.27 (木) -11.10 (木)

シグネ・ハーマン Sigune HAMANN

2016.11.21 (月)-11.28 (月)

カルル・マズロ Karl MAZLO

2016.11.26 (土) -12.22 (木)

ヴァレリオ・サニカンドロ

Valerio SANNICANDRO

2017.1.5 (木) -1.29 (日)

エヴァン・ジャコビー Evan IACOBY

2017.1.10 (火) -3.31 (金)

エリザベス・ベリヴォ Elisabeth BELLIVEAU

2017.3.13 (月) -3.25 (土)

ドミニック・キュナン Dominique CUNIN

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

東京を舞台とした文化芸術の研究や、新たな創作の リサーチを行うクリエーターを対象とした公募プロ グラム。

Residency program for creators who conduct research activities on arts and culture for new creation in the city of Tokyo.

2016.5.5 (木・祝) -6.1 (水)

キム・ジェウォン KIM Jeawon

2016.5.7(土)-5.31(火)

アーシャ・ピアスチーク Asia PIAŚCIK

2016.5.9(月)-6.6(月)

オリヴァー・クリンペル Oliver KLIMPEL

2016.6.6(月)-7.27(水)

チーヤン・ン Tsz Yan NG

2016.6.6(月)-7.28(木)

クリスチャン・ジルー Christian GIROUX

2016.6.6 (月)-7.29 (金)

ディラン・ラルデリ Dvlan LARDELLI

2016.9.1 (木) -9.29 (木)

コンラッド・ユーシチンスキ

Konrad JUŚCIŃSKI

2016.9.1 (木) -9.29 (木)

ヘレナ・ウェスターリンド

Helena WESTERLIND

2016.9.2 (金) -9.29 (木)

クリス・ロメロ Chris ROMERO

2016.9.3 (土) -9.30 (金)

ルイス・グラネ Luis GRANE

2016.10.3 (月)-11.25 (金)

ウンベルト・ヂューク Humberto DUQUE

2016.10.4 (火) -11.30 (水)

アンネ・ビュッシャー Anne BÜSCHER

2016.10.4 (火) -11.24 (木)

アリツィア・ドブルツカ&オリヴィエ・リション

Alicja DOBRUCKA & Olivier RICHON

2017.1.5 (木) -2.16 (木)

フィオナ・アムンゼン Fiona AMUNDSEN

2017.1.5 (木) -2.1 (水)

ジョバンニ・インネッラ Giovanni INNELLA

2017.1.5 (木) -2.1 (水)

鈴木直江 Naoe SUZUKI

2017.2.6 (月) -3.30 (木)

イルワン・アーメット&ティタ・サリナ

Irwan AHMETT & Tita SALINA

2017.2.6 (月)-3.31 (金)

ジュスティーヌ・エマー Justine EMARD

063

2017.2.6 (月) -3.31 (金) エマニュエル・ギヨー

Emmanuel GUILLAUD

2017 2 9 (木) -3 23 (木)

カロリーナ・ブレグーワ

Karolina BREGUŁA

Creator-in-Residence Creator-in-Residence

児嶋サコ

Sako KOJIMA

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉

Tokyo-Berlin Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.4.4 (月) — 6.28 (火)



Hamster Collection - A Hamster Works and Collects Art Exhibition View ©Toshihiko Mitsuya and June 14
Meyer-Grohbrügge&Chermayeff, Heike Gallmeier, Taro Izumi, Olivia Berckemeyer



Olivia Berckemeyer のための労働 窓ふき Labour for Olivia Berckemeyer Cleaning Window

自身がハムスターとなり、人間のルーティン・ワークを想起させるパフォーマンスを継続して行っている児嶋は、労働とその対価の関係を通じて、芸術作品の真価を問うプロジェクトを展開。ベルリン在住の9組のアーティストと契約を結び、ハムスターに扮した児嶋が労働を対価にそれぞれの作品を1ヶ月譲り受け、コレクション展を開催しました。また展覧会終了後にはドローイング制作に集中し、描き上げた約40点を展示しました。

Kojima, who transforms herself into a hamster and does performances that evoke the routine work of humans, obtained works from nine local artists (individuals or units) under labor contract in order to reconsider the true value of art, and held an exhibition of this collection. She also exhibited about 40 drawings that were executed after the above-described exhibition.

PROFILE

1976年東京都生まれ。2009年よりベルリンを拠点に活動。2001年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程修了。主なパフォーマンスに「The Reason Why I Become a Hamster」(Behaviour Festival 2015、グラスゴー)、主な展覧会に「THE ECHO-spreading of light-」(ケルン日本文化会館、2013)など。

Born in Tokyo in 1976. Lives and works in Berlin since 2009. Graduated with an MFA in Painting from Kyoto City University of Arts, 2001. Recent performance: "The Reason Why I Become a Hamster", Behaviour Festival, Glasgow, 2015. Recent exhibition: "The Echo: spread of light", the Japan Cultural Institute in Cologne, 2013.

瀧 健太郎

Kentaro TAKI

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉

Tokyo-Berlin Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.7.4 (月) — 9.27 (火)



イメージと場の断片を集合化させ、掛け合わせる方法を用いてヴィデオアート作品を制作している瀧は、ベルリンの都市としての歴史的背景と現状を調査。そこから「症候都市」というテーマを立ち上げ、都市空間の地政学的・時流的な「過剰さ」と「空虚さ」に着目して消費材・家電ゴミを収集。廃墟に見立てた都市の全体像としてオブジェを制作し、その表面にベルリンの都市風景の映像を投影する、大型のオブジェ作品を発表しました。

After investigating the historical background and current circumstances of the city of Berlin, Taki advanced the theme of "Syndro-polis," and created an object conveying an overall view of the city as ruins. He then presented a large scale video object that projected images of Berlin's urban landscape onto its surface.

PROFILE

1973年大阪府生まれ。東京を拠点に活動。1998年武蔵野美術大学大学院造形研究科映像コース修了。主な展覧会に「Regeneration Movement: Rethinking Technology in the Digital Age」(国立台湾美術館、台中、2016)、「VIDEOs-critical dreams-」(MORI YU Gallery、京都、2015) など。

Born in Osaka in 1973. Based in Tokyo. Graduated with an MFA from Musashino Art University in Imaging Arts and Sciences in 1998. Recent exhibitions: "8th Cairo Video Festival", Cairo, 2017, "Regeneration Movement: Rethinking Technology in the Digital Age", National Taiwan Museum of Fine Arts, Taichung, 2016, "VIDEOs: critical dreams", MORI YU Gallery, Kyoto, 2015.

Creator-in-Residence Creator-in-Residence

大和田 俊

Shun OWADA

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉

Tokyo-Berlin Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.10.3 (月) — 12.27 (火)





持田敦子

Atsuko MOCHIDA

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉

滞在期間: 2017.1.5 (木) — 3.31 (金)

Tokyo-Berlin Exchange Residency Program

Installation view of "Ancient air/Present Sound" 2016

View of Open Studio 2016 Photo: Hideki Umezawa

"Push the wall" 2017 "Bethania" 2017

石灰岩を素材としたサウンド・インスタレーション・シリーズを制作している大和田は、ベルリン 郊外のリューダースドルフなどの石灰岩採掘地をリサーチ。新作を制作し、展示「Ancient air/ Present sound」を開催しました。また、電子音楽やサウンドアート・ニューメディアのためのオ ルタナティブスペースも調査。現地のキュレーターやスペース運営者とコンタクトを取る中で、 パフォーマンスの機会を得ました。

Owada, who produces sound installations using limestone as a material, studied limestone mining areas on the outskirts of Berlin. He created a new work and held an exhibition entitled "Ancient Air / Present Sound". He also obtained several opportunities to carry out performances in the city.

PROFILE

1985年栃木県生まれ。東京を拠点に活動。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。主な 展覧会に「Malformed Objects - 無数の異なる身体のためのブリコラージュ」(山本現代、東京、2017)、「Paleo-Pacific」 (TWS 本郷、2016) など。受賞歴に「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル Vol.9」最優秀賞 (2014)。

Born in Tochigi in 1985. Lives and works in Tokyo. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2011. Recent exhibitions: "Malformed Objects - Bricolage for myriads of other bodies", YAMAMOTO GENDAI, Tokyo, 2017, "Paleo-Pacific" (solo), TWS Hongo, 2016. Award: "TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL Vol.9", Grand Prize, 2014.

さまざまな空間に介入し、建築的な規模の作品を発表している持田は、壁を挟んだ他者との コミュニケーションやその空間の文脈や知覚の変容をコンセプトに、回転扉状のインスタレー ションを出現させる「Push the Wall」プロジェクトの実現に向けてリサーチを重ねました。その ほか、スタジオ内に単管で構造体を組んで他者との交流や共同制作のためのプラットフォーム 「Bethania」を築きました。

Mochida has been conducting research towards realization of the "Push the Wall" project, in which rotating door-like installations appear in Berlin. In addition, she built a platform called "Bethania" in the studio, used for exchange and collaborative work with others.

PROFILE

1989年東京都生まれ。ドイツと東京を拠点に活動。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻、ワイマール・ バウハウス大学大学院 Public Art and New Artistic Strategies 専攻在籍。主な展覧会に「The Principle of Happiness」(旧 刑務所、Galerie Eigenheim、Kunstfest Weimar、ワイマール、2015) など。

Born in Tokyo in 1989. Lives and works in Germany and Tokyo. Enrolled in an MFA course at Tokyo University of the Arts in 2014 and an MFA course (Public Art and New Artistic Strategies) at Bauhaus-Universität Weimar in 2015. Recent exhibition: "The Principle of Happiness" former prison in Weimar, Galerie Eigenheim, Kunstfest Weimar, 2015.

Creator-in-Residence Creator-in-Residence

村上華子

Hanako MURAKAMI

二国間交流事業プログラム〈バーゼル〉

Tokyo-Basel Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.4.12 (火) — 6.30 (木)







山本高之

Takayuki YAMAMOTO

二国間交流事業プログラム〈ソウル〉

滞在期間: 2016.5.6 (金) — 7.29 (金)

Tokyo-Seoul Exchange Residency Program

From Current Impression, 2016

Extract from Current Impression, (5 ' 42"), 2016-2017

言葉やイメージの複製技術をテーマにプロジェクトを展開している村上は、バーゼル市内にあるパピエミューレ印刷博物館の協力を得て、活版印刷技術の一種である鋳植機ライノタイプによる作品を制作。村上がバーゼルを象徴する言葉ととらえた「カレンシー」から派生する「流通」「通貨」「現在」といった言葉の活字を鋳造、印刷するとともに、価値の流通とその視覚化をめぐる映像作品《Current Impression》を制作しました。

Murakami has been conducting projects whose theme is mechanical reproduction of words and images. With the cooperation of the Basel Paper Mill, also known as the Swiss Museum for Paper, Writing and Printing, she created a series of works with a hot metal typesetting system as well as a video work *Current Impression* to explore currency of values and its visualization.

PROFILE

1984年東京都生まれ。パリを拠点に活動。2012年東京藝術大学大学院映像研究科修士課程修了後、渡欧。2014年ル・フレノワ国立現代アートスタジオ修了。主な展覧会に「ANTICAMERA (OF THE EYE)」(タカ・イシイギャラリー、東京、2016)、「ザ・パーフェクト」(パリ日本文化会館、2016) など。受賞歴に「VOCA展 2017」 佳作賞。

Born in Tokyo in 1984. Lives and works in Paris. Graduated with an MFA in New Media from Tokyo University of the Arts in 2012. Earned her postgraduate diploma from Fresnoy National Studio of Contemporary Art in 2014. Recent exhibitions: "ANTICAMERA (OF THE EYE)" (solo), Taka Ishii Gallery, Tokyo, 2016, "La Parfaite" (solo), Maison du la culture du Japon à Paris, 2016. Award: "Vision of Contemporary Art (VOCA) 2017", Prize for Excellence.

ソウル・オリンピック (1988年) に着目し、この近過去の出来事をどのように民話としてとらえるかをテーマに活動を展開。韓国の民話の「昔々、虎がタバコを吸っていた頃、おじいさんとおばあさんが……」という言い回しと、中島敦の『山月記』に登場する虎になってしまった傲慢な詩人とを結び付け、さらにソウル・オリンピックのキャラクター、ホドリが虎であることに着想を得て作品を制作し、今後の活動の展開を構想しました。

Focusing on the 1988 Seoul Olympics, Yamamoto has carried out activities exploring how to view this relatively recent historical event as folklore. He created works inspired by the tiger, which appear in Korean folk tales, in Atsushi Nakajima's *Sangetsuki* (Tiger-Poet), and as a mascot character for the Seoul Olympics.

PROFILE

1974年愛知県生まれ。名古屋を拠点に活動。2002年チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザインより MFA 取得。主な展覧会に「コチ=ムジリス・ビエンナーレ 2016」(インド、2016-2017)、「物語のかたち」(せんだいメディアテーク、2015)、「ゴー・ビトゥイーンズ」(森美術館、東京、2015) など。

Born in Aichi in 1974. Lives and works in Nagoya. Graduated with an MFA from Chelsea College of Art and Design in 2002. Recent exhibitions: "Kochi-Muziris Biennale 2016", India, 2016-2017, "Go-Betweens: The World Seen through Children", Mori Art Museum, Tokyo, 2015.

山田健二

→ P.008

Kenji YAMADA

二国間交流事業プログラム〈ロンドン〉

Tokyo-London Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.6.7(火) — 7.7(木)

丸山美紀 Miki MARUYAMA

二国間交流事業プログラム〈台北〉

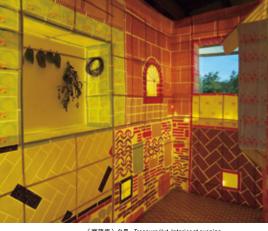
Tokyo-Taipei Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.11.25 (金) — 2017.2.22 (水)









Smurfed remain. 2016 @ 2016 YAMADA Kenii

Lecture + Artist Talk "Future of Public Art", 2016 @ 2016 YAMADA Kenji

《寶藏庵》竹でつくった窓格子 Treasure Hut. Bamboo lattice

《寶藏庵》夕景 Treasure Hut, Interior at evening

公共空間に覆い隠された歴史の発掘・調査をもとにした大規模なプロジェクトを展開する山田は、ロンドンでミルバンク刑務所の遺構調査を実施。刑務所だった当時から営業を続ける近隣のパブにて、旧刑務所敷地内にあるテート・ブリテンとチェルシー・カレッジ・オブ・アーツの研究者や教員を招き、公開の「市民カンファレンス」を開催。その記録映像と地下遺構の監視カメラ映像とを連鎖させ、映像インスタレーションを制作しました。

Working on a project based on excavations and investigations of public space, Yamada carried out an archaeological survey of Millbank Prison in London. He created a video installation that links footage of "Public Conference -open to the public-" involving local researchers and educators to surveillance camera recordings of underground remains.

PROFILE

1983年東京都生まれ。東京とロンドンを拠点に活動。2008年東京藝術大学先端芸術表現科卒業。主な展覧会に「Transgressive Heritage」(大和日英基金ジャパンハウスギャラリー、ロンドン、2017)、「漕港河议践」(上海喜瑪拉雅美術館/朱家角艺术馆、2016)、「BSIM App.」(アーツ千代田3331、東京、2013) など。受賞歴に「BEPPU ART AWARD 2011」グランプリ。

Born in Tokyo in 1983. Lives and works in Tokyo and London. Graduated from Tokyo University of the Arts in Intermedia Art in 2008. Recent exhibitions: "Transgressive Heritage" (solo), Daiwa Foundation Japan House Gallery, London, 2017, "Shanghai Project", Shanghai Himarayas Museum, 2016. Award: "BEPPU ART AWARD 2011", Grand Prize.

建築家の丸山は、台北市内の寺院や町並み、台湾伝統建築や民族工芸など、現地文化の幅広いリサーチを行ったうえで、滞在先にあった一軒の小屋のリノベーションに着手。台湾の伝統的な糊紙工芸を参考にしながら、竹の骨組みをベースに、市内で集めた包装紙や現地の樹木で染めた布を用いて、台湾建築の特徴を盛り込んだ茶室を制作しました。また、オープン後の1週間は、会場で来場者に薄茶を振舞うパフォーマンスも行いました。

Architect Maruyama undertook wide-ranging research on local culture such as temples and cityscape, traditional Taiwanese architecture and indigenous crafts in Taipei City, and engaged in the renovation of a house in Treasure Hill. She created a tearoom incorporating features of Taiwanese architecture and referencing Taiwan's traditional paste and paper craft.

PROFILE

1973年長野県生まれ。横浜を拠点に活動。2000年東京工業大学大学院社会理工学研究科修士課程修了。2004年 一級建築士事務所「マチデザイン」共同設立。近年の活動に「美波町空き家活用プロジェクト」(徳島、2014-)、「水 と土の芸術祭2015」メイン会場構成(新潟)、「本棟の家」(長野、2014) など。

Born in Nagano in 1973. Lives and works in Yokohama. Graduated with a MEng from Graduate school of Decision Science and Technology, Tokyo Institute of Technology in 2000. Co-founded architect studio, matidesign in 2004. Recent activities: Regional Revitalization Project in Minamicho, Tokushima, 2014-, "New Catalogue", Water and Land Niigata Art Festival, 2015.

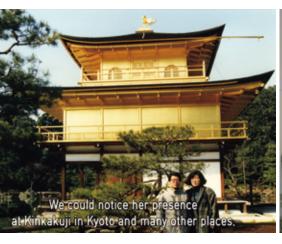
コ・ジェウク

KOH Jaewook

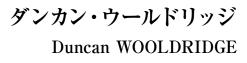
二国間交流事業プログラム〈ソウル〉

Seoul-Tokyo Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.5.6(金) -- 7.29(金)







二国間交流事業プログラム〈ロンドン〉 London-Tokyo Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.6.27(月) — 7.29(金)



On Paper (Shashin Kosha), 2016

Neither Here Nor There (Stacked), 2016

コは、人間関係から生じる個人の感情やエピソード、社会が個人に及ぼす影響に強い関心を持って制作しています。今回、コが子供時代に日本で単身赴任をしていた父親を訪ねた25年前の日本と現在の韓国の社会の類似性や違いについて考察し、自身の家族の物語を織り交ぜて映像作品《Like a Family》を制作。オープン・スタジオでは、家族のスナップ写真と合わせたインスタレーションを発表しました。

Koh produced a video work that examines the similarities and differences between Japan 25 years ago, when he visited his father who had been transferred for work, to the South Korea of today, interweaving narrative content related to his family. At Open Studio, he presented an installation featuring the video work and family snapshots.

PROFILE

1983年全州 (韓国) 生まれ、ソウルを拠点に活動。2010年弘益大学美術学部絵画専攻卒業。主な展覧会に「MMCA × KNCDC Performance: Unforeseen」(韓国国立現代美術館、ソウル、2016)、「大邱フォトビエンナーレ 2016」(Daegu Culture & Arts Center)、「ROOM SWEET ROOM」(SongEun ArtCube、ソウル、2015) など。

Born in Jeonju (Korea) in 1983. Lives and works in Seoul. Graduated from Hong-ik University in painting in 2010. Recent exhibitions: "MMCA × KNCDC Performance: Unforeseen", National Museum of Modern and Contemporary Art, Korea (MMCA), Seoul, 2016, "Daegu Photo Biennale 2016", Daegu Culture & Arts Center, "Room Sweet Room", SongEun ArtCube, Seoul, 2015.

作品制作、キュレーション、執筆を通じて、領域横断的な批評を実践しているウールドリッジは、 商業的な写真プリント店から、老舗の版画製作会社、ファブラボまで、東京近郊のさまざまな印 刷会社や工房に働きかけて印刷材料・形態について多角的にリサーチし、印刷技術の伝統と可 能性を探究しました。また、高松次郎や榎倉康二をはじめとする「もの派」についても調査し、 日本の実験的なアートの系譜についての知識を深めました。

Wooldridge, whose practice involves interdisciplinary critique, researched printing materials and forms ranging from commercial photo shops to traditional printmaking companies to "FabLabs," exploring the traditions and future possibilities of printing technology. He also deepened his knowledge about the lineage of experimental art in Japan.

PROFILE

1981年ハートフォードシャー (イギリス) 生まれ。ロンドンを拠点に、アーティスト、キュレーター、ライターとして活動。2006年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート・ロンドンより修士号 (写真) 取得。主な活動にグループ展 [Less Photography, More Photographic] (Galleria SP3、トレヴィーゾ、イタリア、2016) など。

Born in Hertfordshire (England) in 1981. Lives and works as an artist, curator and writer in London. Graduated with an MA in Photography from Royal College of Art, London in 2006. Recent activity: "Less Photography, More Photographic" (group show), Galleria SP3, Treviso, Italy, 2016.

シリン・サバヒ

Shirin SABAHI

二国間交流事業プログラム〈ベルリン〉

Berlin-Tokyo Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.9.1 (木) — 11.24 (木)









アンドレア・カネパ

二国間交流事業プログラム〈マドリード〉

Madrid-Tokyo Exchange Residency Program 滞在期間: 2016.10.11 (火) — 11.22 (火)

Andrea CANEPA

Extract from Borrowed Scenery, 2017

Extract from Borrowed Scenery, 2017

サバヒは、テヘランの現代美術館に恒久設置されている原口典之の彫刻作品《物質と精神(オ イル・プール)》をめぐる映像作品を制作。作品のコンセプトや背景を調査・考察するとともに、 岩手県へ作家本人を訪ね、インタビューと撮影を行いました。《Borrowed Scenery (借景)》と 題されたこの映像作品は、周囲の世界を映し出すオイル・プールの作品の原理を再現するように、

原口が水面に対峙したシーンで締めくくられます。

Sabahi made a film entitled Borrowed Scenery (借景), which portrays the sculpture, Matter and Mind (Oil Pool) by Noriyuki Haraguchi, permanently installed in the Tehran Museum of Contemporary Art since 1977. During her residency, she researched the concept and the story behind the work, and visited Mr. Haraguchi to interview and shoot footages.

PROFILE

1984年テヘラン生まれ。ベルリンを拠点に活動。2009年マルメ美術アカデミー(スウェーデン)より MFA 取得。主な 展覧会に「Fluid Flipping Form」(O Gallery、テヘラン、2016)、「The Primal Shelter is the Site for Primal Fears」(The Living Art Museum、レイキャヴィーク、2016)、「Video Playback」(現代写真美術館、シカゴ、2016) など。

Born in Tehran in 1984. Lives and works in Berlin. Graduated with an MFA from Malmö Art Academy in 2009. Recent exhibitions: "Fluid Flipping Form" (solo), O Gallery, Tehran, 2016. "The Primal Shelter is the Site for Primal Fears", The Living Art Museum, Reykjavik, 2016. "Video Playback", Museum of Contemporary Photography, Chicago, 2016.

Research trip, 2016

抽象化や運動といった側面に着目しながら、「遊び」のシステムを分析するプロジェクトを展開 しているカネパは、滞在中、遊具と彫刻の関連についての調査の一環として、札幌にあるイサム・ ノグチ設計のモレエ沼公園を訪問。また、メタボリズム建築や、東京ドームシティのビルの壁を 通り抜けるジェットコースターなど、都内の建築からもインスピレーションを受けて、遊具彫刻 の模型を制作しました。

During her stay Canepa, who is working on a project that analyzes systems of "play," visited Moerenuma Park in Sapporo, designed by Isamu Noguchi, as part of a survey on the relationship between playground equipment and sculpture. She also created models of playground sculpture inspired by architecture in Tokyo.

PROFILE

1980年リマ生まれ。バレンシアとベルリンを拠点に活動。2008年バレンシア工科大学より修士号(視覚芸術・マル チメディア) 取得。主な展覧会に [Perdidos en la ciudad] (バレンシア現代美術館 [IVAM]、2016) など。受賞歴に [若 手アーティストのためのARCOマドリード賞 | (2014) など。

Born in Lima in 1980. Lives and works in Valencia and Berlin. Graduated with an MA in Visual Arts and Multimedia from Universidad Politécnica de Valencia in 2008. Recent exhibition: "Perdidos en la ciudad", Institut Valencià d'Art Modern [IVAM], 2016. Award: "Premio Arco Comunidad de Madrid para Jóvenes Artistas", 2014.

フェラン・プラ

Ferran PLA

二国間交流事業プログラム〈マドリード〉

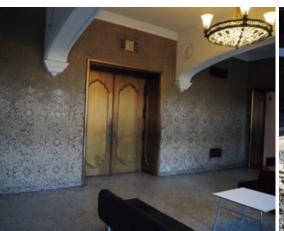
Madrid-Tokyo Exchange Residency Program

滞在期間: 2016.10.11 (火) — 11.22 (火)











チャン・カイチュン

二国間交流事業プログラム〈台北〉

滞在期間: 2017.1.6 (金) — 3.31 (金)

Taipei-Tokyo Exchange Residency Program

CHIANG Kai-chun

東京国立博物館 Tokyo National Museum

川越城本丸御殿 Honmaru Goten of Kawagoe Castle

制作において自由な発想、偶然性、直感を重視するプラは、ISSEY MIYAKEの衣服と、中世の医師アルナルドゥス・デ・ビラ・ノバによる書物『Tractat del amor heroic』に記された、愛を病気としてとらえる概念に着想を得、プロジェクト「Heroic / A-poch / Epoch」を発表。現代文化を考察する際に時代錯誤な要素がもたらす役割を、ユーモア、不条理、直感の美学により分析しようと試みました。

Pla, who emphasizes freedom of thought, happenstance, and intuition, presented the project "Heroic / A-Poch / Epoch", inspired by the clothing designs of Issey Miyake and the medieval doctor Arnaldus de Villa Nova's interpretation of love as a disease.

PROFILE

1980年バルセロナ生まれ。マドリードを拠点に活動。2003年ラモン・リュイ大学 (メディア研究) 卒業。主な展覧会に「Nicely Offensive」(Ponce + Robles、マドリード、2015) [El Martell sense Mestre] (Centre d'art Can Felipa、バルセロナ、2014)、「Internet Culture Shop」(Tokyo Cultuart by BEAMS、2014) など。

Born in Barcelona in 1980. Lives and works in Madrid. Graduated from Ramon Llull University in Media Studies in 2003. Recent exhibitions: "Nicely Offensive", Ponce + Robles, Madrid, 2015, "El Martell sense Mestre", Centre d'art Can Felipa, Barcelona, 2014, "Internet Culture Shop", Tokyo Cultuart by BEAMS, 2014.

チャンは、デジタル・ピクセルによる映像メディアと伝統的なモザイク技法の両方を探求し、職人技と結びついた作品を発表しています。滞在中、螺鈿や卵殻といった漆芸技法や、日本の民芸の文脈からモザイクを調査。また、京都や鎌倉の寺院における枯山水の庭園の踏み石や敷石にモザイクの形跡を見出し、岐阜県多治見市で公衆浴場の陶製タイルの製造過程を見学して考察を深めました。

Chiang, who explores moving-image media and traditional mosaic techniques, investigated mosaics in the context of lacquer techniques and Japanese folk art. In addition, he found evidence of mosaic forms in the stepping-stones and paving stones of Japanese rock gardens, and visited Tajimi, Gifu to study the process of manufacturing ceramic tiles for public baths, deepening his understanding of the field.

PROFILE

1983年桃園 (台湾) 生まれ。台北とパリを拠点に活動。パリ・セルジー国立高等美術学校卒業後、2015年ル・フレノワ国立現代アートスタジオ修了。主な展覧会に「台北ビエンナーレ2016」(台北市立美術館)、「Third Person Traveler」 (闕渡美術館、台北、2016)、「Panoramiques」 (シテ建築遺産博物館、パリ、2016) など。

Born in Tao-yuan (Taiwan) in 1983. Lives and works in Taipei and Paris. Earned his postgraduate diploma from Fresnoy National Studio of Contemporary Art in 2015, after graduating from École Nationale Supérieure d'Art Paris – Cergy (ENSAPC). Recent exhibitions: "Taipei Biennale 2016", Taipei Fine Arts Museum, "Third Person Traveler", Kuandu Museum of Fine Arts, Taipei, 2016, "Panoramiques", Cité de l'Architecture et du Patrimoine, Paris, 2016.

クレマンス・ショケ&ミカエル・ガミオ

Clémence CHOQUET & Mickaël GAMIO

二国間交流事業プログラム〈バーゼル〉

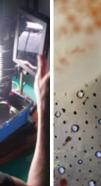
Basel-Tokyo Exchange Residency Program

滞在期間: 2017.1.6 (金) - 3.31 (金)









Paul Rohlfs filming Hotaru Ika @Andreas Greiner

Andreas GREINER

海外クリエーター招聘プログラム International Creator Residency Program 滞在期間: 2016.4.28 (木) — 7.26 (火)

アンドレアス・グライナー



Still from Studies of an Alien Skin. 2016 @Andreas Greiner, Tyler Friedman photo by Paul Rohlfs

サイト・スペシフィックなインスタレーションを中心に作品を発表しているフランスのアーティ スト・デュオ、ショケ&ガミオは、不安定な地盤が日本文化に与えた影響をリサーチ。日本人が 高度な耐震技術を開発している一方、神話が生み出す通俗的なイメージも保持していることや、 日常的に安全対策をしていながら、諸行無常の感覚も併せ持っていることに着目。このような 相互関係を探求し、新作の構想を練りました。

The French artist duo of Choquet & Gamio researched the influence that seismic instability has had on Japanese culture. They focused on the contrasts between Japan's advanced earthquake-resistant technology and popular imagery springing from myths, and between pragmatic safety behavior in everyday life and sensibility to the ephemeral. They explored these interrelationships through their works.

PROFILE

クレマンス・ショケ: 1987年モン=サンテニャン(フランス)生まれ。ミカエル・ガミオ: 1986年オロロン=サント= マリー (フランス) 生まれ。 ストラスブールを拠点に活動。 2人とも、2011年 Haute école des arts du Rhin (HEAR) に てDNSAP取得。2014年デュオとして活動開始。主な展覧会に「Vacance」(サン・キラン礼拝堂、セレスタ、フランス、 2016) など。

Clémence CHOQUET: Born in Mont-Saint-Aignan (France) in 1987. Mickaël GAMIO: Born in Oloron-Sainte-Marie (France) in 1986. Live and work in Strasbourg, Earned their DNSAP from Haute école des arts du Rhin, HEAR in 2011. Started working as a duo in 2014. Recent exhibition: "Vacance", St.Quirin Chapel, Sélestat, France, 2016.

生物そのものを作品として扱うグライナーは、作曲家でコラボレーターのタイラー・フリードマ ンとカメラマンのポール・ロルフスとともに富山県を訪れ、ホタルイカのリサーチを敢行。夜中 に乗船してホタルイカの捕獲に参加したほか、滑川市のほたるいかミュージアム、魚津市の魚 津水族館から協力を得て撮影を行い、それをもとにオーディオ・ヴィジュアル・インスタレーショ ン作品《Studies of an Alien Skin》を完成させました。

Greiner, who explores the idea of organisms as works of art, visited Toyama Prefecture with his collaborator, the composer Tyler Friedman, and cameraman, Paul Rohlfs, and conducted research on firefly squid. He went on to complete the audiovisual installation Studies of an Alien Skin.

1979年アーヘン(ドイツ)生まれ。ベルリンを拠点に活動。2012年ベルリン芸術大学付属空間実験研究所よりマイ スターシューラー取得。主な展覧会に [Agency for the Exponent] (Berlinische Galerie、ベルリン、2016-2017)、「六 本木アートナイト2016」(東京)など。受賞歴に「GASAG Art Prize 2016」。

Born in Aachen (Germany) in 1979. Lives and works in Berlin. Earned his Meisterschüler from University of the Arts, Berlin / Institut für Raumexperimente in 2012. Recent exhibitions: "Agency for the Exponent" (solo), Berlinische Galerie, Berlin, 2016-2017. "Roppongi Art Night 2016", Tokyo. Award: GASAG Art Prize 2016.

ミルナ・バーミア

Mirna BAMIEH

海外クリエーター招聘プログラム

International Creator Residency Program

滞在期間: 2016.5.6(金) - 7.29(金)

リギョン

Ligyung

海外クリエーター招聘プログラム

International Creator Residency Program

滞在期間: 2016.9.8 (木) — 11.25 (金)



Pain on others Project, 2016



Sound composition: Haruka Hirayama



awing, 2016 Daitoku-ji - Tea Room

パレスチナ人のバーミアは、作品を通じて、常に変化する政情を理解し熟考しようと努め、その時々の政権における土地や地理の観念に疑問を投じます。滞在中は、報道で伝えられる戦争のイメージ(画像・映像)が、いかに「不在の痕跡」になっていくかを考察するインスタレーションに着手。今後、TWSレジデンスに同時期に滞在したコレオグラファーのレイウィン・ヒルとのコラボレーション《他人の痛み》へと発展させる計画です。

Through her works, Palestine-born Bamieh attempts to understand and contemplate the ever-shifting politics, while equally questioning notions of land and geographies of in-between temporality. During her stay, she worked on an installation that examines how (still and moving) images of war become "traces of absence."

PROFILE

1983年エルサレム生まれ。ラマッラー (パレスチナ) とベイルートを拠点に活動。2013年ベツァルエル美術デザイン学院より MFA 取得。アシュカル・アルワン・レバノン現代芸術協会のホーム・ワークス・プログラム 2013/2014に参加。主な活動に「Afterwardsness」 (Hoash Gallery、エルサレム、2016)、「ロッテルダム国際映画祭」 (2017) など。

Born in Jerusalem in 1983. Lives and works in Ramallah (Palestine) and Beirut. Graduated with an MFA from Bezalel Academy for Arts and Design in 2013. Received a scholarship for Home Works Program 2013/2014 by Ashkal Alwan. Recent activities: "Afterwardsness" (solo), al Hoash Gallery, Jerusalem, 2016, IFFR Rotterdam Film Festival, Rotterdam, 2017.

「見えるものを信じる」という私たちの思い込みがいかに不完全であるかを、光を用いた表現で一貫して問い続けるリギョンは、今回の滞在で日本の伝統建築の室内空間に特徴的な「襖」と「床の間」という2つの要素について、美的・機能的観点の両面から探究。大徳寺(京都)をはじめ、さまざまな場所を訪れて室内建築をリサーチし、それらの現代空間へのアプローチを考察。自身の制作へと発展させる足がかりを得ました。

Ligyung, who has continuously questioned notion of "Seeing is believing, believing is seeing" through works created with light, explored the *fusuma* (sliding door) and *tokonoma* (alcove), both characteristic of traditional Japanese architecture, from both aesthetic and functional vantage points. In doing so she obtained footholds for her own creative practice.

PROFILE

1969年全州 (韓国) 生まれ。ソウルを拠点に活動。1997年チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザインより MFA 取得。主な展覧会に「Super Nature」(韓国国立現代美術館、ソウル、2014)、「逆転移」(銀座メゾンエルメス・フォーラム、2014)、「6-8」(Art Sonje Center、ソウル、2014) など。

Born in Jeonju (Korea) in 1969. Lives and works in Seoul. Graduated with an MFA from Chelsea College of Art and Design in 1997. Recent exhibitions: "Super Nature", National Museum of Contemporary Art, Korea (MMCA), Seoul, 2014, "Countertransference" (solo), Ginza Maison Hermes, Tokyo, 2014, "6-8", Art Sonje Center, Seoul, 2014.

トビアス・ツィローニィ

Tobias ZIELONY

海外クリエーター招聘プログラム

International Creator Residency Program

滞在期間: 2017.1.6 (金) — 3.31 (金)







Spiritus, 2017

グリッサゴーン・ティンタップタイ

Krissakorn THINTHUPTHAI

International Creator Residency Program 滞在期間: 2017.1.6 (金) — 3.31 (金)

海外クリエーター招聘プログラム

社会・政治問題を写真や映像を用いて検証しているツィローニィは、近年ドイツにおける移民 や移民活動家を撮影した作品を新聞や雑誌といった媒体をとおして発表しています。今回の 滞在では、愛知県豊田市と茨城県常総市の日系ブラジル人コミュニティを中心に、フィリピン、ネパール、ブラジルから来日した労働者に取材をし、日本における移民やマイノリティーの置かれた状況を考察しました。

Zielony, who has exhibited works in which he photographed immigrants and immigration activists in Germany, surveyed immigrant workers in Japan, mainly in the Japanese-Brazilian communities of Toyota, Aichi, and Joso, Ibaraki. He examined the circumstances of immigrants and minorities in Japan.

PROFILE

1973年ヴッパータール (ドイツ) 生まれ。ベルリンを拠点に活動。2004年ライプツィヒ視覚装丁芸術大学より MFA 取得。主な展覧会に「The Citizen」(BOZAR Centre for Fine Arts、ブリュッセル、2016)、「第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ」(ドイツ館、2015)、「Jenny Jenny」(Berlinische Galerie、ベルリン、2013) など。

Born in Wuppertal (Germany) in 1973. Lives and works in Berlin. Earned his MFA from Hochschule für Grafik und Buchkunst (HGB) Leipzig in 2004. Recent exhibitions: "The Citizens" (solo), BOZAR Centre for Fine Arts, Brussels, 2016, "56th Venice Biennial", German Pavilion, 2015, "Jenny Jenny" (solo), Berlinische Galerie, Berlin, 2013.

ティンタップタイは、アピチャッポン・ウィーラセタクンの多くの作品でアシスタントや俳優として参加してきました。修行僧としての死生観を反映する自身の映像作品はロッテルダム、ニューヨーク、ハンブルクをはじめとする国際映画祭で上映されています。今回の滞在では、2011 年にTWSのレジデンスで制作した《Dissonant Frequency》の続編となる新作《Spiritus》を制作しました。

The films of Thinthupthai, who is also a trainee monk, reflect a Buddhist view of life and death, and have been screened at numerous international film festivals. During this residency, he produced the new work *Spiritus*, a sequel to *Dissonant Frequency*, which he made during his previous residency at TWS in 2011.

PROFILE

1979年スリン (タイ) 生まれ。バンコクを拠点に活動。幼少時に仏門に入り、以来、寺院で生活。2002年 Pohchang Academy of Arts 卒業。アピチャッポン・ウィーラセタクン設立の映画制作会社 Kick the Machine Filmsに加わり、ロッテルダム、ニューヨーク等の映画祭で短編映像作品を上映。主な展覧会に「Now Showing」(ARATANIURANO、東京、2013)。

Born in Surin (Thailand) in 1979. Lives and works in Bangkok. He entered the monkhood when he was young, and has been living in the temple since then. After graduating from Pohchang Academy of Arts in 2002, he joined Kick the Machine Films, the film production studio founded by Apichatpong Weerasethakul. Some of his own short films have been shown in international film festivals including Rotterdam and New York. Recent exhibition: "Now Showing" (solo), ARATANIURANO, Tokyo, 2013.

ベッティーナ・ホフマン

Bettina HOFFMANN

芸術文化・国際機関推薦プログラム Institutional Recommendation Program

滞在期間: 2016.5.11(水) — 7.29(金)



Silent Office, 2016 With Mitsuko Aoki, Keke, Tomohiko Kyogoku, Atsuko Kurematsu. Yoko Sakurai. Nana Suzuki



Irowanihoheto – All colours will fade Version 2 - BodyMind, 2016
With Takao Kawaguchi

ホフマンは近年、再構成した空間のなかで人々が振付に基づき動く姿を撮影し、根底にある 社会との関係、衝突、コミュニケーションのメカニズムを描き出す映像作品を制作しています。 東京では舞踏を実技・理論の両面からリサーチし、そこから詩歌 (とりわけ「いろは歌」)、仏教、 無常観へと調査を広げていきました。それをベースに、日本の舞踏家、コンテンポラリー・ダン サーとリハーサルを重ね、5つの映像作品を作りました。

Hoffmann studied both the practical and the theoretical aspects of Butoh in Tokyo, and then expanded her studies into poetry (in particular *Iroha*, an ancient Japanese pangram and isogram), Buddhism, and the view of all life as transient. Based on these studies, she repeatedly rehearsed with Japanese Butoh and contemporary dancers, and created five video works.

PROFILE

1964年ベルリン生まれ。モントリオールを拠点に活動。1992年ベルリン芸術大学よりMFA取得。主な展覧会に「Touch」(Gallery Occurrence、モントリオール、2016)、「Drain」(Gallery OBORO、モントリオール、2014)、「In Between Frames」(ルーマニア国立現代美術館、ブカレスト、2011)、「Émile」(オンタリオ美術館、トロント、2009) など。

Born in Berlin in 1964. Lives and works in Montreal. Graduated with an MFA from Hochschule der Künste (University of the Arts Berlin) in 1992. Recent exhibitions: "Touch" (solo), Gallery Occurrence, Montreal, 2016, "Drain" (solo), Gallery OBORO, Montreal, 2014, "In Between Frames", Muzeul National de Arta Contemporana, Bucharest, 2011, "Émile" (solo), Art Gallery of Ontario, Toronto, 2009.

レイウィン・ヒル

Raewyn HILL

芸術文化・国際機関推薦プログラム

Institutional Recommendation Program

滞在期間: 2016.5.11 (水) — 7.27 (水)



Raewyn Hill (Pictured) at Samurai Sword training. @Michael Maclean



Butoh training session with Butoh Master, Yoshito Ohno (Pictured left to right: Raewyn Hill, Mina Mizohata, Yoshito Ohno) ©Michael Maclean

コレオグラファーのヒルは、かねてよりコラボレーションをしていた美術作家の吉本直子との「Ma Project」3部作の構想と展開に取り組み、その一環で訪れた広島で原爆犠牲者の記憶、歴史に触れて、創作のコンセプトを深めました。また、大野慶人による舞踏の稽古や、殺陣のトレーニングなどをとおして身体表現の深化とその哲学の探究に努めたほか、TWSレジデンスで出会ったミルナ・バーミアとの共同プロジェクトも開始しました。

Choreographer Hill worked on the *Ma Project* trilogy with long-time collaborator Naoko Yoshimoto, and also worked to deepen her physical expression and philosophy through training in Butoh with Yoshito Ohno and coaching in the art of Japanese sword battle.

PROFILE

1972 年ニュージーランド生まれ。パース (オーストラリア) を拠点に活動。クイーンズランド州のダンスカンパニー Dancenorth 芸術監督 (2010-2014)、西オーストラリア州立のコンテンポラリー・ダンス・カンパニー、Co3 芸術監督 (2014-) を歴任。主な作品に 「Reason for Being」 (Co3、西オーストラリア州立美術館、パース、2016-2017) など。

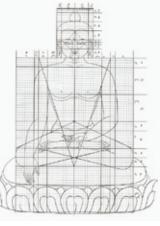
Born in New Zealand in 1972. Lives and works in Perth (Australia). Founding Artistic Director of Co3, Western Australia's flagship contemporary dance company since 2014. Prior to her appointment, she was Artistic Director at Dancenorth in Queensland (2010-2014). Recent work: *Reason for Being*, (for Co3), Art Gallery of Western Australia, Perth, 2016-2017.

シャルル・ケヴィヨン

Charles QUEVILLON

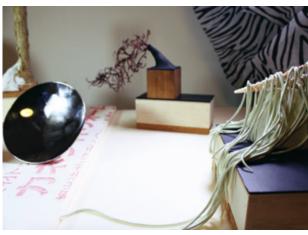
芸術文化・国際機関推薦プログラム Institutional Recommendation Program

滞在期間: 2016.9.1 (木) — 11.23 (水·祝)









エリザベス・ベリヴォ

芸術文化・国際機関推薦プログラム

Institutional Recommendation Program 滞在期間: 2017.1.10 (火) — 3.31 (金)

Elisabeth BELLIVEAU

Opera Sketches, November 11th 2016

Daijoji, November 2016

ケヴィヨンは、現在プッチーニの《蝶々夫人》をもとに、室内オペラを作曲中です。尺八をはじ めとした和楽器を調査したほか、蝶々が禅寺で生き続けたというストーリーを構想し、永平寺(福 井) や大乗寺(石川) にて数日間、修行僧とともに禅寺での生活を体験。また、座禅に日頃から 取り組み、僧侶へのインタビューを行うことで禅や仏教への理解を深めました。

Quevillon is currently composing a chamber opera based on Puccini's Madama Butterfly. In addition to investigating traditional Japanese musical instruments, he envisioned a story in which Cio-Cio-San (Madama Butterfly) is kept alive at a Zen temple, and experienced life at Zen temple. He also deepened his understanding of Zen and Buddhism in general, through zazen meditation and interviews with monks.

PROFILE

1989年レリ(ケベック)生まれ。モントリオールを拠点に活動。2014年モントリオール音楽院卒業。2005年より電 子音響作品や器楽曲を通じて、音楽表現に対する直接的なアプローチを探究している。コレオグラファーのテッド・ ロビンソンとのコラボレーション作《Room with Sticks》(2012)は、トロント・パフォーミング・アーツ連盟により Dora 賞サウンド・デザイン部門にノミネートされた。

Born in Léry (Quebec) in 1989. Lives and works in Montreal. Graduated from Conservatoire de Musique de Montréal in 2014. Since 2005, he has been developing a direct approach to musical expression through his electroacoustic and instrumental works. His collaboration with choreographer Tedd Robinson, Room with Sticks (2012), was nominated for Dora Award for Outstanding Sound Design by the Toronto Alliance for the Performing Arts.

グラフィック・ノベル作家としても活動しているベリヴォは東京滞在中、直感的で即興的な手 法を用いてイザナギとイザナミの日本誕生の神話に着想を得た、ストップモーション・アニメー ションを制作。日用品や粘土の造形を組み合わせて登場人物に見立て、動きをつけて物語を 紡ぎました。また同作品では、アーティストの西原尚がサウンド面で協力し、コラボレーション が行われました。

Belliveau, who also creates graphic novels, produced a stop-motion animation inspired by Japanese creation myths, using intuitive and improvisational techniques. On this project she collaborated with artist Nao Nishihara, who produced the sound for the work.

PROFILE

1979年ノヴァスコシア州 (カナダ) 生まれ。モントリオールを拠点に活動。2009年コンコルディア大学より MFA 取得。 これまでに「オランダ国際アニメーション映画祭」(2016)、「ブリュッセル・コミックフェスティバル」(2015)、「メルボ ルン国際アニメーション映画祭」(2014) などに出展。また、「One year in America」(Conundrum Press、2015) を含む 4冊のグラフィック・ノベルを発表している。

Born in Nova Scotia (Canada) in 1979. Lives and works in Montreal. Graduated with an MFA from Concordia University in 2009. Recent activities: Screening at Lux (London) and Dazibao (Montreal), 2017, "Holland Animation Film Festival", 2016. She is author of four graphic novels, including "One year in America" (Conundrum Press, 2015).

パトリス・バルヴェイ

Patrice BALVAY

芸術文化・国際機関推薦プログラム

Institutional Recommendation Program

滞在期間: 2016.5.1(日) — 6.27(月)





Drawing by Walking global view, 2016

Drawing by Walking 12, Sumidaku, 2016 Photo: Sabine Meier

バルヴェイは、ル・アーヴル市が2017年の市政500年を記念して実施した、10人のアーティストを世界各地に派遣する文化プロジェクトに参加。滞在中、「Drawing by Walking」というプロジェクトを展開し、地図を見ながら東京各所や鎌倉を歩き回り、そこから受けたインスピレーションや印象を、縦2メートル×横1.1メートルの大判の紙を用いて、ドローイング16作品に仕上げました。

Balvay participated in a project to dispatch ten artists from the city of Le Havre to various parts of the world to celebrate the 500th anniversary of its municipality. During his stay, he worked on a project entitled "Drawing by Walking", and created 16 drawings based on inspirations and impressions derived from Tokyo and Kamakura.

PROFILE

1968年マコン (フランス) 生まれ、ル・アーヴル (フランス) を拠点に活動。1991年パリ国立高等美術学校卒業より DNSAP取得。主な展覧会に「After Frenhofer」 (ル・アーヴル=ルーアン国立美術デザイン高等学校 [ESADHaR]、ル・アーヴル、2016) など。

Born in Mâcon (France) in 1968. Lives and works in Le Havre (France). Graduated with the DNSAP from Ecole Nationale Supérieure des Beaux-Arts of Paris in 1991. Recent exhibition: "After Frenhofer", L'École Supérieure d'Art et Design Le Havre-Rouen (ESADHaR), Le Havre, 2016.

芸術文化・国際機関推薦プログラム

Institutional Recommendation Program

ラース・キャリアン Lars CARLÉN

滞在期間: 2016.7.1 (金) — 7.29 (金)

ジャーナリストのキャリアンは、日本の現代美術やデザインをリサーチ。多数のアーティスト、キュレーター、アート関係者にインタビューを行い、帰国後、それらの記事を、自ら立ち上げたウェブ・パブリケーション・サイトに掲載する予定です。

 ${\sf Emiko\,Yoshioka\,at\,nap\,gallery\,looking\,at\,art\,by\,members\,of\,Olta}.$



Journalist Carlén researched contemporary Japanese art and design. He interviewed a number of artists, curators and art professionals, and after returning to Sweden, planned to post these interviews on a web publication site he has launched.

PROFILE

1972年スウェーデン生まれ。ストックホルムを拠点に活動。2000年にストックホルム大学より修士号取得。近年はブランディングや広告と美術の相違点に着目し、デザインやポップ・カルチャーとともに美術の記事を中心に執筆している。

Born in Sweden in 1972. Lives and works in Stockholm. Graduated with an MA from Stockholm University in 2000. In recent years, his focus shifts toward fine art as well as design and popular culture, exploring what is common and different between branding/advertising and fine art.

チョウ・ユンジュ CHOU Yun Ju

滞在期間: 2016.7.26 (火) — 9.30 (金)

アーティスト・イン・レジデンス (AIR) 施設で働いた経験を持つチョウは、さまざまな文脈で展開されている日本のAIRプログラムを調査し、この分野の多数の専門家へインタビューを行いました。現在も本プロジェクトを継続し、具体的な諸問題へと考察を深めています。



Chou, with the experiences worked for Artist-in-Residency institution, initiated an investigation about AIR programs under different institutional contexts in Japan. The project gathered interviews with experts in AIR realm, and will continue further with her observations into concrete discourses.

PROFILE

1988年台中生まれ。台北を拠点に活動。2012年エジンバラ大学より修士号(近現代美術史)取得。台北アーティスト・ヴィレッジにてレジデンス及びアート・プログラムのプログラム・オフィサーとして勤務(2013-2016)。現在は、フリーランスのアート・コーディネーターとして活動。

Born in Taichung in 1988. Lives and works in Taipei. Graduated with a MSc in Modern and Contemporary Art History from the University of Edinburgh in 2012. Worked as a program officer of curatrial and AIR programming for Taipei Artist Village (2013-2016). Currently works as a freelance art coordinator.

芸術文化・国際機関推薦プログラム

Institutional Recommendation Program

マーセ・ロドリゴ・ガルシア Merce RODRIGO GARCÍA

滞在期間: 2016.8.24 (水) — 9.24 (土)

建築家のガルシアは、東京の水路を視覚的、理論的見地から調査 し、現代都市形成で大きな影響を与えた地形・地勢について考察。 写真家の髙田洋三や、都市計画の陣内秀信教授をはじめとする専 門家と関わりながら、本プロジェクトを進めました。

Architect Rodrigo García researched the Tokyo waterways from visual and theoretical perspectives in order to reconsider the topography as the major force shaping the contemporary city. She engaged local photographer Yozo Takada and the critic and urban planning professor Hidenobu Jinnai among others in her ongoing investigation.



PROFILE

スペイン生まれ。ロンドンを拠点に活動。2009年ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジより修士号 (建築理論) 取得。 現在、同大学バークベック校博士課程在籍。主な活動にイベント「The Book launch in Tokyo: OrNamenTTokYo」(NICA、東京、2016)、「OrNamenT Epiphanies: TOKYO | (Café OTO、ロンドン、2014) など。

Born in Spain. Lives and works in London. Graduated with a MArch in Research Architecture from Goldsmith College, University of London in 2009, and currently PhD candidate at Birkbeck College, University of London. Recent activity: "OrNamenT Epiphanies: TOKYO" (multi-faceted event), Café OTO, London, 2014.

シグネ・ハーマン Sigune HAMANN

滞在期間: 2016.10.27(木) — 11.10(木)

2014年以来の2度目の滞在となるハーマンは、前回制作した帯状のパノラマ写真作品と絵巻物との関連について日本のキュレーターと議論を深めるために来日。また公共空間における集団行動への関心から、TWSレジデンスの地元町会による防災訓練の様子を撮影しました。



Hamann, who stayed at TWS again after a visit in 2014, came to Japan to engage in a deeper discussion with Japanese curators on emaki scrolls relating to panoramic film-strips she took the previous time. With an interest in collective actions in public space, she also photographed disaster prevention drills conducted by TWS Residency's neighborhood association.

PROFILE

1963年フランクフルト生まれ。ロンドンを拠点に活動。ロンドン芸術大学キャンバーウェル・カレッジ・オブ・アーツ 准教授。主な展覧会に「iN tHe nAme Of」(Durham Art Gallery、ダラム、カナダ、2013)、「The Upside-down Brain」(アシュ モレアン博物館、オックスフォード、2017) など。

Born in Frankfurt in 1963. Lives and works in London. Reader at Camberwell College of Arts, University of the Arts London. Recent exhibitions: "iN tHe nAme Of"(solo), Durham Art Gallery, Canada, 2013, "The Upside-down Brain"(solo), Ashmolean Museum, Oxford, 2017.

芸術文化・国際機関推薦プログラム

Institutional Recommendation Program

カルル・マズロ Karl MAZLO

滞在期間: 2016.11.21 (月) — 11.28 (月)

京都で日本の伝統的な素材・技法に触れたマズロは、同時期に滞在したジュエリー・デザイナーやアーティストと交流したほか、日本製のさまざまな工具を収集。また神奈川に工房を構える若手金属工芸作家、加藤貢介とのコラボレーションを発展させました。



Mazlo engaged with traditional Japanese materials and techniques in Kyoto and interacted with jewelry designers and artists who were in residence at the same time while collecting various tools made in Japan. In addition, he developed a collaboration with young metalwork artisan Kosuke Kato, who has a workshop in Kanagawa.

PROFIL

1986年パリ生まれ。パリを拠点に活動。エコール・ブール国立工芸学校にてジュエリーの石留め技術や彫金細工を 学ぶ。2009年ジュエリー・デザイナーとして独立。主な展覧会に「Objets de rencontre - オブジェ ド ランコントル・」(清課学、京都、2016) など。

Born in Paris in 1986. Lives and works in Paris. Graduated from École Boulle (art of jewelly and gem). Works as a self-employed jewelly designer since 2009. Recent exhibition: "Objets de rencontre", Seikado, Kyoto, 2016.

ヴァレリオ・サニカンドロ Valerio SANNICANDRO

滞在期間: 2016.11.26 (土) — 12.22 (木)

2015年度のリサーチ・レジデンス・プログラムで構想を発展させた弦楽四重奏とライブ・エレクトロニクスのための作品「A Book of Clouds」を完成させ、滞在中、辺見康孝 (Vn)を中心とした若手演奏家により、イタリア文化会館で世界初演しました。



Sannicandro completed the composition *A Book of Clouds* for string quartet and live electronics, based on a concept developed through Research Residency Program 2015, and during his stay this time, the piece had its world premiere at the Italian Institute of Culture featuring violinist Yasutaka Henmi and other young musicians.

PROFILE

1971年プーリア州 (イタリア) 生まれ。パリを拠点に活動。2014年ベルリン工科大学より音楽学博士号を取得。作品はバイエルン放送交響楽団、アンサンブル・アンテルコンテンボラン等に演奏されている。2014年クラウディオ・アバド作曲コンクールにて第1位受賞。

Born in Puglia (Italy) in 1971. Lives and works in Paris. Earned his PhD in Musicology from TU-Berlin. His compositions have been performed among others by Ensemble Intercontemporain, Ensemble Modern, Neue Vocalsolisten Stuttgart and Orchester des Bayerischen Rundfunks. In 2014, he was awarded the Claudio-Abbado-Kompositionspreis.

芸術文化・国際機関推薦プログラム

Institutional Recommendation Program

エヴァン・ジャコビー Evan JACOBY

滞在期間: 2017.1.5 (木) — 1.29 (日)

東日本大震災のような甚大な災害における被災者の 心の問題に取り組むため、ジャコビーは、被災地の置 かれた状況を把握しようと、この問題に正面から取り 組む小松理虔と赤間政昭に学びました。その後、福 島を中心に被災地の現状をビデオ撮影しました。



To address the mental issues suffered by victims of huge disasters such as the Great East Japan Earthquake, Jacoby studied with Riken Komatsu and Masaaki Akama, who grapple with this subject head-on. Afterward, he made a video work on the current state of the earthquake-stricken area, mainly around Fukushima.

PROFILE

1994年アメリカ生まれ。ニューヨークを拠点に活動。2017年バード大学在籍。

Born in USA in 1994, Lives and works in New York, Enrolled in Bard College in 2017.

ドミニック・キュナン Dominique CUNIN

滞在期間: 2017.3.13 (月) — 3.25 (土)

メディア・アーティストでインタラクティブ技術の開発に長年取り組んでいるキュナンは、プログラミング言語 Mobilizingを日本で発表し、将来的なコラボレーションの可能性を探りました。複数の大学でレクチャーを行ったほか、シンポジウムに参加しました。



Cunin, who as a media artist has long been engaged in the development of interactive technology, unveiled the programming language Mobilizing in Japan and explored possibilities for future collaboration. He participated in a symposium in addition to conducting lectures at several universities.

PROFILE

1980年ラクー (フランス) 生まれ。ヴァランス (フランス) を拠点に活動。2014年パリ第8大学より博士号取得。現在、ESADヴァランス (École supérieure d'art et design de Valence) 教授およびパリ国立高等装飾美術学校研究員。

Born in Laxou (France) in 1980. Lives and works in Valence (France). Earned his PhD in Arts Aesthetic, Siences and Technology from Université Paris 8 in 2014. Works as a professor at ESAD Valence (École supérieure d'art et design de Valence) and a researcher at National School of Art Déco (EnsadLab Paris).

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

キム・ジェウォン KIM Jeawon

滞在期間: 2016.5.5 (木·祝) — 6.1 (水)

墨田区向島の一軒の空き家をテーマにプロジェクトを 展開。地域や建物自体に刻まれた歴史や物理的・視覚 的要素を拾い上げ、小さな立体シリーズを制作。対象 の空き家の室内にそれらを配置してサイト・スペシフィッ クなインスタレーションを構成し、カメラに収めました。



Kim developed a project based around a vacant house in Mukojima, Sumida-ku, Tokyo. She focused on the history etched on the area and the building itself, and physical and visual elements, and produced a series of small sculptures. These were placed in the vacant house to create a site-specific installation, which was captured on camera.

PROFIL

1987年群山 (韓国) 生まれ。5年間のニューヨーク滞在の後、現在はソウルを拠点に活動。2015年スクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ (ニューヨーク) より MFA 取得。主な展覧会に「Your Hand, My Heart」(Gallery Simon、ソウル、2017) など。

Born in Gunsan (Korea) in 1987. Currently lives and works in Seoul, after 5 years in New York. Graduated with an MFA from School of Visual Arts (New York, USA). Recent exhibition: "Your Hand, My Heart", Gallery Simon, Seoul, 2017.

アーシャ・ピアスチーク Asia PIAŚCIK

滞在期間: 2016.5.7(土) — 5.31(火)

プロダクト・デザイナーのピアスチークは、東京における採光・日当たりの問題について、居住者への取材、建物の観察、気候と伝統建築との関係や最新の技術である太陽光採光システムの調査など、さまざまな角度からリサーチを行いました。



Product designer, Piaścik researched issues of sunlight exposure and natural lighting supply in Tokyo from a variety of angles, such as interviews with residents, observation of buildings, relations between climate and traditional architecture, and studies on the new technology of "solar lighting systems."

PROFILE

1977年ボウォミン (ポーランド) 生まれ。ワルシャワを拠点に活動。2008年ベルリン芸術大学卒業。主な展覧会に「Pragmatism and Beauty」(第21回ミラノ・トリエンナーレ、2016)、「The City and the Forest」(Design March、レイギャヴィーク、2016) など。

Born in Wołomin (Poland) in 1977. Lives and works in Warsaw. Graduated from University of the Arts Berlin in 2008. Recent exhibitions: "Pragmatism and Beauty, XXI Triennale International Exhibition", Milan, 2016, "The City and the Forest", Design March, Reykjavik), 2016.

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

オリヴァー・クリンペル Oliver KLIMPEL

滞在期間: 2016.5.9 (月) -- 6.6 (月)

グラフィック・デザイナーとしてのバックグラウンドを持つクリンペルは、伝統的な書体である江戸文字のリサーチを行い、2人の職人にインタビューを実施。また、朗読パフォーマンスのためのサウンドトラックを日本人作曲家とのコラボレーションで制作しました。



Klimpel, who has a background as a graphic designer, researched the traditional urban handlettering style, *Edo moji* (Edo lettering) and conducted interviews with two artisans. In addition, he collaborated with Japanese composers towards soundtracks for a reading performance about semifictional graphic practices.

PROFILE

1973 年ラーデボイル (ドイツ) 生まれ。ベルリンを拠点に活動。2000 年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート・ロンドンに て MA 取得。2015年までライブツィヒ美術アカデミー教授として勤務。主な展覧会に [Declaration/Documentation: Taipei Biennial, 1996-2014] (台北市立美術館、2016-2017) など。

Born in Radebeul (Germany) in 1973. Lives and works in Berlin. Graduated with an MA from Royal College of Art London in 2000. Professor at Academy of Visual Arts Leipzig until 2015. Recent activity: Commissioned work in exhibition "Declaration/Documentation: Taipei Biennial, 1996-2014", Taipei Fine Art Museum, 2016-2017.

チーヤン・ン Tsz Yan NG

滞在期間: 2016.6.6(月) - 7.27(水)

グローバル化するテキスタイル製造業界の服飾産業をテーマに、学術研究と作品制作を行っているンは、 絞り染、型染、注染のような伝統技法に加え、最新 テクノロジーによる合成繊維の製造・加工と、そのデザインへの応用を東京でリサーチしました。

Shibori textile dyeing Intricate Shibori dyeing process yields structural changes to the textile along with exposed.



Ng, who is engaged in academic research and creative work on the theme of the globalizing textile manufacturing, conducted research in Tokyo on traditional techniques such as *shibori* (tie-dyeing), stencil dyeing, *chusen* (traditional hand-dyeing), as well as the manufacture and processing of state-of-the-art synthetic fibers and their design applications.

PROFILE

1974年香港生まれ。アナーバー (アメリカ) を拠点に活動。2001年コーネル大学にて修士号 (MArch II) 取得。現在、ミシガン大学建築学科助教。主な展覧会に「Visibility of Labor」(9338 Campau Gallery、ハムトラマック、アメリカ、2015)、「Factory Setting: the space of labor」(2739 Edwin Street Gallery、ハムトラマック、アメリカ、2013) など。

Born in Hong Kong in 1974. Lives and works in Ann Arbor (USA). Graduated with a MArch II from Cornell University in 2001. Assistant professor in Architecture at University of Michigan. Recent exhibitions: "Visibility of Labor" (solo), 9338 Campau Gallery, Hamtramck, USA, 2015, "Factory Setting: the space of labor" (solo), 2739 Edwin Street Gallery, Hamtramck, USA, 2013.

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

クリスチャン・ジルー Christian GIROUX

Research Image/Playgrounds Isamu Noguchi, Moerenuma Park, Sapporo.

滞在期間: 2016.6.6 (月) — 7.28 (木)

ジルーは、滞在中多くのメタボリズム建築をスケッチ。 またモダニストによる遊具の調査として箱根彫刻の 森美術館、イサム・ノグチ設計のモレエ沼公園、仙田 満+環境デザイン研究所設計の山梨県立科学館を 訪れ、新作へのインスピレーションを得ました。



During his residency, Giroux sketched many examples of Metabolist architecture. He also visited the Hakone Open-Air Museum; Moerenuma Park, designed by Isamu Noguchi; and Yamanashi Prefectural Science Center, designed by Mitsuru Senda + Environment Design Institute as investigations of modernist playgrounds, and obtained inspiration for new work.

PROFIL

1971年キングストン (カナダ) 生まれ。ゲルフ (カナダ) を拠点に活動。ゲルフ大学准教授。1995年ノバスコシア美術デザイン大学にて MFA 取得。2002年より、ダニエル・ヤングとともに「ヤング & ジルー」として活動。主な展覧会に「Berlin 2013 / 1983」(Deutsches Architektur Zentrum、ベルリン、2016) など。2011年 Sobey Art Award 受賞。

Born in Kingston (Canada) in 1971. Lives and works in Guelph (Canada). Graduated with an MFA from NSCAD University in 1995. Associate professor at Guelph University. Collaborating with Daniel Young as an artist unit "Young & Giroux" since 2002. Recent Exhibition: "Berlin 2013/1983" (solo), Deutsches Architektur Zentrum, Berlin, 2016. Award: Sobey Art Award, 2011.

ディラン・ラルデリ Dylan LARDELLI

Kotos backstage at the Hougakuten concert 2016

滞在期間: 2016.6.6 (月) — 7.29 (金)

ラルデリは、吉村七重(筝)や鈴木俊哉(リコーダー) といった第一線の日本人演奏家と共同作業を行い、 それぞれの楽器奏法や音づくり、レパートリー等の研究を重ねました。また吉村の主催する公演「邦楽展」 で、二十絃筝とギターのための新作を発表しました。



Lardelli collaborated with top Japanese performers such as Nanae Yoshimura (koto) and Toshiya Suzuki (recorder), and studied each instrument's playing techniques, sound production, repertoire and so forth. Also, at a performance entitled "Hogakuten", hosted by Yoshimura, he presented a new work for 20-stringed koto and guitar.

PROFILE

1979年ウェリントン生まれ。シドニーを拠点に活動。2003年ヴィクトリア大学より修士号(作曲)取得。同年、アジア作曲家連盟(ACL)青年作曲賞第1位受賞。作品は、宮田まゆみ(笙)、アンサンブル・ヴォルテックス、ニュージーランド交響楽団、アンサンブル・ムジークファブリックのメンバー等により、ヨーロッパ、アジア、北米で演奏されている。

Born in Wellington in 1979. Lives and works in Sydney. Gradutated with an MA in Music Composition from Victoria University in 2003. 1st prize for the Asian Composers League Young Composers' Competition in 2003. His music has been performed throughout Europe, Asia and North America by such musicians as Mayumi Miyata (sho), Ensemble Vortex, New Zealand Symphony Orchestra, and members of Ensemble Musikfabrik.

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

コンラッド・ユーシチンスキ

Konrad IUŚCIŃSKI

滞在期間: 2016.9.1 (水) - 9.29 (木)

ユーシチンスキは、日本の文化・社会における「安全な場所」と 「ユートピア」の概念をリサーチ。世界最大級の地下放水設備、 首都圏外郭放水路やTWSレジデンス近隣の立体駐車場などで フォーマンスを行い、それをもとに映像作品を制作しました。



Emanation of substance and emptiness, 2016 Cooperation: Edogawa

River Office, Ministry of Land, infrastructure, Transport and Tourism.

Juściński researched the concepts of "safe places" and "Utopia" in Japanese culture and society. He carried out performances at the Metropolitan Area Outer Underground Discharge Channel, one of the world's largest subterranean drainage facilities, and at a parking garage in the neighborhood of TWS Residency, and made video works based on those performances.

1977年ゴジュフ・ヴィエルコポルスキ (ポーランド) 生まれ。ポズナンを拠点に活動。2014年ポズナン美術大学にて PhD 取 得。主な活動に「PALSパフォーマンス国際フェスティバル」(ストックホルム、2015)、「ベルリン・パフォーマンス・アート月 間」(ベルリン、2015) でのパフォーマンス作品発表、個展 [Safe place-utopia] (OKO/UCHO Gallery、ポズナン、2014) など。

Born in Gorzów Wlkp (Poland) in 1977. Lives and works in Poznań. Earned his PhD from University of Arts Poznań in 2014. Recent activities: "Safeplace (Performance), PALS Performance International Festival", Stockholm, 2015, "Epicaleo (Performance), Month of Performance Art Berlin", Berlin, 2015, "Safe place-utopia" (solo), OKO/UCHO Gallery, Poznań, 2014.

ヘレナ・ウェスターリンド Helena WESTERLIND quarry, Mount Buko, Saitama 2016

Concrete Geology, Limestone

滞在期間: 2016.9.1 (木) — 9.29 (木)

建築環境におけるコンクリートの役割を研究しているウェスターリン ドは、材料の流れを追い、墨田区内の建築現場から生コンクリートの 生成、原材料の石灰石の採掘現場までを調査。またコンクリートで 自邸をセルフビルドしている岡啓輔にインタビューを行いました。

Westerlind, who studies the role of concrete in the built environment, followed the flow of the material, and investigated construction sites in Sumida-ku from the preparation of the raw materials to the mining sites of the initial limestone. She also interviewed Keisuke Oka, who has been making his own self-built concrete house in central Tokyo.



PROFILE

1983年ストックホルム生まれ。ストックホルムを拠点に活動。スウェーデン王立工科大学大学院博士課程(建築)在 籍。2011年英国建築協会付属建築学校 (AAスクール) 卒業後、2014年までマドリードの独立系アート&テクノロジー・ スタジオ Factum Arteに参加。さまざまな分野の専門家で構成されたチームで、デジタル技術と職人技の融合により、 文化遺産の再生と保存に取り組んだ。

Born in Stockholm in 1983. Lives and works in Stockholm. PhD candidate at the KTH School of Architecture in Stockholm. After completing her studies at the Architectural Association School of Architecture in London in 2011, she joined the art and technology studio Factum Arte in Madrid (until 2014).

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

クリス・ロメロ Chris ROMERO

滞在期間: 2016.9.2 (金) - 9.29 (木)

キュレーター / ライターのロメロは、東京のメディア アートやデジタル・カルチャーを調査。ウェブサイト 「Tokyo Window Sessions」を立ち上げ、リサーチ活 動の集積として、インタビュー、展覧会評、エッセー などの記事を毎週更新しました。

www.tokyowindowsessions.com, 2017 - @Chris Romero



Curator and writer Romero investigated media art and digital culture in Tokyo. He launched the website Tokyo Window Sessions, and every week updated articles including interviews, exhibition reviews, and essays as a cumulative record of his research activities.

1987年アメリカ生まれ。ニューヨークを拠点に活動。2012年ニューヨーク大学にて修士号(博物館研究)取得。主な活 動に「The Internet Yami-Ichi in New York」(Knockdown Center、ニューヨーク、2015 & 2016) 企画・運営、「Memory Burn」(bitforms gallery、ニューヨーク、2015) キュレーション、「Myth and Mutations」(REVERSE、ニューヨーク、2015) キュレーションなど。

Born in USA in 1987. Lives and works in New York. Graduated with an MA in Museum Studies from New York University. Recent activities: "The Internet Yami-Ichi in New York", Knockdown Center, New York, 2015 & 2016, as producer, "Memory Burn", bitforms gallery, New York, 2015, as curator, "Myth and Mutations", REVERSE, New York, 2015.

ルイス・グラネ Luis GRANE

滞在期間: 2016.9.3 (±) — 9.30 (金)

地下鉄車内での人々の行動を観察し、多くの人がスマートフォンを操作 していることに関心を抱いたグラネは、伝統的な浮世絵の構図を取り入 れたペインティング・シリーズを制作。また神奈川県三浦市にあるメキシ カンバーの外壁に壁画を描きました。

Grane observed people's behavior on subways, took an interest in the number of people operating smartphones, and produced a series of paintings incorporating traditional ukiyo-e composition. He painted a mural on the exterior wall of a Mexican bar in Miura, Kanagawa.



Cell Hand number 1 2016

PROFILE

1967年アルゼンチン生まれ。ロサンゼルスを拠点に活動。1996年以降、ドリームワークス、ピクサー、ディズニー、ソ ニー・ピクチャーズ等の映像制作会社の作品にアニメーター、視覚効果アーティスト、キャラクター・デザイナーとして 参加する一方、ヴィジュアル・アーティストとしても活動。主な展覧会に「Quiet Snap」(Los Angeles County Store、ロ サンゼルス、2016) など。

Born in Argentina in 1967. Lives and works in Los Angeles. While he has worked as an animator, visual effects artist, and character designer for Hollywood film studios including Dream Works, Pixar, Disney, and Sony Pictures since 1996, he is also active as an independent visual artist. Recent exhibition: "Quiet Snap" (solo), Los Angeles County Store, 2016.

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

ウンベルト・ヂューク Humberto DUQUE

滞在期間: 2016.10.3 (月) — 11.25 (金)

日本語とスペイン語の発音の類似性に着目し、東京 のさまざまな場所でプロジェクト「Megaphonics」を展 開。日本人アーティストが、拡声器を使ってメキシコ の古いラブソングの歌詞をカタカナ発音で読み上げ、 喧騒の都市風景を変容させる作品を制作しました。



Observing the similarities in pronunciation between Japanese and Spanish, Duque carried out the project "Megaphonics" in various public spaces in Tokyo. Japanese-speakers read out the lyrics of old Mexican love songs phonetically transcribed into Japanese using katakana through megaphones. These puzzling sounds created a work that transformed the hustle and bustle of the urban landscape.

1978年メキシコシティ生まれ。メキシコシティを拠点に活動。2003年 Escuela Nacional de Pintura Escultura y Grabado (ENPEG) La Esmeralda 卒業。主な展覧会に「Micro City Lab | (インディーアートホール GONG、ソウル、 2016)、「Short-term Memory」(台北アーティスト・ヴィレッジ、2015)、「釜山ビエンナーレ」(2014) など。

Born in Mexico City in 1978. Lives and works in Mexico City. Graduated from Escuela Nacional de Pintura Escultura y Grabado (ENPEG) La Esmeralda in 2003. Recent exhibitions: "Micro City Lab", Indie Art Hall GONG, Seoul, 2016, "Short-term Memory", Taipei Artist Village, 2015, "Busan Biennale 2014".

アンネ・ビュッシャー Anne BÜSCHER

滞在期間: 2016.10.4 (火) — 11.30 (水)

素材としてのガラスの可能性を探究しているデザ イナーのビュッシャーは、和紙や江戸切子のワーク ショップに参加。また、日本の儀式・祭事での素材 の扱われ方や、素材に価値が与えられていく過程を リサーチし、自身の創作との接点を探りました。



Designer Büscher, who explores the possibilities of glass as a material, participated in washi paper and Edo kiriko (faceted glass from Edo) workshops. In addition, she studied how materials are handled in Japanese rituals and festivals and the process by which materials are given value, and explored points of contact with her own creative activities.

PROFILE

1991年シュトゥットガルト生まれ。マーストリヒト(オランダ)を拠点に活動。2014年マーストリヒト美術デザイン・ア カデミー (ジュエリーデザイン) 卒業。 サンドベルグ・インスティテュート・アムステルダム大学院に在籍。 主な展覧会に「花 祭 glaswerken」(Moira Expositieruimte、ユトレヒト、2016) など。

Born in Stuttgart in 1991. Lives and works in Maastricht (the Netherlands). Graduated with a BA in Jewelry design from Maastricht Academy of fine arts and design, the Netherlands, in 2014, Enrolled in an MA in MAD (Materialization in Art and Design) at Sandberg Instituut Amsterdam. Recent exhibition: " 花祭 glaswerken" (solo), Mora Expositieruimte, Utrecht, 2016.

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

アリツィア・ドブルツカ&オリヴィエ・リション Alicia DOBRUCKA & Olivier RICHON

滞在期間: 2016.10.4 (火) — 11.24 (木)

ドブルツカは都市の建物をリサーチし、レジデンス周辺の墨田区・江東区を中 心に昼間とは違う夜の情景を撮影。一方リションは、食べ物を文化的、美的視 点から取り上げ、とりわけ魚の象徴性に関心を寄せ、静物写真を撮影しました。

Dobrucka researched urban buildings and photographed them at night, when they show different faces from those of daytime, largely in Sumidaku and Koto-ku around TWS Residency. Meanwhile, Richon focused on food from a cultural and aesthetic point of view, taking an interest in the symbolism of the fish in particular, and shot still-life photographs.





Untitled Tokyo 2016

アリツィア・ドブルツカ: 1985年ポーランド生まれ。ロンドンを拠点に活動。2010年ロンドン芸術大学ロンドン・カレッジ・オ ブ・コミュニケーションより修士号(芸術写真)取得。主な展覧会に「チェンナイ・フォト・ビエンナーレー(インド、2016)など。 オリヴィエ・リション: 1956年ローザンヌ生まれ。 ロンドンを拠点に活動。 1997年よりロイヤル・カレッジ・オブ・アー ト教授·写真学科長。

Alicia Dobrucka: Born in Poland in 1985, Lives and works in London, Graduated with an MA in Fine Art Photography from London College of Communication, UAL in 2010. Recent exhibition: "Chennai Photo Biennale", India, 2016. Olivier Richon: Born in Lausanne in 1956. Lives and works in London. Professor of Photography and Head of Programme at Royal College of Art since 1997.

フィオナ・アムンゼン Fiona AMUNDSEN →P.135

Fallen Words, HD Video Still, 2017. (Mami Yamada Teuro Murakami)

滞在期間: 2017.1.5 (木) — 2.16 (木)

東京大空襲のリサーチを墨田区で行い、地元の住民 から聴き取りをしたほか、大空襲の痕跡を残す河川 や運河、公園を撮影。また鳥取県に赴き、1944年 オーストラリア・カウラで起きた日本人捕虜脱走事 件の生存者、村上輝夫に面会し、撮影を行いました。



In addition to researching the World War II firebombing of Tokyo in Sumida-ku, Amundsen talked to local residents and photographed rivers, canals and parks where traces of the great air raid remain. She also traveled to Tottori and met and photographed Teruo Murakami, a survivor of the Cowra Breakout, a Japanese prisoner-of-war escape incident in Cowra, Australia in 1944.

PROFILE

PROFILE

1973年オークランド生まれ。オークランドを拠点に活動。2005年ワイカト大学より修士号(社会科学)取得。主な 展覧会に「第5回台湾国際ビデオアート展」(鳳甲美術館、台北、2016)、「The Imperial Body」(Gus Fisher Gallery、オー クランド、2015)、「第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(ブリスベン、2015)など。

Born in Auckland in 1973. Lives and works in Auckland. Graduated with an MA in Social Science from University of Waikato in 2005, Recent exhibitions; "5th International Video Art Exhibition", Hong-Gah Museum, Taipei, 2016, "The Imperial Body" (solo), Gus Fisher Gallery, Auckland, 2015, "8th Asia Pacific Triennial", Brisbane, 2015.

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

ジョバンニ・インネッラ Giovanni INNELLA

滞在期間: 2017.1.5 (木) — 2.1 (水)

雑誌を通じて、日本のデザイン文化を考察。デザイン雑誌のページから写真やイラスト部分を消去することで、デザイン産業のレトリックと美学を浮き彫りにする《Representation of a Design Magazine》シリーズに取り組みました。



Innella examined Japanese design culture through the medium of magazines. Erasing photos and illustrations from pages of design magazines, he created the *Representation of a Design Magazine* series highlighting the rhetoric and aesthetics of the design industry.

PROFILI

1982年トリノ生まれ。東京、ロッテルダムを拠点に活動。2014年ノーザンブリア大学 (イギリス) にて博士号 (デザイン) 取得。主な展覧会に「The Life Fair. New Body Products」(Het Niewuwe Instituut、ロッテルダム、2016)、「GeoMerce」 (Fuorisalone、ミラノ、2015)、「Design Destinations」(イタリア国立21世紀美術館 [MAXXI]、ローマ、2014) など。

Born in Turin in 1982. Based in Tokyo and Rotterdam. Earned his PhD in Design from Northumbria University in 2014. Recent exhibitions: "The Life Fair. New Body Products", Het Niewuwe Instituut, Rotterdam, 2016, "GeoMerce, Fuorisalone", Milan, 2015, "Design Destinations", Museo nazionale delle arti del XXI secolo (MAXXI), Rome, 2014.

鈴木直汀. Naoe SUZUKI

滞在期間: 2017.1.5 (木) — 2.1 (水)

「水」をテーマに制作を行っている鈴木は、東京の埋没河川「暗渠」を調査。かつて河川や水路だった道を辿り、写真、映像、文章、ドローイングで記録しました。また歴史的背景をリサーチし、地元の人々から話を聞くことで、暗渠への理解を深めました。



Suzuki, whose artistic practice focuses on water, researched the culverts and subterranean rivers of Tokyo. Following roads that used to be rivers and waterways, she recorded them in photos, videos, sentences and drawings. She also studied their historical backgrounds and heard stories from local people, deepening her understanding of the waterways that lie beneath Tokyo.

PROFILE

1967 年東京生まれ。ボストンを拠点に活動。1997 年マサチューセッツ州立芸術大学大学院修了。主な展覧会に「Stories retold」(Broad Institute of MIT and Harvard, ケンブリッジ、アメリカ、2017)、「The River」(VanDernoot Gallery at Lesley University of Art and Design、ケンブリッジ、アメリカ、2013) など。ボロック・クラズナー財団より助成金受賞 (2015)。

Born in Tokyo in 1967. Lives and works in Boston. Graduated with an MFA from Massachusetts College of Art and Design in 1997. Recent exhibitions: "Stories retold" (solo), Broad Institute of MIT and Harvard, Cambridge (USA), 2017, "The River" (solo), VanDernoot Gallery at Lesley University of Art and Design, Cambridge (USA), 2013. Received grant from Pollock-Krasner Foundation (2015).

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

イルワン・アーメット&ティタ・サリナ

Irwan AHMETT & Tita SALINA

滞在期間: 2017.2.6 (月) - 3.30 (木)

長期プロジェクト「The Flame of the Pacific」を通じて環太平洋地域の現代史や社会政治的問題に向き合うアーメット&サリナは、太平洋戦争の激戦地・沖縄を訪問。戦時下で避難所として使われた鍾乳洞「ガマ」を中心にリサーチし、新作を構想しました。



Ahmett & Salina, who address the modern history and sociopolitical issues of the pan-Pacific zone through the long-term project "The Flame of the Pacific", visited Okinawa, a fierce battleground during World War II. They primarily studied gama (caves), which were used as shelters during wartime, and conceived a new work.

PROFILE

イルワン・アーメット: 1975年チアミス (インドネシア) 生まれ。ティタ・サリナ: 1973年プラージュ (インドネシア) 生まれ。2010年よりアーティスト・デュオとしてジャカルタを拠点に活動。主な展覧会に「The Flame of the Pacific」(ST Paul St Gallery、オークランド、2016)、「The World re-imagines the World」(ロンドン・デザイン・ビエンナーレ・インドネシア館、ロンドン、2016)など。

Irwan Ahmett: Born in Ciamis (Indonesia) in 1975. Tita Salina: Born in Plaju (Indonesia) in 1973. Formed as an artist duo in 2010. Live and work in Jakarta. Recent exhibitions: "The Flame of the Pacific" (solo), ST Paul St Gallery, Auckland, 2016, "The World re-imagines the World", Indonesian Pavilion, London Design Biennale, 2016.

ジュスティーヌ・エマー Justine EMARD

滞在期間: 2017.2.6 (月) — 3.31 (金)

映像・写真、拡張現実といった多様なメディアや装置を用い、現実をシミュレーションする架空の世界へと鑑賞者を誘う作品を制作。ディープラーニングや人間と機械の相互作用をベースに、ロボット工学、人工知能、人工生命の交点を調査しました。



Emard created works that invite viewers into a fictional world simulating reality with use of various media and devices including video, photo, and augmented reality. Focusing on deep learning and human-machine interaction, she investigated intersections between robotic engineering, artificial intelligence and artificial life.

PROFILE

1987年クレルモン・フェラン (フランス) 生まれ。パリを拠点に活動。2010年クレルモン・メトロポール高等美術学校卒業。主な活動に渋谷慶一郎 (音楽)、ジェレミー・ベランガール (ダンス) とのパフォーマンス [Parade for the End of the World] (パリ日本文化会館、2016)、展覧会 [Reborn 生まれ変わる] (EARTH+GALLERY、東京、2017) など。

Born in Clermont-Ferrand (France) in 1987. Lives and works in Paris. Graduated from l'École Supérieure d'Art de Clermont Métropole in 2010. Recent activities: "Parade for the End of the World", performance collaborating with Keiichiro Shibuya (music) and Jérémie Bélingard (dance), Maison de la Culture du Japan à Paris, Paris, 2016, "Reborn"(solo), EARTH+GALLERY, Tokyo, 2017.

リサーチ・レジデンス・プログラム

Research Residency Program

エマニュエル・ギョー Emmanuel GUILLAUD

Untitled (after Piranesi), version 2017 at Institut, Tokyo (Courtesy Yumiko Chiba & Associates, Tokyo)

滞在期間: 2017.2.6 (月) - 3.31 (金)

写真や映像インスタレーションを中心に活動するギョーは、抑圧された場所としての地下鉄を映し出す《無題(ピラネージにならって)》シリーズに取り組みました。滞在終了時には、アンスティチュ・フランセ東京にて同タイトルの個展を開催しました。



Guillaud, who primarily creates photo and video installations, worked on the *Untitled (After Piranesi)* series portraying the subway as a space of oppression. At the end of his stay, he held a solo exhibition with the same title at Institut Français Tokyo.

PROFIL

1970年パリ生まれ。パリを拠点に活動。2015年パリ・セルジー国立高等美術学校より修士号 (美術) 取得。主な展覧会に「無題」(La Plate-forme、ダンケルク、フランス、2017)、「Until the sun rises」(シンガポール美術館、2011 / Pavillon Vendome、クリシー、フランス、2015) など。

Born in Paris in 1970. Lives and works in Paris. Graduated with an MA in Visual Arts from École Nationale Supérieure d'Art Paris – Cergy (ENSAPC) in 2015. Recent exhibitions: "Untitled" (solo), La Plate-forme, Dunkerque (France), 2017, "Until the sun rises" (solo), Singapore Art Museum, 2011, Pavillon Vendome, Clichy (France), 2015.

カロリーナ・ブレグーワ Karolina BREGULA

滞在期間: 2017.2.9 (木) — 3.23 (木)

ブレグーワは、自身の最大規模の作品となる映像インスタレーションの制作に着手し、日本のミュージシャン角銅真実とともに脚本と楽曲の制作に取り組みました。本作品はこの後台湾で撮影を行い、編集を経て2017年末に完成予定です。



In Tokyo Breguła started to develop her large-scale video installation, working in collaboration with a Japanese musician Manami Kakudo. The script and the score were written in Japan. The work is scheduled to be filmed in Taiwan. It will be completed by the end of 2017.

PROFILE

1979年カトヴィツェ (ポーランド) 生まれ。ワルシャワを拠点に活動。2015年ウッチ大学 (ポーランド) より博士号取得。主な展覧会に「Office for Monument Construction」(Market Gallery Glasgow International、2016)、「Stories」(Polish Institute Gallery、ベルリン、2015)、「Reflection Centre...」(第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2013) など。

Born in Katowice (Poland) in 1979. Lives and works in Warsaw. Earned her PhD from National Film Television and Theatre School, Łódź in 2015. Recent exhibitions: "Office for Monument Construction" (solo), Market Gallery Glasgow International, Glasgow, 2016, "Stories" (solo), Polish Institute Gallery, Berlin, 2015, "Reflection Centre...", 55th Venice Biennale, 2013.

オープン・スタジオ 2016-2017 OPEN STUDIO 2016-2017

会期: 2016.7.22 (金) — 7.24 (日) 2016.11.11 (金) — 11.13 (日)

2017.3.10 (金) — 3.12 (日)







TWSレジデンスに滞在したクリエーターが、東京での制作やリサーチ活動について展示・発表する「オープン・スタジオ」。2016年度は3回開催し、各日程を金曜日から日曜日の3日間にすることで、幅広い層の来場者が集まりました。滞在クリエーターによる発表のほか、ゲストを招いてのトークやディスカッション、上映会なども行い、多くの来場者が参加しました。

"Open Studio" is an event where creators staying at TWS Residency exhibit and make presentations on their creative and research activities in Tokyo. In fiscal 2016, three sessions were held, with each one taking place over three days from Friday to Sunday, enabling a wide range of visitors to attend. In addition to presentations by resident creators, other guests were invited for talks, discussions, and a screening, and many visitors participated.







オープン・スタジオ 2016-2017 *展示のみ参加

Vol.1 参加クリエーター

ミルナ・バーミア、アンドレアス・グライナー、コ・ジェウク、 ダンカン・ウールドリッジ、ラース・キャリアン、 レイウィン・ヒル、ベッティーナ・ホフマン、 クリスチャン・ジルー、ディラン・ラルデリ、チーヤン・ン、 パトリス・バルヴェイ*、キム・ジェウォン*、 オリバー・クリンペル*、アーシャ・ピアスチーク*

7月23日(土)滞在クリエーターによるアーティスト・トーク 7月24日(日)ダダ誕生100周年対談(後援:スイス大使館) ゲスト: やなぎみわ (現代美術家)、

三本松倫代(神奈川県立近代美術館主任学芸員)

OPEN STUDIO 2016-2017 *Exhibiting only

Vol.1 Creators

Mirna BAMIEH, Andreas GREINER, KOH Jaewook, Duncan WOOLDRIDGE, Lars CARLÉN, Raewyn HILL, Bettina HOFFMANN, Christian GIROUX, Dylan LARDELLI, Tsz Yan NG, Patrice BALVAY*, KIM Jeawon*, Oliver KLIMPEL*, Asia PIAŚCIK*

July 23(Sat.) Artist Talk by Creators July 24(Sun.) Talk commemorating the 100th Anniversary of Dada (Support: Embassy of Switzerland in Japan) Guests: Miwa Yanagi (Artist), Tomoyo Sanbonmatsu (Curator, The Museum of Modern Art, Kamakura and Hayama)

Vol.2 参加クリエーター

リギョン、アンドレア・カネパ、フェラン・プラ、 シリン・サバヒ、シャルル・ケヴィヨン、 アンネ・ビュッシャー、ウンベルト・ヂューク、 アリツィア・ドブルツカ&オリヴィエ・リション、 ルイス・グラネ*、コンラッド・ユーシチンスキ*、 クリス・ロメロ* ヘレナ・ウェスターリンド*

DATA

11月12日(土)滞在クリエーターによるアーティスト・トーク 11月13日(日)トーク&ディスカッション 「ポストコロニアルの多義性と美学」 ゲスト: 笠原恵実子 (アーティスト)、藤井 光 (アーティスト)、 小林晴夫 (blanClass ディレクター)

Vol.2 Creators

Ligyung, Andrea CANEPA, Ferran PLA, Shirin SABAHI, Charles QUEVILLON, Anne BÜSCHER, Humberto DUQUE, Alicja DOBRUCKA & Olivier RICHON, Luis GRANE*, Konrad JUŚCIŃSKI*, Chris ROMERO*, Helena WESTERLIND*

DATA

November 12(Sat.) Artist Talk by Creators November 13(Sun.) Talk & Discussion "Post-colonial Ambiguity and Aesthetics" Guests: Emiko Kasahara (Artist), Hikaru Fujii (Artist), Haruo Kobayashi (Director, blanClass)

Vol.3 参加クリエーター

グリッサゴーン・ティンタップタイ、トビアス・ツィローニィ、 チャン・カイチュン、クレマンス・ショケ&ミカエル・ガミオ、 エリザベス・ベリヴォ、イルワン・アーメット&ティタ・サリナ、 カロリーナ・ブレグーワ、ジュスティーヌ・エマー、 エマニュエル・ギヨー、フィオナ・アムンゼン*、 ジョバンニ・インネッラ*、鈴木直江*

3月11日(土)滞在クリエーターによるアーティスト・トーク 3月12日(日)スクリーニング&アーティスト・トーク グリッサゴーン・ティンタップタイ& 荒木 悠 ゲスト: 荒木 悠 (アーティスト)、

天野太郎(横浜市民ギャラリーあざみ野主席学芸員)

Vol.3 Creators

Krissakorn THINTHUPTHAI, Tobias ZIELONY, CHIANG Kai-chun. Clémence CHOQUET & Mickaël GAMIO, Elisabeth BELLIVEAU, Irwan AHMETT & Tita SALINA, Karolina BREGUŁA, Justine EMARD, Emmanuel GUILLAUD, Fiona AMUNDSEN*, Giovanni INNELLA*, Naoe SUZUKI*

March 11 (Sat.) Artist Talk by Creators March 12(Sun.) Film Screening & Artist Talk Krissakorn Thinthupthai & Yu Araki Guests: Yu Araki (Artist), Taro Amano (Curator in Chief, Program Director, Yokohama Civic Art Gallery Azamino)

TWS Creator-in-Residence 2015-2016

トーキョーワンダーサイト レジデンス 2015-2016

Part 1 RETURN TO

Part 2 Imaginary Synonym

Part 3 art center as world citizen

異国で滞在制作を行ったクリエーターによる成果発表展 Works produced in other countries by creators doing overseas re

「トーキョーワンダーサイト レジデンス 2015-2016」は、トーキョーワンダーサイト のレジデンス・プログラムに参加し、海外の提携機関やTWSレジデンスで滞在制作 を行ったクリエーターによる成果発表展です。各クリエーターは1~3ヶ月の間、 異国で生活をしながらその土地の歴史、文化、コミュニティなどに触れ、さまざまな角度からリサーチを行い、自らの制作活動へと還元していきます。そこで還元されたものが、滞在制作終了後、一定期間を置いたのちに、改めて展示空間で作品として展開されることで、それぞれの滞在の成果が実を結びます

"TWS Creator-in-Residence 2015-2016" was an exhibition presenting works produced at oversea partner institutions, or at the TWS Residency, by creators who participated in Tokyo Wonder Sit (TWS) residency programs. Each participant lived in a foreign country for a period of one to thre months, encountering that country's history, culture, community and so forth, conducting research from various angles, and then returning to their own creative activities. Each person's stay bor fruit afterward, when after a certain period of time, works reflecting their experiences abroad were exhibited in a gallery.

アディティア・ノヴァリ (「茶の本」 岡倉覚三著 (1906年): 抽象) (部分)、2016 Aditya Novali "The Book of Tea" by Okakura Kakuzo (1906): the abstraction (Detail)、2016 TWS Creator-in-Residence 2015-2016 Part 1

RETURN TO

トーキョーワンダーサイト レジデンス 2015-2016 Part 1 **リターン・トウ**

2016.4.16 (±) - 5.29 (B)

地主麻衣子 Maiko JINUSHI / 谷中佑輔 Yusuke TANINAKA 花崎 草 Kaya HANASAKI / キュンチョメ KYUN-CHOME

滞在制作で得られた経験をもとに作品を発表

Exhibition of works reflecting experiences during overseas residencies

2015年度の二国間交流事業プログラムで各都市に派遣された日本人クリエーター4組によるレジデンス成果発表展。各クリエーターは、1~3ヶ月の滞在制作で得られた経験を素材として、現地で制作した作品の再展示に留まらず、TWS本郷の展示空間や土地の特性を存分に活かしたインスタレーションを展開しました。

This exhibition featured works by four Japanese creators who lived in various cities overseas during the Exchange Residency Program in 2015. Each creator worked with their experiences during their one-to-three-month stay to develop an installation that made effective of the TWS Hongo gallery spaces and the characteristics of the surroundings, without necessarily replicating the same work they produced abroad during the residency.

DATA

◎会場:トーキョーワンダーサイト本郷 ◎提携機関:ベルリン市/クンストラウム・クロイツベルク / ベタニエン、アーツ・イン・レジデンス台 北 / トレジャーヒル・アーティスト・ヴィレッジ、マタデッロ・マドリード

地主麻衣子 Maiko JINUSHI

二国間交流事業プログラム〈マドリード〉2015.10-11 滞在

Yusuke TANINAKA 谷中佑輔

二国間交流事業プログラム 〈ベルリン〉 2015.7-9 滞在







《遠いデュエット》 A Distant Duet, 2016

In/Flesh/Out, 2016

小説家・詩人のロベルト・ボラーニョを題材に、彼の痕跡を追うビデオ・インスタレーションを展示。地主自身のモノローグと、スペイン語での小説の朗読シーンが交互に現れ、地主が憧れるボラーニョを追い求めていきます。小説中に描かれる「穴」を巡って、スペインの文化的背景や国民性の違いから、現地の人々に問いかけると同時に、彼女が昨今抱き続けている日本社会への違和感を表現しました。

This video installation was inspired by the works of novelist and poet Roberto Bolaño, and traces the footsteps of the deceased writer. The film seeks out vestiges of Bolaño, with a voice-over alternating between monologues by Jinushi and scenes from the Spanish-language novels.

PROFILE

1984年神奈川県生まれ。東京を拠点に活動。2010年多摩美術大学美術研究科絵画専攻修了。主な展覧会に「新しい愛の体験」(HAGIWARA PROJECTS、東京、2016)、「Unusualness Makes Sense」(チェンマイ大学アートセンター、2016)、「Zero Gravity」(Matadero Madrid、マドリード、2015)、「仮想のコミュニティ・アジア― 黄金町バザール2014」(黄金町バザール、神奈川、2014)など。

Born in Kanagawa in 1984. Lives and works in Tokyo. Graduated with an MFA in Painting from Tama Art University in 2010. Recent exhibition: "A New Experience of Love" (solo), HAGIWARA PROJECTS, Tokyo, 2016.

木材と石膏による巨大な抽象彫刻を即興で組み立て、それらに嵌め込まれたトマトを齧るというパフォーマンス作品《In/Flesh/Out》をとおして、さまざまな制約のもと、都市の公共性に彫刻がどう関われるかという実践的な行為を作品化。展示室ではパフォーマンスで使用した彫刻のパーツを展示し、別室ではパフォーマンスを行った時間と現実の時間がシンクロした映像を上映しました。

Through the performance work *In/Flesh/Out*, in which Taninaka spontaneously assembled a huge improvised abstract sculpture from wood and plaster, filled it with tomatoes, and munched on them, the artist actively engaged with the issue of how sculpture fits into public urban spaces under numerous constraints.

PROFILE

1988年大阪府生まれ。ベルリンを拠点に活動。2014年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。主な展覧会に「Galatea」(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、2014)、「クロニクル、クロニクル!」(Creative Center Osaka [名村造船所跡]、大阪、2016)など。受賞歴に「アートアワードトーキョー丸の内2014」グランプリ。平成28年度京都市芸術文化特別奨励者。

Born in Osaka in 1988. Lives and works in Berlin. Graduated with an MFA in Sculpture from Kyoto City University of Arts. Recent exhibitions: "Joan Jonas Workshop Exhibition", Villa Iris of The Botin Foundation, Santander, Spain, 2016, "Chronicle, Chronicle!", Creative Center Osaka, 2016. The Recipient of Kyoto City Special Bounty Program for Art and Culture, 2016.

花崎 草 Kaya HANASAKI

二国間交流事業プログラム (台北) 2015.9-12 滞在

KYUN-CHOME キュンチョメ

二国間交流事業プログラム 〈ベルリン〉2015.10-2016.1 滞在







《笑顔をつくるジレンマ》 Dilemma in making smiles , 2015

《風向き次第》(部分) Sow the wind and reap the whirlwind (Datail), 2016

Bills to Act. 2016

社会の形成要素のひとつである 「法律 / 法令 (Act)」に着目し、台湾と日本で共有し得る自作の 「法案 (Bill)」 (法律 / 法令が可決される以前の状態のもの) を高札に掲示。同空間に展示されたインスタレーションをとおして、現代社会の問題の可視化を試みました。法案を提案するなかで、法律 / 法令は暫定的な性質を持ち、その形成過程にはほとんどの国民が関与していない現状を示唆することで、鑑賞者の思考を促しました。

Engaging with the topic of laws/acts, a fundamental element of society, the artist posted an original "bill" (draft proposal before a law/act is passed) that can be jointly applied to Taiwan and Japan on several takafuda (also known as a kosatsu, a traditional wooden panel with a law inscribed on it, mounted in a high place). In this installation, she sought to render visible issues in contemporary society.

PROFILE

1987年東京都生まれ。東京を拠点に活動。2012年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。主なパフォーマンスに「蚊帳の外」(台北市美術館、台湾、2015)、「Woman Path」(M.F. フセインアートギャラリー、ニューデリー、2014)など。主な展覧会に「花崎草/2007-2012」(()藝文展演空間、台北、2013)、「Art Action in UK」(素人の乱12号店、東京、2012)など。

Born in Tokyo in 1987. Lives and works in Tokyo. Graduated with an MFA in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts in 2012. Recent activities: "Kaya no Soto", Taipei Fine Arts Museum, 2015, "Woman Path", M.F.Husain Art Gallery, New Delhi, India, 2014.

滞在時に知り合ったシリア人難民と協働して制作した《笑顔をつくるジレンマ》を発表。2面のスクリーンには目隠しをされた人物が投影され、その不穏な雰囲気からは否応なしに不安定な世界情勢が想起させられました。ヘッドマウント・ディスプレイを装着 (=目隠し)すると、二人が協力して福笑いで顔を作っている手元の映像が映し出され、鑑賞者はただそれを覗くことしかできず、世界と自分との距離を突きつけられることになりました。

Kyun-Chome presented *Dilemma in Making Smiles*, created in collaboration with Syrian refugees. A blindfolded person appears on the screens, and the disturbing image evokes the unstable world we live in today. By wearing a head mounted display (i.e. a blindfold), the viewer is confronted by the distance between the self and the truth of the world.

PROFILE

ホンマエリとナブチの男女ユニット。2011年に結成。東京を拠点に活動。主な展覧会に「もう一度太陽の下でうまれたい」(岡本太郎記念館、東京、2015)、「なにかにつながっている」(新宿眼科画廊、2014)、「SHIBUKARU MATSURI Goes to BANGKOK」(The Jam Factory、バンコク、2015) など。受賞歴に「第17回岡本太郎現代芸術賞」太郎賞(2014)。

Art unit formed in 2011, consisting of Eri Homma and Nabuchi. Lives and works in Tokyo. Recent exhibitions: "I Want to be Born Under the Sun Again", Taro Okamoto Memorial Museum, Tokyo, 2015, "SHIBUKARU MATSURI Goes to BANGKOK", JAM FACTORY, Bangkok, 2015. Award: "17th Taro Okamoto Award for Contemporary Art", Taro Prize, 2014.

TWS Creator-in-Residence 2015-2016 Part 2

Imaginary Synonym

トーキョーワンダーサイト レジデンス 2015-2016 Part 2 イマジナリー・シノニム

2016.6.11 (±) -7.31 (B)

ケルヴィン・アトマディブラタ Kelvin ATMADIBRATA コビール・アフメッド・マスム・チスティー Kabir Ahmed MASUM CHISTY アディティア・ノヴァリ Aditya NOVALI

レジデンス滞在者による成果発表展

Exhibition detailing the results of the residency program

2015年度の海外クリエーター招聘プログラムに参加し、TWSレジデンスで滞在制作を行った3名のアジア出身クリエーターによる成果発表展。日本滞在中に自国の文化とアジア共有の文化、そしてそれらと日本の文化のズレから生まれる創造の可能性に着目し、独創性豊かな空間を作り上げました。

This exhibition presented works made by three creators of Asian origin during their stay at the TWS Residency during the 2015 International Creator Residency Program. While in Japan, they focused on the creative possibilities arising from the disconnect between their own cultures, the shared culture of Asia, and the culture of Japan. Their works created a space resonant with imagination and originality.

DATA

◎会場:トーキョーワンダーサイト本郷

ケルヴィン・アトマディブラタ

Kelvin ATMADIBRATA

海外クリエーター招聘プログラム 2015.9-11 滞在





《A New Dawn Has Come》(部分)*A New Dawn Has Come* (Detail), 2016 協力:松田篤史、湯山大一郎(大駱駝艦)Cooperation: Atsushi Matsuda, Daiichiro Yuyama (Dairakudakan)

ジェンダーの問題や、生の対義語としての死を見つめることで、人間の存在そのものの不条理を問うアトマディブラタは、単なる娯楽を超え、時に社会的な制約に疑問を投げかけ、黙示録的な世界観を扱う日本の漫画やアニメから着想を得たインスタレーションを展開。無機質な部屋で、明るいラジオ体操の歌とともに昇降する白黒の円盤や、壁際に立てかけられた抽象的な平面が生む違和感によって、日常の中の非現実性を強調しました。

Examining gender issues and death as the antonym of life, Atmadibrata explores the absurdity of human existence, creating installations inspired by Japanese manga with apocalyptic themes which transcend the boundaries of entertainment and at times cast doubt on social restrictions.

PROFILE

1988年ジャカルタ生まれ、在住。2012年シンガポール南洋理工大学スクール・オブ・アート・デザイン・メディア卒業。 主な活動に「Carbuncle」(SPACE Galeri Pasar、ジャカルタ、2015)、「たけくらべ」(国際交流基金ジャカルタ日本文化 センター、2014)、「マラッカ・アート & パフォーマンス・フェスティバル」(St. Paul's Hill、2015) など。

Born in Jakarta in 1988. Works and lives in Jakarta. Graduated with a BFA in School of Art Design and Media from Nanyang Technological University, Singapore in 2012. Recent activity: "Carbuncle" (solo), SPACE Galeri Pasar, Indonesia. 2015.

コビール・アフメッド・マスム・チスティー

Kabir Ahmed MASUM CHISTY

海外クリエーター招聘プログラム 2016.1-3 滞在

アディティア・ノヴァリ

Aditya NOVALI

Creator-in-Residence

海外クリエーター招聘プログラム 2016.1-3 滞在







《茶道:一つの儀礼》(部分) 2016 Tea: One Ceremony(Datail), 2016

日本の「おばけ(幽霊、妖怪)」に焦点を当てたリサーチを行ったマスム・チスティーは、自国のバングラデシュでは幽霊が忌むべき対象であるのに対し、日本では共生した文化の一部として認識されていると感じました。滞在中に近隣の幼児や大人たちと行ったワークショップを通じて8体のキャラクターを制作し、人形劇とアニメーションを作り上げました。

Masum Chisty studied Japanese ghosts (yurei) and sprites (yokai), and felt that these have an accepted place in the culture in Japan although similar entities arouse fear and loathing in his own country. During the residency he worked with both young children and adults, and produced puppet shows and animation with the characters he created.

PROFILE

1976年ナラヤンガンジ (バングラデシュ) 生まれ、在住。ダッカを拠点に活動。ダッカ大学大学院修了 (彫刻)。主な 展覧会に「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ」(福岡アジア美術館、2014)、「Readymade, Contemporary Art from Bangladesh」(Aicon Gallery、ニューヨーク、2014)、「第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ」(バングラデシュ館、2011)。

Born in Narayanganj (Bangladesh) in 1976. Lives in Narayanganj. Works in Dhaka. Graduated with an MFA in Sculpture from University of Dhaka. Recent exhibition: "The 5th Fukuoka Asian Triennale", Fukuoka Asian Art Museum. 2014.

中国系インドネシア人として、常に自身のアイデンティティと向き合い、「境界」を意識してきたノヴァリが、日本で出合った喫茶文化をとおして表現を試みました。茶の湯と煎茶の所作を、畳の上に抽象的な図形で表したアニメーションや、インドネシアのお茶の楽しみと、日本の茶道の美的な様式を重ね合わせたインスタレーションを制作しました。

Novali, who identifies as Chinese-Indonesian and has had a constant awareness of "borders," encountered Japanese tea culture in Japan, and expressed the movement and deportment of the tea ceremony and the brewing of tea in animated abstract forms projected on a tatami mat, and in an installation that juxtaposes the conventions of the tea ceremony with the way tea is enjoyed in his own country.

PROFILE

1978年スラカルタ (インドネシア) 生まれ、在住。デザイン・アカデミー・アイントホーフェン (オランダ) 修了。主な展覧会に「ブルデンシャル・アイ・アワード展」(ArtScience Musuem、シンガポール、2016)、「Shout!」(ローマ現代美術館 [MACRO]、2014)、「堂島リバービエンナーレ 2013」(堂島リバーフォーラム、大阪)。

Born in Surakarta (Indonesia) in 1978. Lives and works in Surakartas. Graduated with an MFA in IM course from Design Academy Eindhoven (The Netherland). Recent exhibition: "The Prudential Eye Awards 2016" ArtScience Museum, Singapore, 2016.

TWS Creator-in-Residence 2015-2016 Part 3

art center as world citizen

トーキョーワンダーサイト レジデンス 2015-2016 Part 3 アートセンター・アズ・ワールド・シチズン

2016.8.20 (±) — 10.2 (B)





15ヶ所のアートセンターの活動を考察

Discussion of the activities of 15 art centers

世界中で社会の枠組みが問い直されている昨今、その社会情勢を瞬時に反映するアートセンターの活動を多角的に考察し、世界各都市にある15ヶ所のアートセンターについてパネルで紹介しました。同時代のアートセンターの取り組みを共有することで、これからのアートセンターが担う役割や課題を検討しました。

Recently, social frameworks around the world have been re-examined. This project focused specifically on the activities of art centers, which swiftly reflect social circumstances in various ways, and introduced 15 art centers in various cities around the world using panels. By sharing the work of contemporary art centers, the roles and challenges of future art centers were examined.

DATA

◎会場:トーキョーワンダーサイト本郷 ◎参加機関:アジア・アート・アーカイブ(中国)、アートスペース(オーストラリア)、アート・ソンジェ・センター(韓国)、NTU コンテンボラリー・アート・センター(シンガボール)、サ・サ・バサック(カンボジア)、サン・アート(ベトナム)、ジム・トンプソン・アートセンター(タイ)、ソルト(トリコ)、タイペイ・アーティスト・ビレッジ/タイペイ・アーティスト・ビレッジ:トレジャー・ヒル(台湾)、台湾ビジュアルアーツ・アソシエーション(台湾)、デルフィナ財団(イギリス)、ニュー・ゼロ・アートスペース(ミャンマー)、パンブー・カーテン・スタジオ(台湾)、ブリット・アートトラスト(バングラデシュ)、LASANAA オルタナティブ・アート・スペース(ネパール)



小宮知久

Chiku KOMIYA

泳ぎつづけなければならない

We have to keep on swimming

公演日: 2016.10.21(金) 10.22(土) 19:30開演

DATA

◎出演者:小宮知久、根本真澄、 金沢青児、善養寺彩代

ジェイム・アイバニーズ

Iaime IBANEZ

コンテンポラリー・プリミティブ・アニメーション

The contemporary Primitive animation

ワークショップ: 2016.11.3 (木・祝) 11.5 (土) 13:00-18:00 11.6 (日) 11:00-14:00

プレゼンテーション: 2016.11.6 (日) 16:00-18:00





生成される楽譜を演奏者が初見で演奏するライブ・エレクトロニクス作品の公演。自らの声に よって演奏と生成のプロセスを繰り返す、という自己拘束し続けるシステムを作り出し、膨大 なエネルギーを消費して変化しつつある新しい身体の声を提示しました。

Performances of live electronic works by musicians playing at first sight from a generated score. This project created a system that maintains self-restraint, repeating the process of performance and generation with the human voice, and suggesting the voice of a new body that evolves through enormous consumption of energy.

PROFILE

1993年神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院音楽研究科作曲専攻在籍。音楽や音を演奏/聴取する身体とメディ ア・テクノロジーの関係を軸に、アコースティックな現代音楽からライブ・エレクトロニクス、サウンド・インスタレーショ ンまで幅広く制作している。

Born in Kanagawa in 1993. Enrolled in an MFA in Music Composition at Tokyo University of the Arts. His works are based on the interest in the relationship between the media technology and the body which listens and play music / sound. He creates acoustic compositions, live electronic works and sound installations.

身近にあるシンプルな素材で作られたストーリー・テリング・マシンによって生み出される原始 的な形態のアニメーション。3日間にわたるワークショップが行われ、参加者一人ひとりがストー リー・テリング・マシンを制作。絵画、パフォーマンス、映像と音楽を融合した独自の世界を披 露し、最終日にプレゼンテーションとして発表しました。

Animation in a primitive form, created by a storytelling machine made of familiar everyday materials. The project is three days workshop to make primitive animation which blended painting, performance, image and music, and unveiled a unique view of the world.

PROFILE

1982年オランダ生まれ。フローニンゲンを拠点に活動。2007年アカデミー・ミネルバ(オランダ)卒業。物語、キャラ クターの感情、物、シーン、サウンドスケープなどさまざまな方法を用いて、読み聞かせの実験的試みを行う。また、演 劇的パフォーマンスとインスタレーション、短編映画を統合し、直感的で遊び心のある作品を制作している。

Born in the Netherlands in 1982. Lives and works in Groningen. Graduated with a BFA from Minerva Academie, the Netherlands, in 2007. His work can be described as experiments in storytelling, showing the different layers of a story, the emotions of characters, objects, the scenery, the soundscape.

アレクサンドラ・ニエンチク

Aleksandra NIEMCZYK

ISHI

会期: 2016.11.26 (土) — 12.4 (日) 11:00-19:00



Vederlagsfond Prosiektstøtte Norway





人類最後の生き残りとなった女性 Ishiが残した映像日記を収集する、現在進行形のプロジェ クト。サラエボ、ノルウェー、日本で撮影された映像作品と日本で収集された骨董品を組み合 わせ、喪失、劣化、衰退や、物理的な限界の先にある超越性などを想起させる展示となりました。 また会期中、自身が監督した映像作品《CENTAUR》の特別上映も行いました。

This ongoing project collects the video diaries of Ishi, the last surviving witness of the human race. The exhibition combined films shot in Japan and other countries with two installations composed of old found objects from Japan's past which evoked loss, deterioration, decline, and the transcendence of physical limitations.

PROFILE

画家、映像作家。1977年ポーランド生まれ。オスロを拠点に活動。サラエボフィルムアカデミー修了。修士課程(映像) に在籍中、映画監督タル・ベーラの指導を受けて制作した《Baba Vanga》が、ポーランドの「Nowe Horyzonty 映画祭」 で上映されるほか、彼女の作品は「ロカルノ国際映画祭」(2009年)など多くの映画祭で上映されている。独自の映 画的言語を用いた映像やマルチメディア作品で、衰退、生存、記憶、文化などのテーマを追求している。

Painter and filmmaker. Born in Poland in 1977. Lives and works in Oslo. Graduated with an MFA in Film Directing from Bela Tarr's film.factory program at Sarajevo Film Academy. Her films were shown in many film festivals around the world, including "Locarno Film Festival" in 2009.

デシベル・ニュー・ミュージック・アンサンブル DECIBEL NEW MUSIC ENSEMBLE

チャンス・フィギュレーション **Chance Figuration**

公演日: 2016.12.9 (金) 12.10 (土) 19:30開演

DATA

◎演目: コンサート1 「コンプリー ト・ジョン・ケージ・ヴァリエー ションズ」(12/9)、コンサート2 「チャンス・フィギュレーション・ コラボレーションズ」(12/10) ◎ 出演者: デシベル・ニュー・ ミュージック・アンサンブル 平山晴花、仲井朋子、 アレクサンダー・シグマン 高橋渓太郎、河村聡子 (ダンス)*、 ダレン・ムーア (アナログシンセサ イザー)*、田代啓希(テープマシン)*、 松木在町(プリペアド琵琶)** ○協力: Western Australian Department of Culture and the Arts Edith Cowan University. 三友株式会社 *12/9のみ **12/10のみ



デシベル・ニュー・ミュージック・アンサンブルが開発する 「Decibel ScorePlayer | (デジタル図形 スコア)を使用して、偶然性の音楽の新たなアウトプットの可能性を模索する、2日間のコンサー ト。1日目はジョン・ケージの「Variations I-VIII」の全曲の日本初演。2日目は4名の作曲家の 新曲プログラムを作曲者とのトークを交えながら演奏し、テクノロジーとエレクトロニクスの 現在を伝えました。

This concert explored new possibilities of the music of chance using the Decibel ScorePlayer developed by Decibel New Music Ensemble. They played "Variations I-VIII" by John Cage and a program of new pieces by four composers.

PROFILE

2009年結成。西オーストラリアを拠点に活動。楽器とエレクトロニクスの融合、図形デジタル楽譜と作曲/演奏の拡 張性を探求する現代音楽アンサンブル。新しい図形デジタル楽譜「Decibel ScorePlayer」(iPadアプリ) の開発も手が ける。メンバーは、キャット・ホープ、リンゼイ・ヴィックリー、アーロン・ワイアット、スチュアート・ジェームズ、トリス テン・パー、ローラ・ボインズ。

Founded in 2009 and based in Western Australia. Contemporary music ensemble in the integration of acoustic instruments and electronics, the interpretation of graphic notations and pioneering digital score formats for composition and performance. Members are Cat Hope, Lindsay Vickery, Aaron Wyatt, Stuart James, Tristen Parr and Laura Boynes.

推奨プログラム

バイナリー **BINARY**

バイナリー: 二本のフルートのためのコンサート

BINARY: Amazing music for two flutes

公演日: 2016.12.16 (金) 12.17 (土) 19:15開演



◎助成:公益財団法人セゾン文化財団

◎協力:鳥公園

西尾佳織

Kaori NISHIO

2020

公演日: 2016.12.22 (木) 19:30開演 12.23 (金·祝) 15:00 · 19:30開演

12.24 (土) 15:00 · 19:30開演 12.25 (日) 14:00開演







デュオ、アルト・フルート、バス・フルートのための作品など、フルートの可能性を引き出した現 代曲にフォーカスした魅惑的なプログラムで、音楽的、身体的な限界へと挑戦したコンサート。 意欲的なプログラミングと卓越した演奏により、2015年度トーキョー・エクスペリメンタル・フェ スティバルの最優秀賞を受賞したフルート・デュオは、それぞれの持ち味を披露したソロ作品 に加え、息のあったパワフルな演奏で会場を魅了しました。

This concert featured a fascinating program, focusing on contemporary compositions, which explored the possibilities of the flute and challenged musical and physical limitations. In addition to solo works that each showcased their own unique flavor, a spirited flute duo enchanted the audience with a breathtaking and powerful performance.

PROFILE

2014年に結成。リナ・アンドノヴスカ (1987年生まれ) ジャネット・マッケイ (1973年生まれ) によるデュオ。デビュー 以来、精力的な活動を続け、二人のフルートの多様なサウンドと革新的な演奏は各所から高く評価されている。受 賞歴に「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル Vol.10 | 最優秀賞 (2015)。

Founded in 2014. Flute duo formed by Lina Andonovska (Born in 1987) and Janet McKay (Born in 1973). Their project on the road and win fans over with the spectrum of sounds that can be conjured up by two flutes. Award: "TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL Vol.10", Grand Prize, 2015.

「鳥公園 | 主宰の演出家として、俳優らと共同作業で作品を作ってきた西尾が、劇作 / 演出 / 演技の担う領域について立ち止まって検証したいという思いから始まったソロ企画。幼少期 をクアラルンプールで過ごした西尾の経験を戯曲にして、一人芝居で演じました。 プライベー トな内容を本人が演じることで当事者性を追及する実験的な作品となりました。

As the director of "Bird Park", Nishio worked in collaboration with actors and others. Here, she sought to stop and reexamine the fields of playwriting, production, and acting in a solo project. Nishio appeared alone, acting out her childhood experiences in Kuala Lumpur in dramatic form.

PROFILE

作家・演出家、鳥公園主宰。1985年生まれ。幼少期をマレーシアで過ごす。東京大学表象文化論科卒業。東京藝術 大学大学院芸術環境創造科修了。『カンロ』にて、第58回岸田國士戲曲賞最終候補作品にノミネート。鳥公園以外 の主な作品に、『例えば朝9時には誰がルーム51の角を曲がってくるかを知っていたとする』(作・共同演出)など。 2015-2016年度公益財団法人セゾン文化財団ジュニア・フェロー、およびアトリエ劇研アソシエイトアーティスト。

Writer, stage director, the director of theater company "Bird Park". Born in 1985. Spent her childhood in Malaysia. Graduated with a BA in Culture and Representation from the University of Tokyo and an MFA in Music from Tokyo University of the Arts, Nominated for the 58th (2014) Kishida Drama Award, Selected as a 2015-2016 Junior Fellow by The Saison Foundation. Associate Artist at Atelier Gekken.

いまいけぷろじぇくと

Imaike Project

今村俊博×池田 萠 第5回パフォーマンス・デュオ公演 音楽のバウンダリー

Toshihiro IMAMURA x Moe IKEDA The 5th performance duo, The boundary of Music

公演日: 2017.1.21 (土) 19:30開演 1.22 (日) 14:00開演

DATA

◎出演者:吳偉碩[梵谷](香港/現代演劇)、 鵜澤 光(東京/能楽) 武田幹也(東京/舞踏) ◎演出:卓翔(香港)

◎ ドラマトゥルク: 川口智子(東京)

絶対的 ABSOLUTE

彼と私 He and I

公演日: 2017.2.4 (土) 19:30開演 2.5 (日) 14:00開演







Photo: Reina Senga @ABSOLUTE

6人の作家によって書かれた作品の上演をとおして「音楽」を再考する公演。「どこからが/ど こまでが音楽なのか」。今村と池田の新作に加え、振付家・ダンサーの岩渕貞太による新作、 三輪眞弘と川鳥素晴による作品の再演、鈴木治行の作品をとおして「音楽の境界線」を思考 しました。

This performance rethought the very concept of music through the staging of works by six artists. In addition to new work by Ikeda and Imamura, there was a new work by Teita Iwabuchi, choreographer and dancer, repeat performances of pieces by Masahiro Miwa and Motoharu Kawashima, and a work by Haruyuki Suzuki, all of which were performances that challenged the boundaries of music.

PROFILE

作曲家 / パフォーマーの今村俊博 (1990年生まれ)と池田萠 (1986年生まれ)によるユニット。2014年11月第1回公 演「身体の魅力・無力・戦闘力」、2015年6月第2回公演「《祝祭》から《内省》へ」、2016年3月第3回公演「ふじも とくんといっしょ!」、同年9月第4回公演「続《祝祭》から《内省》へ」をそれぞれ東京、愛知で開催。

Duo group formed by Toshihiro Imamura (Born in 1990) and Moe Ikeda (Born in 1986). Recent activities: "Appeal, powerless and fighting power of musical body", 2014, "From festivals to introspection", 2015, "With my friend Fujimoto-kun!", 2016 and "From festivals to introspection the 2nd", 2016.

演劇、能、舞踏という異なる分野の表現者が対峙し、互いの専門を表現しながら対話を進め ることで、舞台上にある種の化学反応を引き起こした演劇型プロジェクト。それぞれの演者が 英語、日本語、広東語で語る一人芝居から始まり、二人が交錯するシーンを経て、最後は三人 の身体が交わることで、互いの言語や身体を超えた表現が繰り広げられました。

A theatrical project in which artists in different fields - theater, Noh, Butoh dance - came together and sparked a chemical reaction on stage. It began with three actors doing monologues in English, Japanese, Cantonese, and in the end, the three people interacted physically to express things that transcended the language barrier.

PROFILE

2013年にアジアにおける次世代のアーティストの交流を目指し、演出家の川口智子(東京)とドキュメンタリー映像 作家の卓翔(香港)を中心に活動を開始。継続的に交流ワークショップを開催し、現代演劇、コンテンポラリーダンス、 舞踏、広東オペラ、作曲などといった多分野で活動する作家が参加。アジアのシェア世代による移動劇場として『絶 対飛行機」(作:佐藤信)の日本語、広東語による上演活動を継続中。

Founded by Tomoco Kawaguchi (theatre director/Tokyo) and Cheuk Cheung (film director/Hong Kong) in 2013. Aim to set up a cross-cultural exchange network, in stimulating creativity and idea exchange between young artists in Asia. Artists from different disciplines (Theatre, Dance, Butoh, Music, Cantonese Opera, etc) have joined exchange workshops.

小森はるか+瀬尾夏美

Haruka KOMORI + Natsumi SEO

上映とトーク『波のした、土のうえ』

Screening and Talk 'under the wave, on the ground'

上映日: **2017.2.10** (金) 19:15開演 **2.11** (土·祝) 14:00·19:15開演 **2.12** (日) 14:00開演

児玉北斗

Hokuto KODAMA

Trace(s)

公演日: 2017.3.2 (木) 19:15開演 3.3 (金) 19:15開演

3.4 (土) 14:00 · 19:15開演 3.5 (日) 14:00開演









小森と瀬尾が、東日本大震災で津波を受けた沿岸の町、陸前高田で出会った人びとの言葉と 風景の3年8ヶ月の記録を、物語を起こすように構成した作品「波のした、土のうえ」を上映。 写真家の鈴木理策氏、アートプロデューサーの相馬千秋氏をゲストに招いたアフター・トークで は、制作のきっかけや、震災をとおして小森と瀬尾が得た経験を語りました。

Komori and Seo screened under the wave, on the ground, a film work telling a three-year and eight-month story composed of the landscapes and words of the people encountered in coastal communities that bore the brunt of the tsunami during the Great East Japan Earthquake. In the artists' talks afterward, they spoke about their inspiration for the work and the experiences they gained as a result of the disaster.

PROFILE

映像作家の小森はるか(1989年生まれ)と画家で作家の瀬尾夏美(1988年生まれ)によるアートデュオ。2011年3月、 東北沿岸にボランティアに行ったことをきっかけに活動を開始。2012年、岩手県陸前高田市に拠点を移し、以後、日々 移り変わる風景と人びとのことばの記録を続けている。2015年、東北で活動する仲間とともに、記録を受け渡すた めの表現を実践的につくっていく組織「一般社団法人 NOOK」を設立。

Founded in March 2011, Art duo of a filmmaker, Haruka Komori (Born in 1989) and a painter and writer Natsumi Seo (Born in 1988). Since The Great East Japan Earthquake, they moved to Rikuzentakata, Iwate in 2012 and keep on document the scenery which changes day by day due to the reconstruction as well as people living there.

空のペットボトルを見た時に、そこに存在するペットボトルよりも存在しない水に対して強い 「リアリティ」を感じたことから始まった、児玉によるソロ・パフォーマンス。水と経済のねじれ た関係性や史実のプレゼンテーション、個人的な体験の独白などがダンスと絡み合い、ダンス やコレオグラフィーの意味を問いかけるパフォーマンスを披露しました。

When he saw empty plastic bottles, Kodama felt a strong sense of the reality of the absent water. He gave a presentation on water and the economy, a monologue on personal experiences, and so forth, intertwined with dance, in a performance that questioned the meanings of dance and of choreography.

PROFILE

ダンサー / コレオグラファー。1982年生まれ。ストックホルム在住。ストックホルム芸術大学在籍。2001年より、カナ ダやスウェーデンのダンスカンパニーに所属。2012年より、スウェーデン王立バレエ団ファーストソリスト。マッツ・ エックやヴィム・ヴァンデケープスなどの著名なコレオグラファーの作品の創作に関わり、初演キャストとしても参加。 2014年と2016年に新国立劇場主催公演で、振付・出演・音楽を担当。

Dancer/Choreographer. Born in 1982. Works and lives in Stockholm. Enrolled in the Master's programme in Choreography at the Stockholm University of the Arts in 2016. He has danced in professional dance companies worldwide since 2001, and took a part of creations with prestigious choreographers such as Mats Ek, Wim Vandekeybus to name a few.

推奨プログラム

素我螺部

Scarabe

DATA

◎出演者:藤井b泉、宮原由紀夫、 篠原未起子 (ダンス)、原 大介 (ギター)、 西山雄大(生命理論科学)

SELL OUR BODY EXP

公演日: **2017.3.10** (金) 19:30開演 **3.11** (土) 14:00·19:30開演 **3.12** (日) 14:00開演





ダンス、ギター、理論生命科学の融合により呼び起こされる自他非分離性をテーマに、演者、 観客が五感を越えて浸食し合う実験的パフォーマンス。西山雄大による「カニの群れ」につい ての研究発表を、メンバーそれぞれのインスピレーションを盛り込みながら膨らませ、独創的な 世界観で会場を満たしました。

In this experimental performance, the performers and spectators eroded their boundaries and interacted in a manner transcending the five senses, with the theme of the inseparability of self and other. A presentation of research by Yuta Nishiyama on "crab groups" was expanded by incorporating inspirations from each member, and thrilled the venue with its original worldview.

PROFILE

2014年夏結成。日本初劇場専属舞踊団 Noism1をともにした藤井b泉+宮原由紀夫+篠原未起子、ギタリスト原 大介によるクリエイティブダンスグループ。『SELL OUR BODY』公演ツアーを皮切りに創作活動に並行して市や大学 の事業に参加するなど枠組みを越えた活動を展開中。受賞歴に「トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル Vol.10」特別賞 (2015)。

Founded in summer 2014 by Izumi b. Fujii, Yukio Miyahara and Mikiko Shinohara, former members of the theater resident dance company Noism1. Scarabe is a dance group in pursuit of own creative and realistic world. Award: "TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL Vol.10", Special Prize, 2015.

DATA

◎出演者:宮内康乃、浦畠晶子、 大島菜央、筒井キリイ、横手ありさ

つむぎね

Tsumugine

公演日: 2017.3.25 (土) 15:00:19:30開演 3.26 (日) 15:00開演



@Masumi Kawamura

声や鍵盤ハーモニカを中心に独自の音世界を紡ぎ出すつむぎね。春を迎える「蘇生の儀式」とし て音楽・パフォーマンスの原点となる儀礼行為を作品化しました。ワークショップ参加者との作品 制作にも挑戦し、さらに来場者とともに声を紡ぎ、完全な暗闇を作るなど、観客と演者の境界線 を曖昧にした力強い響きが生まれました。タイトルの「○」が示すように、2009 年にTWS 本郷で 初公演を行ったつむぎねの原点回帰であり、新たな段階へと進む通過儀礼的な公演となりました。 Tsumugine, who create a unique sound environment with voice, keyboard harmonica, bells, drums and so forth, staged a "ritual of resurrection of Tsumugine Village" to welcome spring. As the title " O" indicates, it was the return to origins for Tsumugine, which first performed at TWS Hongo in 2009, and acted as a milestone for a new stage.

PROFILE

2008年結成。作曲家の宮内康乃を中心とした女性たちによる音楽パフォーマンスグループ。楽譜ではなく、人間の 呼吸のリズムをきっかけとする単純なルールをもとに音を紡ぎ出していく独自の表現により演奏を行う。受賞歴に 「EXPERIMENTAL SOUND & ART & PERFORMANCE FESTIVAL | 最優秀賞 (2008)。

Founded in 2008. A music performance group initiated by Yasuno Miyauchl, aims for a music performance which is not only producing sounds, but extending to spatial and visual expression. Award: "EXPERIMENTAL SOUND & ART & PERFORMANCE FESTIVAL", Grand Prize, 2008.

荒木優光

Masamitsu ARAKI

Acoustic Device 騒音のための 5 楽章

Acoustic Device -Five movements for the noise-

会期: 2016.10.15 (±) — 11.13 (日)

POST-ER OFFICE 実行委員会

POST-ER OFFICE Executive Committee

POST-ER OFFICE

会期: 2016.10.15 (±) — 11.13 (目)









Acoustic Device #2.2016

「聴取の現場 | としての音響作品を制作する荒木は、ネット上に溢れる騒音の問題(非常に個 人的なものも含め)を拾い上げ、それを代弁しながら街宣車で走行したビデオ・インスタレーショ ンを展示しました。渋谷や新宿といった繁華街や、目黒の住宅街、人気の無い羽田付近を、時 には声高に、時には囁くように発声し、実世界で所在を失った音に、新たな存在を与えました。

Araki, who creates sound pieces that act as "sites for listening," collected noise-related stories that flood the Internet (including highly personal narratives), and presented a video installation in which he traversed the streets in a propaganda truck while speaking these words of others.

PROFILE

アーティスト、音響・音楽家。1981年山形県生まれ。京都在住。京都造形芸術大学映像舞台芸術学科卒業。劇場上 演実験《showing》の企画・運営や、記録にまつわる作業集団 ARCHIVES PAYディレクター。 バンド NEW MANUKEのメ ンバーとしても活動。

Artist. Born in Yamagata in 1981. Lives in Kyoto. Graduated with a BA in Visual and Performing Arts from Kyoto University of Art and Design. Director of archival Work groups "ARCHIVES PAY" and Planning and management for series of performance work <showing>. Belong to the band "NEW MANUKE".

芸術表現の「過去 | 「現在 | 「未来 | に関連する声や思い、願い、訴えを、ポスター化・ステート メント化する試み。その試みをとおして、新たな提案や議論を生み出すことができるのではな いかという考えに基づき、ポスターの展示およびテンポラリーなオフィス機能を核とする、ポス ター・ベースの議論のためのプラットフォームの構築を目指しました。

This was an attempt to create posters and statements conveying voices, thoughts, wishes, and appeals related to the past, present and future of art. The artists aimed to build a platform for discussion of posters, centered on the display of posters and their temporary office functions.

PROFILE

アーティストコレクティブの blan Class (2009年設立)、CAMP (2006年設立)、基礎芸術 (2012年結成) のメンバーか らなる本展のためのプロジェクト

Project-based formed by artist collective; blanClass (Founded in 2009), CAMP (Founded in 2006), Contemporary Art Think-tank (Founded in 2012).

柯 念璞 (コー・ネンープ)

KO Nien-Pu

旗、越境者と無法地帯

Flags, Transnational - Migrants and Outlaw Territories

会期: 2016.11.26 (土) — 12.25 (日)

DATA

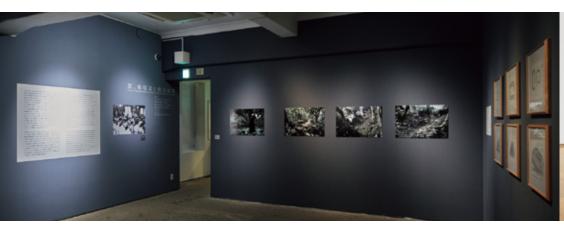
◎参加作家:藤井光、 琴 仙姫 (クム・ソニ) 高 俊宏 (カオ・ジュンホン)、 區 委治 (アウ・ショウイー) ◎助成:財団法人国家文

永田康祐

Kosuke NAGATA

Therapist

会期: 2016.11.26 (±) — 12.25 (日)







1946年に東京の渋谷で発生した、在日台湾人と警察との抗争「渋谷事件」を題材とした、台湾 人キュレーターによる企画展。日本、台湾、韓国、マレーシアの作家が、戦後の記憶およびポスト コロニアルが経験してきた地理トの移動とコンテクストの変化を整理し、その歴史を改めて振 り返るとともに、越境を通じて人の境遇、人間、場所、故郷の意義を問う作品を紹介しました。

Artists from Japan, Taiwan, South Korea and Malaysia explored postwar memories and post-colonial experiences, and presented works that inquire into this history and into the meanings of people's circumstances, humanity, locality, and place of origin, focusing on the theme of the Shibuya Incident, a conflict between Taiwanese residents of Japan and police that occurred in 1946.

PROFILE

インディペンデント・キュレーター。1988年生まれ。台湾在住。近年は香港、韓国、マレーシアなどでの都市研究とアー トプロジェクトに参加し、長期にわたり東アジアの植民地史、社会運動、芸術、都市空間などをテーマに研究を進めて いる。主な展覧会に「Beyond the Borderline – Exiles from the Native Land」(台湾、香港、東京、韓国、北京、2015) など。

Independent curator. Born in 1988. Lives in Taiwan. Her curatorial practice centers around use of urban spaces in East Asia, artistic action, social movement, and colonial history. Recent activity: "Beyond the Borderline- Exiles from the Native Land", Taiwan, Hong Kong, Tokyo, Korea and Beijing, 2015.

メディアとイメージの関係から、人々の認識のありかたを問い直すような試みを行う永田。写 真や映像、3DCGなどのメディアを用いて、作品の物質的な条件における主従関係と、そこにお ける認識のずれを扱った作品を提示しました。潰れたダンボールのように見えて、実は写真プ リントで構成された立体や、拡張現実 (AR)と実物を組み合わせたインスタレーションなど、作 品の成立条件を解体し、鑑賞行為の再構築を試みました。

Nagata seeks to rethink the way people perceive images in terms of the relationship between media and image. Working in various media, he presents works dealing with power relationships relating to material conditions, and the discrepancies in how people perceive them. Nagata seeks to dismantle the conditions of the work's production and reconfigure the very act of viewing art.

PROFILE

1990年愛知県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。主な展覧会・プロジェクトに「Malformed Object」(山 本現代、東京、2016)、「無条件修復」(milkyeast、東京、2015)、「マテリアライジング展 III」(京都市立芸術大学ギャ ラリー @KCUA、2015)、「これもまた、それである」(東京藝術大学芸術情報センター、2015)、「類推する形態」(HAGISO、 東京、2014) など。

Born in Aichi in 1990. Graduated with an MFA from Tokyo University of the Arts. Recent exhibitions: "Malformed Object", YAMAMOTO GENDAI, Tokyo, 2016, "Materializing Exhibition III" Kyoto City University of Arts Art Gallery @ KCUA, 2015, "This is also it", Tokyo University of the Arts Art Media Center, 2015.

フィオナ・アムンゼン

Fiona AMUNDSEN

Arsenal of Democracy

アーセナル・オブ・デモクラシー

会期: 2017.1.14 (土) — 2.12 (日)

ユナイテッドピープル株式会社 UNITED PEOPLE

◎展示協力:荒木了平(くま美術店)

未来を創る映画館展

会期: 2017.1.14 (土) — 2.12 (日)

Future Cinema







「未来の映画館 | 創造セミナー 2016 UNITED PEOPLE Future Cinema Seminar

映画を共有することで生まれるコミュニティとしての機能や、市民発の企画の過程で育まれる 主体性など、未来の「映画館」が持ち得る、新しい可能性を可視化した企画。会期中には、市 民上映会の実施を志す人のためのセミナーや、展示室を上映会場に見立て、映画を鑑賞する イベントを行いました。

This project visualizes new possibilities for the future of the movie theater, including functioning as a community brought about by the sharing of movies, and nurturing the autonomy of citizens through the planning process. During the exhibition, seminars for the implementation of citizen film screenings were held, as well as film appreciation events in the gallery.

PROFILE

2002年設立。「人と人をつないで世界の課題を解決する」をミッションに、映画の買い付け・配給・宣伝事業を行う。 扱っている映画は、環境問題や人権問題、幸福論など、社会的メッセージ性があるもので、主にドキュメンタリー。そ うした映画のテーマについてより深く考えてもらえるよう、運営サイト「cinemo」を通じて、市民上映会の輪を広げ ている。

Established in 2002. Aims for uniting people to solve problems around the world, distributes films especially documentaries whose themes relate to social problems such as environment and human rights issues as well as focuses on the 'civil screening movement' where films are screened at public spaces.

第二次世界大戦の歴史、記憶、物語、文化的記念碑の関係性を探求するアムンゼン。日系アメリ カ人として、唯一太平洋地域の軍事作戦に参加したベン黒木の物語を、ピッツバーグの旧鉄工 所跡地、キャリー・ファーナスの写真と、東京大空襲について語る音声録音を用いた映像作品で 構成しました。会期中には、同じ顕材を扱うアーティストの小泉明郎氏とのトークを行いました。

Amundsen explores the history of World War II memories, stories, and cultural monuments. Her work explore the story of Ben Kuroki, the only Japanese-American who participated in US military operations in the Pacific region, and the experiences of a woman who lost her family in the 1945 Tokyo Air Raids. Both videos reflect on relationships between American and Japanese imperialism, patriotism and memorialising.

PROFILE

アーティスト。1973年生まれ。ニュージーランド在住。2015年ワイカト大学 (ニュージーランド) 社会科学専攻修了。アジ ア太平洋戦争の歴史的跡地が抱えるトラウマ、社会的、政治的な物語、記憶についてレンズをとおし、写真と映像で表現 している。この戦争の歴史について、誰が思い出すことを許されるのか、倫理的に思い出すということはどういうことな のか、更にその記憶がどのように見えてくるのかを追及している。「平成28年度リサーチ・レジデンス・プログラム」参加。

Artist. Born in 1973. Lives and works in New Zealand. Graduated with an MA in Social Sciences from University of Waikato, New Zealand, 2015. She questions relationships between historical sites of trauma, socio-political narratives, memorialising, and lens-based representation associated with the Asia-Pacific Theatre of WW II. Participated in TWS Research Residency Program 2016.

ハビエル・レオン・ボルハ

Xavier León BORJA

ロング・ナイト

La larga noche (The long night)

会期: 2017.2.25 (±) -- 3.26 (日)

◎キュレーター:メイシス・カルメナティ ◎協賛:エクアドル中央大学 ◎協力:エクアドル外務省

DATA

◎協力:東山アーティスツ・プレイスメ ント・サービス (HAPS)

井上亜美

Ami INOUE

猟師の生活 THE LIFE OF THE HUNTER 会期: 2017.2.25 (土) — 3.26 (目)







《生活》LIFE, 2017

《猟師》THE HUNTER, 2017

世界中に蔓延する移民問題や隠された暴力など、正史では語られない人々の記憶の物語に注 目して制作を行うボルハ。新聞記事やインターネット上の写真などをベースに、幾重にも塗り 重ねられた絵画やコラージュ、映像など多彩な手法で表現しました。会期中には、制作プロセ スやエクアドルのアート事情などについて語るトーク・イベントを行いました。

León Borja creates works focusing on people's memory-based narratives that go untold in official histories, such as immigration issues pervading the world and covert violence. He created works using a variety of techniques, including paintings with numerous overlapping layers, collage, and video.

PROFILE

1979年キト(エクアドル)生まれ。2012年よりキト在住。数学・統計学を修了後、メキシコ国立自治大学ビジュアル アート専攻修士修了。6年メキシコシティに在住後、1年半ハバナに滞在。現在、エクアドル中央大学美術学部学部長。

Born in Quito in 1979. Graduated with an MA in Visual Arts at the National Autonomous University of Mexico. Stayed for a year and a half in Havana and currently lives in Quito since 2012. Dean of the Faculty of Arts Universidad Central del Ecuador.

猟師をしながら創作活動を続ける井上。映像作品には山で狩りをする井上の姿が映し出され ます。それとは対照的な無機質な空間に冷蔵庫、洗濯機、ダイニングテーブルが置かれ、狩って きた獣の毛皮を洗い、調理するという彼女にとって日常的な行為が示されることで、その生活 の非日常さが露となるインスタレーションになりました。

Inoue pursues creative activities while also being active as a hunter. Her video work depicted her hunting in the mountains. Other scenes show her cooking animals she has hunted in a contrastingly inorganic space, in what for her is an ordinary activity, although the resulting installation conveyed the sense of an extraordinary lifestyle.

PROFILE

1991年宮城県生まれ。第5期 HAPSスタジオ使用者として京都府在住。東京藝術大学大学院映像研究科修士課程修 了。在学中に狩猟を始める。現場でつぎつぎに起こる出来事をエスノグラフィックな視点で見つめ、自身が出演・演 出・記録する手法で映像作品を制作している。

Born in Miyagi in 1991. Lives in Kyoto as a studio artist of HAPS studio. Graduated with an MA in Film and New Media from Tokyo University of the Arts. Started hunting while her master study. She observes events and happenings from an ethnographical view point, creates video works by means of self-performance and direction.

Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists

若手のための現代音楽企画ゼミ 2016

~音楽を伝える言葉を身につける~

若手音楽家の企画力と発信力を育成

Cultivating the organizational and expressive abilities of young music ans

現代音楽の企画発表に意欲のある若手音楽家を対象に、企画力や発信力の向上を目的とする育成プログラム。受講生は多彩な講師から知識や技術を学び、企画を実現するために必要な「音楽を伝える言葉」を考え、ワークショップとコンサートが連動した企画を考案しました。ゼミの集大成として、4名の講師と一般の観覧者を前に審査会形式の「公開プレゼンテーション」で企画発表を行いました。発表後に行われた観覧者を交えた質疑応答では活発な意見交換が行われ、「音楽を伝える言葉」についてのディスカッションに発展するなど、受講生の企画立案能力や発信力の向上をさらに刺激する場となりました。

This training program was targeted at young musicians with the ambition to plan and present contemporary music, with the goal of improving their organizational and expressive abilities. Participants learned and honed their skills with a variety of instructors, thought about the "words to convey music" that their project required, and devised coordinated workshop-concert plans. The seminar culminated with "public presentations" in the form of performances planned and presented in front of a panel of four instructors and members of the general public. During the question-and-answer session that followed the presentation there was an active exchange of opinions that further developed the discussion about "words to convey music," further stimulating the participants' project planning and communication abilities.

DATA

◎会場:東京芸術劇場ミーティングルーム、シンフォニースペース、リハーサルルーム L◎協力:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場、東京文化会館

若手のための現代音楽企画ゼミ 2016 プログラム









,オリエンテーション 2,プレゼンテーション・ワークショップ 3,4,ワークショップ講座

A. オリエンテーション

2016.7.20 (水) 18:00-21:00 ゲスト:平原慎太郎 (OrganWorks 主宰、 ダンサー・振付家)

B. レクチャー1~4

「社会へ開かれた現代音楽とは?」 ①2016.7.27 (水) 19:00-21:00 講師:池田卓夫(音楽ジャーナリスト) ②2016.7.28 (木) 19:00-21:00

講師:国塩哲紀(東京都交響楽団芸術主幹)

③2016.7.29 (金) 19:00-21:00

講師: 久野敦子(公益財団法人セゾン文化財団 事務局長兼プログラム・ディレクター)

④2016.8.6 (土) 14:00-15:30

講師:水上俊秀(一般財団法人地域創造 芸術

環境部ディレクター[音楽])

C.プレゼンテーション・ワークショップ

2016.8.4 (木) 18:00-21:00

講師:箕口一美(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科講師)

D. ワークショップ講座

2016.8.5 (金) 18:00-21:00

講師:楠瀬寿賀子(公益財団法人せたがや文 化財団音楽事業部)、中川賢一(ピアニスト、 指揮者)

E. 企画書ガイダンス

2016.8.6 (土) 15:45-18:00

F. 第1回企画提出

2016.9.23(金)

若手のための現代音楽企画ゼミ 2016 プログラム









5.ワークショップ講座 6.プレゼンテーション講評会 7.8.公開プレゼンテーション

G. 企画講評会

2016.10.26 (水) 18:00-20:00

講師:楠瀬寿賀子、中川賢一、沼野雄司(音楽学者、桐朋学園大学教授)、梶奈生子(東京文化会館事業企画課長)

H. 第2回企画提出

2016.11.16 (水)

I.プレゼンテーション講評会・リハーサル

2016.11.22 (火)、23 (水・祝)、29 (火)

J.プレゼンテーション講評会

2016.12.14 (水) 18:00-21:30

講師:楠瀬寿賀子、中川賢一、沼野雄司、

梶 奈生子

K. 公開プレゼンテーション・リハーサル

2017.1.11 (水)、12 (木)

L. 公開プレゼンテーション

2017.1.19 (木) 14:00-18:00

講師:楠瀬寿賀子、中川賢一、沼野雄司、

梶 奈生子

発表者[発表順]:

野口桃江(作曲) 「楽譜ノ美学」

渡辺卓哉(作曲/サウンドデザイン)「(dis) CONNECT」

深川智美(打楽器)

「Precis Nu! スウェーデン現代音楽の『今』を

体感する。

村田恵子(マリンバ)「音の旅~マリンバ編~」

岩崎愛子(打楽器) [Surround Experiments - Timber-]

高橋渓太郎(作曲)

「作曲を聴く-音以上作品未満から-」

山田祐将(打楽器)

「現代吹奏楽作品を指揮するとは?」

桑原香矢(ヴァイオリン/ヴィオラ)

「ヴァイオリンがちょっと気になる人のための

現代音楽入門編」

TOKYO WONDER SITE ANNUAL REPORT 2016

PART.3 REVIEWS

- 1. TWS-Emerging 2016
- 2. OPEN SITE 2016-2017
- 3. Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists

講評/審査員評

- 1. TWS-Emerging 2016
- 2. オープンサイト 2016-2017
- 3. 若手のための現代音楽企画ゼミ 2016

REVIEWS: TWS-Emerging 2016

田中秀介「円転の節」

早朝、バイトに行く途上で眼にする人気のな い都市の光景が大画面に描かれている。対面 には自分でリニューアルした自宅の絵、さらに バイト先のパン屋の《ワダ》氏の肖像や会心の 作という歩道の絵もある。階トへの階段には 懐かしいカセットテープなどの小品が、日常に 同居する異時間の窓として登場する。

という自転車に乗る女性の夜の情景に眼が引 かれる。その女性はパートナーで、生活に不可 欠な存在のため、「下部構造 | と命名された。 フラットなストロークを並置させるペインタリー な人物描写は、具象を抽象で描く大戦直後の 欧米の作品やカラー・フィールド系の作家を想 起させる。だが、形象内部のシステマティック でミニマルなブラッシュ・ワークに反して、色相 は捕えがたい混色であることも多く、主観・客

観が一体化する沈着したイメージの醸成は、む しろベルギーのリュック・タイマンスの雰囲気 を思わせる。とはいえ、画布にたんたんと物語 られる田中秀介の日常は、愚直なまでに誠実な 意志に満たされている。

《星の上の実家》は原型としての家だそう だ。自らの生存の意味を掘り下げるとき、田中 階上は午後の絵、《インフラストラクチャー》 にとっての一日は決して同じ反復ではない重 量ときらめきをもって展開する。オプティミス ティックとはいえない色調の複層と変奏は、現 代そして世界の基調音への共鳴だろうし、尽く せないモチーフを北斎のように日々の営みから 掬い取ろうとする決意は、田中の独特な文脈 主義ともいえよう。そして最後の絵は、田中が バイト帰りに見る夕暮れの都市の光景で、階 下と同じ構図の大画面だが、不思議な光を湛

京都・嵐山、宝巌院の珍しい借景回游式庭 園をテーマに描いた田中里奈の2点の《獅子吼 の庭(|,||)》を見ながら、ふとサイ・トゥオンブ リを思い出した。トゥオンブリは作品を孤立し たものではなく、シークエンスとしてとらえた。 古い庭園が好きでよく訪れるという田中は、自 らが歩く30分の視線の導線を「視線の回遊」 というコンセプトに結晶させ、トゥオンブリのよ うに作品の連関をシークエンスとしたのとは異 なり、屏風のような3m以上ある横長大画面に 多視点を導入して移動する場をシークエンス 化した。観客にも同様の順路で見てもらいたい

インスピレーションの源泉は、以前から親し く見ていた狩野派の絵。もとより樹木への愛も いない。 あり、前畳を斜めに切る大木から着手したとき、 狩野永徳の国宝檜図屏風を思い出したという。

と方角を示す記号が配されている。

田中里奈 「獅子吼の庭 |

室町時代の禅僧の作庭が内包する抽象性を、 田中は佇みながら、視線と身体に浸潤させ、フ れている。現代の造形言語に置換された線、ネッ

無意識の類似とは、まさに相当の狩野派だ。

ラットな面と形のパッチワーク構図に意訳し再 構築した。意訳はとりわけ自由な彩色に際立っ ている。|は水平と俯瞰の2視点の導入、||は鳥 瞰遠近法で描かれているが、整理された1の画 面に比べ、川は動的なカオスの感覚が醸し出さ ト世界のアイコンのような形態、自由な色彩、 その上に降り注ぐ雨と達筆な流水が、透明な リズムを奉でる。IとIIの絵画の対比と連関が、 構図や手法による結果としてではなく、創意と して意識化されていたら、より明確化したに違

柳沢秀行(大原美術館 学芸課長) 第2期

大杉好弘「不確かな現実、確かなイメージ」

1年前まで無彩色の凍てついた林や山や海の 光景を描いていた大杉好弘の絵には、シュルレ アリスムの空想世界に通じるものがあった。と ころが新作は生粋リアリズム。自宅や仕事場 のスタジオなどになにげなく置かれたオブジェ が題材だ。若手アーティストの千葉正也とテー マの近接を指摘できるものの、絵画への姿勢は まったく異なる。油彩だが、水彩のような淡い パステル調の色彩で描かれた机上の日用品は、 ジョルジュ・モランディも想起させる。とはいえ、 最近まで実物を見たことがなく、好きだがとく に気にかけていた作家ではないという。

描く行為を、芸術を手掛けるといった緊張感 や特権から解き放ち、砂場で子供が遊ぶような、 たんなる日常の活動に並置させたのが、大杉の 新たな制作コンセプトだ。別室に、お愛嬌で作っ たかのような小鳥の陶器も展示しており、プロ

とアマチュアの垣根を取り払って、肩を張らな い創作態度を実証する。トークの際に会場で、 彼のこうした姿勢を「アンチアートですね」と 言ったのだが、芸術という概念を無化する場か ら出発しているのだから、汎芸術、あるいは日 常芸術と言ったほうがいいのかもしれない。

明るく平和な画面には、現代の恐怖とか先 行きの不安感などの思わせぶりなジェスチャー は完全に払拭されている。特別な理由はなく 選ばれ、記録された日々の一場面は、ささやか であっても作家にとってのかけがいのないリア リティであるがゆえに、確かな空気感と時間性 を有している。すべてを捨てきったすがすがし い清涼感は、何かの始まりを予感させ、天下無 双の構えが、一つの勇気と自信を示唆している。

強く光を感じさせる鮮やかな色彩で満たされ ム、彼女が踊り続ける映像などが置かれた1階 ている。ただ花沢の関心は、首をくくりつつも 花を散ずる人、肉体が切断されながらも意識が それに気づいていない人、そして混沌とする世 界を超越的な場から俯瞰する聖なる存在といっ たそこに描かれている図像にある。

彼女は「生と死に境界線はない」「全ては繋 示し、生と死、歓喜と苦痛、愛と憎、聖と俗な どが二項対立的に存在するのではなく、そうし た相反するものがゆるやかに入れ替わり、ある いは相互に浸透する世界のあり方を語る。

そんな彼女であるから、本展で与えられた空 間は自身の世界観を示すのにベストの構造で 出会う私たちは、ダンテならぬ花沢が作り上げ あった。

薄暗い中に、支持体が部分的に木枠から外

花沢 忍「Conspiracy of ecstasy」

主要作《Conspiracy of ecstasy》の大画面は、 され壁に立てかけた絵画、書き連ねられたポエ のフロアーは、雑多な要素が入り混じる俗界で ある。そこから螺旋階段を登ると、一転して明 るい光に満ちた空間となり、観客はその視野全 てを覆う大作《Conspiracy of ecstasy》と出会

木枠から外されたカンバスが壁に直接留めら がっている」「生命の円環」というキーワードを れている意図は、タブローとしての絵画ではな く、この場所と共に存在する壁画として提示す るためだと言う。その空間を彼女は聖堂とも語 るように、まさにここは天上あるいは聖なる世 界として仮定されている。俗から聖へと螺旋 階段を登り、そして《Conspiracy of ecstasy》と た「神曲」の世界を辿るのである。

142

中野奈々惠「余白の話」

手法を活かし、時には文字をも使いながら異な るイメージを一つの画面の中に同居させている。 ているのだ。

画面にある多様なイメージのうち、コマの内 側はモノトーンで、そして中野が「余白」と呼 いる。

れているのだから、てっきり私は、コマの内に描 かれた図像は漫画のように一連のストーリーをて、画面にあるイメージから想像力をかきたて、 語り、一方で、それを図とすれば地にあたる余 白には中野自身のリアルな体験が語られ、その 2項の関係性を読み解くような作品なのかと た方がよいのであろう。 思った。

しかし彼女の話では、コマ同士はひとつのス想像力の余白を与えてくれるのである。 トーリーを紡ぐものどころか、互いに無関係で あるし、またコマ内のイメージ、コマ外のイメー

中野の作品は、漫画の吹き出しやコマ割りの ジとの連関もないという。 つまり画面上の諸々 のイメージは、それぞれ単独バラバラに存在し

そうなると、コマを採用した理由も、彼女が 余白に執着する理由もわかりづらいのだが、そ ぶコマ外の部分にはカラフルな色彩が施されて うなのだとしたら、もう、寄せ集められたイメー ジの関係性を求めるような態度で作品に向か そのように色彩において明確な対比がつけら うわけにはいかない。画面に秘められた答えを 読み解く態度を捨て、誤読も妄想も総動員し そうして生み出されたステージからさらに想像 力を飛翔させる態度で、彼女の作品と向き合っ

そうやって彼女は、私たちの日常に、大きな

吉田が手掛けた二つの展示空間は、作品の マテリアルも空間の整え方もまるで異なってい された2点の絵画と《virtual》によるインスタ

吉田裕亮 「OVERLAP」

片方の部屋は、実際に彼が過ごした7日間の テント生活に関わるアイテムが並ぶ。彼は、そ のテント生活を送っていたある日、何者かが吉 くは警察へ通報) する事態に出くわす。その瞬 崩れ去ったという。

もうひとつの部屋には、エッジの効いた美しけが試みられている。 い色面で構成された絵画が並び、それらはさら に二つの作品群に分かれる。

日本の領土の形が描かれているが、自国を中 国の形が認識しづらいことを提示する。

もうひとつのグループは《perspective》と題 レーション。それぞれ水平と垂直の色面で構成 された《perspective》の2点の画面には、一筋 の細い斜線がひかれ、それを画面の外まで延長 するとその二つの線が出会う場所 = 消失点に、 田が籠るテントのすぐ外で誰かへ電話(おそら 小さな白い箱に1点の穴が開いた《virtual》が 置かれる。観客はこの斜線に気づき、その関係 間、内部は安全、外部は危険との認識は簡単に を把握し、そして小さな点を覗くことで、さら に箱の内と外の反転に思いが至るという仕掛

こうして見れば、彼の作品には認識の転換や 逆転への注視が通底していることが理解できる。 《untitled》と題された2点は、各々に中国と ただ、空間の構成力や個々の絵画の完成度を 見ると、この年若い作家の力は、そうした図式 心にした地図を見慣れた眼には、もうひとつのをはるかに超えた先で花開くことを予感させる。

松浦 進「Artificial propagation planet」

づける都市をテーマにしたインスタレーション。 美醜両面を併せもつ人間の欲望が増殖を繰り 返して作り上げる都市をモティーフに、シルク スクリーンでイメージを施した木板をさまざまいた。 なかたちにカットして構成されている。

ジの反復は、増殖という作品テーマにそのまま スクリーンに手彩色を施した平面作品は静謐 符合すると同時に、画一化や均一化などの都 市の状況を浮き上がらせる。反復するイメージ の効果は、ところどころにもちいられた赤や青 の原色や手作業の明確な痕跡とも相俟って、 親密に感じられたのがじつに印象的だった。 この作品に呪術的な雰囲気をもたらしていた。 正面から見ているかぎりは華やかで活気に満 ちた都市のさまざまな喧騒が聞こえてきそうだ

林立するビル群と、その周囲にキッチュなが、作品の背後にまわるとただの安っぽい書き 人間と動物のアイコン的形象を多数配した 割りにすぎず、寒々しく立ち並ぶ漆黒の矩形が 《artificial propagation city》は、人工増殖をつ どこか墓標や位牌のようにも見えてくる。壁面 に展示された肖像画をテーマにした作品でも、 不釣り合いな金の額縁が、人間の背後に潜む 虚栄や虚飾を強く連想させるように作用して

稚拙さやチープさを意識させる1階の展示と 版の技法による人や動物などの同一イメー は対照的に、2階の壁面に展示された、シルク な別世界を構成していた。とくに表面を平滑に 処理した4点組の《put out》が注目され、漆黒 のなかに浮かび上がる茫洋とした人物像がより

「アジワルラの思い出」と顕された倉田悟の 意深く排除されている。登場人物の顔貌表現 個展では、一つの物語を構成する、大小9点の がすべてマンガ風の動物に変えられているのも 油彩画が展示されていた。子どものときに家族 旅行で訪れたアジワルラという島での奇妙な 体験や出来事がそれぞれの作品に表現され、対 応する物語をつづったパネルが作品のかたわら チは、倉田による"詩と真実"の果敢な挑戦と に掲示されていた。観賞者はテキストを参照し いえるだろう。 ながら絵画に描かれた場面を理解することにな るが、登場人物の言動や状況設定に何か底知 れない、不可解な謎を含みながら物語は進行し ていく。

を読むかのように感じられた。ネット検索でヒッ トする名称がないことを確認して決めたという アジワルラという地名もそうだが、具体的な現 実を想起させるモティーフは作品世界から注

倉田 悟 「アジワルラの思い出」

同様の理由からだ。現実的なものを極力削ぎ 落しながら、鑑賞者ひとりひとりの琴線に触れ る何ものかを巧みに形象化してみせるアプロー

カラフルな色彩で描かれた明快な画面とは 裏腹に、どこか虚無的な雰囲気が作品全体を 支配するのは、物語が、主人公が身を置く世界 に潜む不穏な闇の存在を強く予感させるためか。 深遠な物語を紡ぎ出す文才も見事で、その いずれにせよ、フィクションの世界をいささかの 観賞体験はさながら一篇の珠玉のSFミステリー 破綻もなくまとめ上げる才能は特筆に値する。

井田大介「ただいま、ハニー」

巨人に抗う小人のようにマッカーサーに襲い 画像から3Dプリンターで立体を成型した小立 かかるミツバチの群れの映像や、養蜂業を営む 実家の家屋を模した移動式の養蜂箱。《ただい ま、ハニー》において井田大介は、実家のある日 吉津村の今と戦後日本社会の歴史という2つ の時間軸を交錯させる。作家によれば、日吉津 村は鳥取県内で唯一人口増加をつづける村で、 その理由はイオンの巨大ショッピングセンター 展が地域住民と新たな転入者との間の摩擦や 軋轢を徐々に顕在化させるなか、井田は、自分 たちの祖先も同様の行為を繰り返してきたの ではないかと自問する。イオンの発祥地三重県 色濃く反映しているといえるだろう。 が、偶然にも母親の出身地で、井田自身の出生 地だったという事実がそこに重ね合わされてい

体作品などが展示されていた。高村光雲の《老 猿》、ロダンの《地獄の門》という、日本と西 欧の近代彫刻史における記念碑的作品が選ば れているが、ネットトで収集した不十分な情報 量の画像は、必然的に実物とは異なる不正確 な立体物にしかならない。身体性の欠如がもた らす現代彫刻の不可能性と可能性の探求だが、 のオープンだという。人口増にともなう村の発 病んだ時代が生み出した奇形や不具のように も映る。先に触れた《ただいま、ハニー》とはコ ンセプトや制作意図はかなり異なるものの、ど ちらもこの作家の内省的な思考やアプローチを

もう一つのスペースでは、ネットトで拾った

筆 ム期 中野仁詞(キュレーター、神奈川芸術文化財団)

村井祐希「千年に一度のムライ」

表現という行為は、我々人間が本質的に欲 に、「絵画様式の中の形式の可能性を最強のメ ディウムである絵具と共に追求している とあ 絵具が塗られ、というより盛られ、絵画の可能 投影されている。 性を超越した物体あるいは生物のように蠢い ている。今回の展示は村井曰く、大量の絵具を 混ぜ合わせ表面に盛り付けた「オムライス絵具 | による絵画パフォーマンスだという。地球内の マグマを表した《fruiカタストロty》、《宇宙の

競技者》、卓球台に絵具の付いた球を使い着 しているものである。日常の中でそれは、料理、 色する《Super Table tennis Stand》の3点の作 インテリア、フラワーアレンジメントなどに始ま 品。そこに、村井が独自の解釈で歌う、グスタ り、芸術では絵画、彫刻、映像など、そして建築、 フ・マーラーの交響曲第5番1楽章。3つの作品 音楽に至るまで思想を表象として具現化する。 からなるという空間は、観る者には境界を感じ 村井祐希はその、成立過程、結果に纏わる膨大させない完全なる村井の創造したカオスが広 なエネルギーを感じさせる作家である。村井が がっている。向こう見ずに体力と全神経を投 この展覧会にあたりコンセプトとしたものの中 入しエネルギーの塊としての造形物に仕上げた 彼の作品は、行き場のない精神の迷いと制作 にかける強い意欲、同様に彼に蓄えられ発散さ る。壁によって仕切られた壁面には、原色の油 れるべき若き膨大な村井のエネルギーの現在が

桜間級子「SEVEN」

「SEVEN」と題された今回の桜間の展示は、 の関わりをテーマに本展に挑んだ。その事例 7点の女性の裸体の写真により成立している。 は、女性の脱毛という行為である。今日、電車 身体を反った(海老反り)女性の写真は、両手の車内、テレビ、雑誌では脱毛の広告が氾濫し を挙げ腰に白い布を巻いた女性の2点の写真 ている。「2000年代に入ってから脱毛の広告の に挟まれ、あたかもキリストの磔刑図のように 膨大な量は現代社会による女性への隠れた暴 一つの壁面にすっきりと展示されている。反対 力では と桜間は疑問を持つ。毛を剃り、地肌 面には、暗い背景に体育座りをした女性を挟 みあえて脇の下を強調して見せようとする3点 組の写真。そして、リンゴをかじりながら腋毛 シャ、ローマ時代の理想の美としてデフォルメ を強調して見せる女性の写真が1点のみ壁面 にある。3面の壁の構成は、展示室を音楽ホージェロは人間本来のあるがままの姿をダヴィデ ルと見立て、作品の展示を序曲、協奏曲、交響 曲というコンサートに置き換えると、曲の様相 影した。そこには、ヘアの表現もある。桜間は、 は異なるも徐々に盛り上がり、各要素が終演 時一つとなった瞬間に全体が崇高に完成するという行為と概念にも「疑問」を抱いている。 ような展示として、極めて精密に計算されていまさに、桜間が使用した写真という表現はこの るように感じられた。桜間は、身体と現代社会 疑問を如実に、ストレートに表している。

が顕になることは美しいことなのか? そのつる りとした肌の様相が理想の人体なのか? ギリ された表現を見直し、ルネサンス時代、ミケラン 像(16世紀初頭・アカデミア美術館所蔵)に投 脱毛を題材に現代社会に氾濫する「人工的」

水上愛美「底流 / Large eddy」

水上愛美の作品を目にした筆者は、自己の にも関わらず、その実感は自らのイメージに重 精神的、性格的な面を判断するテストをされて なりあっていく。水上は、これらのイメージを画 いるように感じられた。青、赤、黒といった多 布に描くことによって、自らのイメージと他者 色が平面上に集合を形成しながら塗り重ねら が抱くイメージの、無言のコミュニケーション れ、水分を十分に帯びた絵の具は平面をなぞ をとる。果たして受け手のイメージは、水上と るかのように滴り落ちている。作品が展示され いかなる交流を行い得るのか。そして、溢れた た二つの部屋には、木枠に貼られていない平面 の作品があり、大きさと作品間の感覚が近いこえにおいていかに他者の中に入って行けるのか。 とから圧倒的な迫力がある。新聞、テレビ、イ ンターネットなどのメディアから報じられる事も続いていく。 件、事故そして自然災害。いつ自分を襲い、図 らずも関わってしまうか分からない諸要素への 不安。外界を知覚することにより、その知覚は、 より強い経験値として置きかわり我々の意識 に固定化されていると、水上は考えている。東 日本大震災、熊本の震災など近年起こった自 然災害のあと、自分自身が経験したことがない

情報は、水上が描く抽象的絵画という置き換 絵画を媒介とする水上の問いかけは、これから

片貝葉月「現代実用私的装置展覧会|

作者は自らの作品を「装置/ガジェット」と を主題化する《Weapons of Love》の三点が紹 呼ぶ。それらは視覚的鑑賞を促すというより、 身体に纏い、道具として使用することに主眼を 特質が幾つか見出せる。そのひとつが、反転す 置いた作品である。

ク・アートの系譜からレベッカ・ホルンのような 現代作家まで散見でき、決して珍しくはない。 推移を表したり、装置的な仕組みを通して身 体や知覚を拡張させたりするものであった。そ れに対して片貝の作品は、喜怒哀楽、嘘、愛情 などのいわば形なき感情を、装置という形に変 換する点において、稀有な特異性がある。

踏まえ嘘を実体化させる《嘘から出たまこと用 品》、武器というモティーフを脱構築して愛情

介された。それぞれ異なる内容だが、共通する る関係性である。例えば《感情纏身装身具》に 歴史的にみれば装置的な作例は、キネティッ おいては、内から外へ向かう感情の表出を逆行 させ、装置により感情の外見を身体上に作り、 それを自らの内面へとフィードバックさせる。 ただし、その多くは機械仕掛けで時間・運動の 嘘/真実、武器/愛情といった関係の反転も同 様であり、換言すれば、転倒するアイロニーのよ うなものが作風を支える構造になっているのだ。

こうしたアイロニーの感覚は、片貝の作風の 軽さにも通じる。いずれも「美術品」という権 威的な素振りはなく、華奢な手作り風で、子供 展示では、自己の感情と身体の関係性を問 の時に親しんだ玩具や模型キットのようなノス う《感情纏身装身具》、他者との感情の共有を タルジアに溢れている。作品か玩具かキットか、 境界は不明瞭となり、硬直した美術の「制度」 を軽やかに笑い飛ばしているかのようだ。

経済が最優先される日本では、日常に紛れた く時を刻む。また、廃棄食品の山の稜線は国内 闇の部分で負の出来事が進行する。その一つ 総生産 (GDP) の推移を示し、パネルの側面はコ が食品廃棄だ。美術大学だけでなく、調理師学ンビニの三色のシンボルカラーで彩られている。 校にも通った経歴のある新宅は、この問題を制 作のテーマにしている。

新宅睦仁「コンビニ弁当の山 -Time is monev.」

新宅の試算によれば、全国の某コンビニエン スストアが賞味期限切れで廃棄する弁当は、一 日に51万食(2億5500万円)にも達すると言 う。驚くべき数字だ。この事実に私自身が衝撃 を受けたことを、まずは正直に告白したい。

このテーマは、美術の分野で如何に表現し得 着眼しつつ、コンセプチュアルなアプローチと絵 画表現が併用されていた。作家の素質なのか、 作品の構成要素は慎重に吟味され、テーマに綿 密に関連づけられている。時計は賞味期限を暗 示し、レジのバーコードリーダー音が時報のごとである。

コンセプトの整合性が見事である一方、ロジッ クを越境する表情を湛えていたのが、描かれた 廃棄食品のイメージではなかろうか。確かに、 これらの絵画の造形は美学的要請というより、 その色彩や形態が流通する食品(揚物、スパゲ ティ、弁当什切りのバランなど)に依拠してい る。即ち、審美的表現とは一線を画する絵画な のだ。にもかかわらず、食品を即物的(オブジェ るのか。展示では廃棄される「コンビニ弁当」に クティヴ) に描写した絵画は異様なイメージを 放ち、シュルレアリスムにも通じる名状し難い 余韻を残していた。消費社会の食料品をシニ カルに描くアンディ・ウォーホルのキャンベル スープ缶などとは全く異なる、作者独自の視線

染谷浩司 「収穫祭 |

一人の画家の展示とは思えないほど雑多な れた裸婦や人物など、全く異質な作品が並置 作風で、絵画が壁面を埋め尽くしていた。会 期中に公開制作を行うために空白の画面や額 が挿入され、展示が未だ発展途上であること が暗示されている。展示の狙いは、作者が自ら 今後の表現を模索する場にしたい、ということ のである。 らしい。

身を置いた時、私たちはいったいどこに眼差し かろうか。豊穣な創造力を未来に向けて担保 を向け、そこに如何なる可能性を見出すべきな のか。個々の作品を鑑賞することはできる。例 えば、《絵空事の賜物》や《8畳間の桃源郷》な 沌を受け入れ、永続させていく必要があるはず どは、繊細で細密な筆致の流動が生み出す、物 語性を孕んだ深遠な世界に引き込まれ、思わ 共存・対話を説いた、ミハイル・バフチンのヘテ ず見入ってしまう。ところがその隣には、公園 の日常的風景、素描の自画像、写実的に描写さ かんできた。

され、表現のギャップに戸惑いを覚えてしまう。 画業が回顧されているだけでなく、完成作/習 作、画家/学生、現在/過去、芸術/日常といっ た対立やヒエラルキーが解消され、一人の画家 の制作を振り返るため、過去の自作を一望し、 が抱えてきた矛盾や混沌が襲け出されている

この内なる矛盾や混沌との対面こそ、「収穫 学生時代の作品や素描も含まれる展示室に 祭」と題されたこの展示の要点だったのではな し続けるには、画家は安易に制作を還元的(画 一的) に制御するのではなく、自らの矛盾や混 だ。そう考えていくと、異質な要素の持続的な ログロシアやポリフォリニーの思考が脳裏に浮

山本和弘(栃木県立美術館 シニア・キュレーター) 第6期

稲川江梨「タヌキ」

タヌキの置物や招き猫などの個的な物語と の確かさが独自の絵画世界を自立させている。

モチーフはあくまでも前景として機能してお り、その後景には絵画と立体との往還が入れ 子状になった豊かな空間が醸成されている。

り、建築空間を超え出た重層的な構造を作品 にもたらしている。ひとつは描かれたモチーフ が立体化されることにより、絵画が設置された 壁面とその付近、立体が設置された各所とが、 空間性のベクトルとなって連鎖することによっ て。他方は大小二種の《タヌキ》が的確に示す とおり、十数倍の拡大と縮小の比率が空間べ クトルに現在と過去との時間性ベクトルを付 加し、いわば視覚的磁場となる引力と斥力の 作用をもたらすことによって実現される。

こうして極端な大小比率で描かれた《タヌキ》 は裏腹に、緻密に制御された色彩構成と筆触 と異なる展示階層に置かれた小さな立体との 拡大・縮小関係を目撃することは、眼差しを通 じて私たちの身体そのものが個々の作品比率 に応じて膨張したり収縮したりするような感 覚を体感することと等価になる。このことはセ 入れ子状の仕掛けは二通りに実施されてお ザンヌを下敷きにしたと思われる浴父と手捏の 立体座像にも反映され、他者である絵画と彫 刻が見る者を親密な関係に引き込む磁場へと 展示空間を変換させている。

148

赤池千怜「pathos」

記憶の現場が他者には不可知の個人的"サイ 崩壊のエネルギーの視覚化ととらえ直すことも ト"として閉じられているならば、絵画化された 可能だろう。さらには昨今の極端気象とも呼応 記憶は誰もがアクセス可能な"ノン-サイト"とし、個的な夢想が秩序から混沌、そして崩壊へ して開かれている。

イラストレイティブな筆触で描かれた奔流に れている。 翻弄される女性と水流に安楽する女性は、流木 すなわち流木は個のレベルでは思いがけず終焉 を迎えたことになるが、地球・宇宙的レベルでは、も想起させるだろう。 崩壊に向かうプロセスの時間が早まったにすぎ ない。生きた樹木が流木となるある種の崩壊プ ロセスは、崩壊しゆく建造物と同じく一種のエ ントロピー的図像と重なり合うだろう。

とすればあくまでも記憶を二次元に受肉化さ せた個人的作品だが、建屋や市街地を侵食する

と不可逆的に向かう宇宙的摂理として敷衍化さ

絵画と流木とが組み合わされた作品は、絵画 の生成過程と呼応している。安住していた樹木 が三次元空間の二次元への写像ではなく、イン はその生の途上で何らかの理由によって水流に スタレーションが絵画の三次元化でもなく、二 飲み込まれ、翻弄され骨化する。骨化した樹木、次元から三次元までは微分化された次元の上に 無数の像が充満しているという映像論的言説を

庄司朝美「夜のうちに」

しながら互いをあからさまに見せ合う親和性をれる。

と色彩が並置されていた構造が、ここでは支持 体とストロークと色彩がそれぞれ透過性をもつ ことによって等価に同居している。この三つの 要素は透過性のあるレイヤーとなって統一性の あるピクチャーを構成している。

この眼差しの溶解を誘う透過性は、透過され

眼差しを突き返すと同時に眼差しを支持体のた肉体としてのスケルトンによって強化される。 彼方へといざなう相反するベクトルを庄司朝美 モチーフの主旋律となる肉体は表皮として描か の絵画はもっている。この二つは光沢のある支 れようが、骨として描かれようが、絵画とは作品 持体の透過性とフィギュアを明示しながらもそ の物理的強度と眼差しの強度との対峙によって の描線の奥へと眼差しを放擲するストロークの 成立する事態であることを確認させる。このこ 透過性、さらには儚い明度と彩度による色彩のとは画家が任意に画面の大きさを決定するので 透過性が重なり合って醸成される。しかしそれ はなく、まるでレントゲン写真のように見る私た らは反発しあって互いを隠すのではなく、統合 ちとほぼ等倍に描かれていることからも了解さ

像化された世界を空け開くポルケの絵画を後 従来の絵画では不透明の支持体にストローク 継する新たな可能性を庄司朝美は持っている。

三輪 眞弘 (作曲家、メディアアーティスト、情報科学芸術大学院大学教授)

"アーティスト"たちは今、一体何をしようとし 挑戦に他ならない。結果として見かけは「地味 | ているのだろうか。ぼく自身の問題でもある、なものが多かったかもしれないが、世界の中の そのような「危機感」を持って応募された多く 東京で今、紹介されるべき「作品」の多くが選 の作品プランと対峙した。そしてこのような意 ばれたとぼくは信じている。 識は今回、審査に臨んだぼくだけのものではな かったと思う。もはや芸術における「ジャンル の違い | など些細なことであり、「アート」で浮 世の人々を驚かせたり和ませたりすることなど どうでも良いことだ。今求められているものは

世界が、そして日本がこのような状況の中で、 未来に向けた彼らの、真に孤独で知的な活動/

畠中 実 (NTTインターコミュニケーション・センター [ICC] 主任学芸員)

プまで、広範囲の企画へと門戸を開いたものと のを推した。 なった。その分、審査は非常にむずかしいもの となった。それは、それぞれ個別のジャンルにお いて、なにがアクチュアルな表現であるかとい うこと、どのように判断基準を設けるかも異な るということに起因するかもしれない。しかし、 表現者としての自身がおかれている社会的状

より開かれたジャンルへ機会を提供しようと 況、東京という場所との関係において考えられ する企画公募プログラムとして、美術、音楽、パ た発表意図、ジャンルの持つ現在的な問題意識、 フォーマンス、さらにはレクチャーやワークショッといったものに明確な企画意図を感じられるも

杉田 敦 (美術評論家、女子美術大学教授)

回問われることになったのは、審査される側だ とになる。こうした試みはまだこの国では端緒 けでなく審査する側でもあったように感じていについたばかりだし、決して十分ではない。そ る。特定のアート・フォームや、活動形態のなか してもちろん、そのアウトプットについても経験 だけで通用してきた種々の言語、いわばジャー は浅い……。 ゴンが、果たして領域を措定するものを取り除 いた地平においても成立するものなのかどうか。 審査される側はそれを乗り越える説得力を持 つように努めなくてはならないし、審査する側 はときにそれに拘束され、ときに無批判に酔い

形式という枠組みを取り除いたことで、今 しれてきた自身と向き合わなくてはならないこ

もっている。

講評: 若手のための現代音楽企画ゼミ2016

梶 奈生子(東京文化会館 事業企画課長)

2回に亘り「若手のための現代音楽企画ゼミ」 を公立文化施設に携わる"現代音楽から遠い 手音楽家の交流の場の創出に繋がったこと、そ 立場"として関わらせてもらった。そもそも音 して、やはり若手音楽家らしく、熱い思いを持 楽家は言葉より音楽で表現することを目指し ち、互いに情報を共有し、仲間となって夢に向 ている人々なのではあるが、最初の企画書は一 かって新たに歩み始めている姿を見ることがで 様に何度か読まなければ理解できなかった。そ きたこと。きっと驚くような企画が生まれるに して、自らが職業とする、もしくは職業人とし 違いない。 て目指す「現代音楽」を"悲観的"とも受け取 れるように捉えていることがほとんであること 考えるきっかけとなった。アウトリーチに組み に少なからずショックを受けた。若者が無謀と 込んだ現代音楽を大人の認識を超越した柔軟 も思える希望に満ちた夢を描いている時代は さで真剣に耳を傾ける幼い子供達の姿を思い 終わっているのかもしれない、と思いつつ。

ぞれの個性が光る、味わいのある企画が提案さ、課題なのかもしれない。 れた。

企画の意図と並ぶほど効果があったのは、若

私にとっては「現代音楽」とは何か、改めて 浮かべながら。次代を担う若者が元気に発信 様々な講師陣の指導により、一読すればそのしていけば、容易く受け入れる次の世代は確実 世界をイメージさせるように言葉の表現力はにいるのだから、どのような場を創出していく 磨かれ、更に一歩踏み出したプレゼンではそれ かは、私たち、頭の固い大人に突き付けられた

楠瀬寿賀子(公益財団法人せたがや文化財団 音楽事業部)

今回は、企画書の作成とプレゼン実施のゼミ 見るのではなく、歴史や地域などの時間や空間、 とって重要な機会になったと思う。

そのプレゼンについて感じたこととして、内容のともあるのではないだろうか。 解説に近いものが多く、実演でポイントを明らか 意味でもまだまだ工夫の余地は多いと感じた。

このことは、そもそもワークショップにレク 深い内的・外的体験をともなった内容に期待し たい。また、自身の楽器や現代音楽のことだけを同じ体験をしているのだとあらためて意識した。

であり、プレゼンが公開されたことは受講者に 音楽以外の要素など幅広い視点をもって考えて いくと、むしろ現代性が浮き彫りになるというこ

ゼミの前提となっている"公共ホールの事業 にしたものが少なかったことが挙げられる。10分 担当"という、採択を預かる立場になって考え という短時間に実演を入れて伝えたいことを十分 てみた。企画書やプレゼンから得られる情報も に盛り込めるか、と迷うところであるし、単に演奏 さることながら、企画をどのように具体化するか、 を聴かせるだけでは企画のプレゼンとしては不充 演奏家・作曲家とともに創り上げる過程をどれ 分だ。しかし、テーマとなる作品の一部を実演する だけ楽しめるか、という比重もかなり大きい。そ ことで、内容を端的にあらわす可能性はある。その ういった企画書やプレゼンの余白や、演奏家・ 作曲家の柔軟性も見ている。

企画の受け手も発見や刺激を受けながらともに チャーやマスタークラスに位置づけられる案が多 創造していく "遊び" の部分を意識することも、企 かったことも影響しているだろう。現代音楽と画の幅を広げることになるのではないかと思う。昨 いう題材を考えると、知識や技術を超えた、より 年度の講評に"演奏家自らにとってのワークショッ プ体験"について書いたが、これは事業担当者も

中川腎一(ピアニスト、指揮者)

現代音楽が好意的に、また積極的に聴いてい 題に対して前向きにかつ、果敢に対峙していっ 100年以上経つにもかかわらず、現代音楽とい への光を感じた。 うものの定義すらはっきりしていない。しかし ながら毎日ように作品は産み出されている。そ 濫用などの見直しを発端に、自分の世界でし れを多くの方に聴いていただくことが容易では か完結していない企画が、もともとのアイディ ない現状を鑑みると、演奏会やワークショップアを曲げずに、他人に伝わりやすい言葉で伝え などを企画する側に受け入れてもらえるか、が るように変化していったのが手に取るように分 すべての始まりとなる。そこで企画書、またはかったのが講師としても嬉しいことであった。 対面での口頭のプレゼンテーションで言葉が必 然となる。音楽という「言葉にならないもの 現代音楽をどのように社会に対してプレゼンし でもあるものを、特に「ゲンダイオンガク」とい ていくかという日々の姿勢、ないし、音楽家と う恐怖さえ感じられる音楽の企画をプレゼン しての自分を世界に対してプレゼンしていくこ テーションするのは困難を極めるが、それを乗 とへの重要な思考の助けになっていれば非常に り越えない限り、現代音楽の企画の広まり方 幸いである。受講生にはこれからも今回のゼミ は消極的になっていくと思われる。それに関し で得たものを毎日の活動に活かしてもらえるこ て本プログラムに参加した若い世代が、この課 とを切に願う。

ただけるのであればまだしも、「春の祭典 | から たことに意義を感じるとともに、ほのかな未来

ゼミでの企画書やプレゼンでは、専門用語の

今回のことは企画のプレゼンだけではなく、

沼野雄司(音楽学者、桐朋学園大学教授)

何よりもこの点を、僕は心から尊敬している。

そして、いろいろと意地悪な指摘はしたけれ ども、どの企画も、どのプレゼンも、正直にいえ ば「たいしたものだ」と思いながら見ていた。ま だ30歳前後だった頃の自分だったら、きっと途 中で嫌になって投げ出してしまった気がする。 少々大げさながらも、僕はこの企画に参加した メンバーを見ていて、日本の将来に対して、か なり明るい気分になった。

大勢の人の前で、自分の企画を発表すると ただしその一方で――ものすごく勝手な意 いうのは、想像以上に面倒なことだ。当然なが 見であることは承知しているのだが――この企 ら、最初は企画の内容もプレゼンの手法も未 画の中で、僕自身が強く揺り動かされたり、と 熟だろうから思わぬ恥をかくかもしれないし、 てつもなく新しい知識を吹き込まれたりするこ なんだかわざとらしい演技をしているみたいで、とは、残念ながらなかった。 つまり、 若者のプレ 照れくさいではないか。しかし、この企画に参 ゼンテーションとしては満点の感動があったけ 加したメンバーは、そんなことはものともせず、れども、同じ土壌に立つ大人としてみれば食い しっかりと恥をかき、そしてしっかりと演技を 足りなかったということだ。ぜひ、この言葉を した。つまり、きっちりと最後までやり遂げた。 挑発ととらえて、次に会う時にはもっと多くの **整きを与えてほしい。**

Aomi OKABE (Art Critic, Artistique Director of the exhibitions of la Maison de la Culture du Japon à Paris)

Shusuke TANAKA "Secgtion of the circle"

DART 1

Shusuke Tanaka depicts in a large painting the deserted urban landscape he daily encounters on his way to his part-time job early in the morning. On the other side, there is a painting of his house that the artist refurbished by himself, and in addition, a portrait of *Mr. Wada* at the bakery where he works, and a painting of a sidewalk that the artist considers as a particularly satisfactory work. Small pictures of objects such as the good old audio cassette on the wall of the stairway up to the first floor function as windows to the extraordinary time-space within the ordinary everyday.

On the first floor, an evening scenery of a woman on a bicycle particularly catches the eye. Its title Infrastructure refers to the fact that the woman is the artist's partner and indispensable part of his life. The way he juxtaposes flat brushstrokes to portray human figures in a painterly style is reminiscent of Western early post-war paintings depicting concrete things in an abstract style, or the works of the color-field painters. However, contrary to the systematically minimal brushwork inside the figures, colors are often mixed to create hardly definable hues. The integration

of objective and subjective views in the sober images fosters an atmosphere that is rather comparable to that of Belgian Luc Tuymans's paintings. Nonetheless, the canvases' matter-of-fact accounts of Shusuke Tanaka's daily routine are charged with an almost foolishly honest intent.

Hoshi no ue no jikka (Family home on a star) is supposed to be a model house. While probing the meaning of his existence, Tanaka realized that each day unfurls with a unique weight and glitter that definitely don't repeat twice. The layers and variations of not exactly optimistic colors surely resonate with the key of life and the world at large today, and his determination to scoop up endless amounts of motifs from within his daily activities in the fashion of Hokusai may be understood as an expression of Tanaka's own unique contextualism. The last painting shows a scenery of the city at dusk that Tanaka sees day by day on his way back home, and even though sized and composed like the paintings on the ground floor, this one is filled with a mysterious kind of light.

→ P.035

Takahiro OSUGI "uncertain reality, certain image"

The works of Takahiro Osugi, who until last year had been painting freezingly achromatic forest, mountain and ocean landscapes, used to share certain qualities with the imaginary worlds depicted in surrealist art. From there, however, he switched to pure realism, painting objects casually placed in the artist's home and in his atelier. While this suggests a thematic proximity to young talent Masaya Chiba, the two artists' approaches to painting are totally different. Osugi's use of oils for depicting daily commodities on his desktop in light, watercolor-like pastel tones is reminiscent of Giorgio Morandi's paintings, however Morandi is an artist that Osugi likes but isn't particularly aware of, and whose works he hadn't even seen until recently

The way he liberates the act of painting from the aspects of tension and privilege involved in the creation of art, and approaches it as a plain, everyday sort of activity like a child's play in the sandbox, represents a new concept behind Osugi's artistic activity. Displayed in a separate exhibition room were small ceramic bird figures that looked as if made for private amusement, and these demonstrated the

artist's relaxed attitude toward art that eliminates the barrier between professional and amateur. In the talk session, I described his approach as "anti-art," but considering the fact that his point of departure was an annihilation of the concept of art, "everyday art" or "pan-art" may be more precise descriptions of his style.

Osugi's bright and peaceful images are completely devoid of gestures that express the angst and insecurity of contemporary society. Even though chosen and captured for no particular reason, the scenes of daily life that he depicts represent for the artist small yet irreplaceable parts of reality, and are therefore charged with solid temporal and spatial qualities. Within the crisp coolness of having left everything behind reverberates the anticipation of a new beginning, whereas the extraordinary way he braces himself up suggests certain courage and confidence.

PART 1

Rina TANAKA "Shishiku Garden"

REVIEWS: TWS-Emerging 2016

Themed around the unusual design of the Hogonin temple's garden in Arashiyama, Kyoto, which incorporates elements of the surrounding scenery, Rina Tanaka's two *Shishiku Garden (I, II)* paintings reminded me of the work of Cy Twombly. Twombly regarded artworks not as individual pieces, but as parts of sequences. Tanaka particularly likes old gardens, and crystallized her line of sight during her frequent 30-minute garden round strolls into the concept of a "visual excursion," but unlike Twombly, who connected individual works into sequences, she sequenced multiple fluid perspectives into folding screen-like images more than 3 meters wide. Markers indicate the direction for visitors to view the works in the same order.

Tanaka draws inspiration from the paintings of the Kano school that she has been familiar with for some time. Having a special fondness for trees, she was reportedly reminded of Eitoku Kano's national treasure folding screen "Hinoki-zu byobu" when starting painting the large trees that diagonally cut across the foregrounds. Such unconscious similarity is again a substantial aspect of the Kano school.

Tanaka is the still observer who lets the abstractness of the Zen monks' gardens in the Muromachi Period permeate through her gaze and her body, and translates that into patchworks of flat surfaces and shapes characterized by a distinctly free style of coloration. While Shishiku Garden I introduces the two perspectives of horizontal and birds-eye view, Shishiku Garden II is a perspective birds-eye painting that, compared to the organized part 1, projects a dynamic sensation of chaos. The lines converted into contemporary design language, the shapes appearing like icons of the Internet age, the free coloration. and the exquisitely depicted running water and falling rain, together orchestrate a transparent kind of rhythm. The contrast and connection between the two paintings would surely have come out even clearer if they resulted from conscious creative ideas rather than from compositional and technical aspects.

> P.037

Hideyuki YANAGISAWA (Chief Curator, Ohara Museum of Art) Part.2

DART

Shinobu HANAZAWA "Conspiracy of ecstasy"

The main work, Conspiracy of ecstasy is a large painting that seems to be emitting intense light thanks to its bright and vivid coloration. The artist's focus, however, is on the characters depicted here: a man who scatters flowers while hanging himself; another one who apparently doesn't realize that his body is cut in two; and sacred figures overlooking the chaotic world underneath from a transcendental kind of position.

Based on such thoughts as "there is no dividing line between life and death," "all things are connected," and "cycles of life," Hanazawa illustrates a world in which such contradicting aspects as life and death, delight and pain, love and hate, sacred and mundane can loosely replace or penetrate each other, rather than existing as binary opposites.

Considering these ideas, the space the artist was given for her exhibition was ideal for displaying her unique world-view.

The exhibits on the ground floor represented the mundane world in which miscellaneous elements – paintings propped against the wall with their canvases partly removed from the wooden frames, poems, and

video footage of the artist herself dancing – mingled in a dim setting. After climbing up the spiral staircase to the first floor, visitors entered a bright space, and eventually faced the large *Conspiracy of ecstasy* filling almost the entire field of view.

The idea behind taking the canvas out of the frame and mounting it directly onto the wall was to present it as a wall painting of sorts that is part of the place, rather than exhibiting the painting as a tableau. Hanazawa obviously assumes a heavenly kind of realm which she refers to as a "church" and after walking up the spiral staircase that connects the worldly and the divine, visitors witnessed indeed Hanazawa's own "divine comedy" in the form of Conspiracy of ecstasy.

→ P.03

→ P.038

Nanae NAKANO "The Stories in the Blanks"

DART 1

Utilizing such comic strip techniques as speech bubbles and frames, and sometimes also including letters, Nakano composes her works of multiple different images.

While the different images inside the frames are colored monochromatically, she considers the spaces around them as "blanks" that she paints in all kinds of colors.

From the stark contrast created through this use of colors, I understood these works as illustrating cartoon-like stories inside the frames (=figures), and the artist's own real-life experience in the blanks (=ground) around them, the relationship between which is to be interpreted by the viewer.

However, according to Nakano's explanation, the single frames do not make up a story, and the images are not even related to each other. Likewise, there is no relationship between the images in and outside the frames. In other words, every single one of the images in her works exists individually in its own right.

Now this makes it difficult to see why Nakano uses frames, and why she is so fixated on the blanks, but given her reasoning, the viewer necessarily assumes a different attitude and stops looking for relationships between the assembled images. Abandoning one's aim to find hidden answers, drawing on misinterpretation and delusion, allowing the painted images to stir one's imagination, and letting it fly from the stage created this way, surely is a more appropriate way to approach Nanae Nakano's works. This is how the artist adds vast blanks of imagination to our daily routine.

-> P.U39

PART 3 Susumu MATSUURA "Artificial propagation planet"

The artificial propagation city, in which a number of artless images of human figures and iconic depictions of animals were arranged in and around a forest of highrise buildings, was an installation themed on continuous artificial propagation in the city. The assembly of silkscreen-printed wooden plates cut into all kinds of shapes revolved around the motif of a city built through the repeated proliferation of human desires, both beautiful and ugly.

The repetition of identical printed images of human figures and animals corresponded with the work's "propagation" theme, while at once highlighting the aspects of standardization and uniformization in the city. The effect of repeatedly appearing images, the occasional use of primary colors red and blue, combined with obvious traces of manual work, created an occultist sort of atmosphere. When looking at the work head-on, it seemed so real that one could almost hear the bustle of the glamorous, vibrant city. However when walking around it, the visitor realized that it was all just cheap and shallow mock-up, whereas the dreary black rectangular objects began to look like gravestones and memorial

tablets. This was complemented by portrait-themed works displayed on the walls, the inappropriate golden frames around which worked well to highlight the hidden vanity and affectation of human beings. In contrast to the ground floor display that projected a sense of artlessness and cheapness, the two-dimensional, manually colored silkscreen works on the walls upstairs made up a quite different, tranquil kind of world. Particularly noteworthy is put out, a quartet of "portraits" of unidentifiable figures against pitch black backgrounds with smoothly finished surfaces that created an impressive feeling of intimacy.

→ P.041

Hiroaki YOSHIDA "OVERLAP"

ART 2

The two separate spaces of Yoshida's exhibition were completely different in terms of both spatial arrangement and materials of works exhibited there. Displayed in one room were items the artist had actually used while spending seven days in a tent. One day during his week in the tent, Yoshida heard how someone outside right next to the tent made a

how someone outside right next to the tent made a phone call (apparently to the police) – a situation that instantly overturned his perception of the interior as a safe, and the exterior as a dangerous place.

In the other room, paintings composed of beautifully edgy color fields were exhibited in two groups.

Two *untitled* works showed the geographic shapes of China and Japan respectively, making viewers aware of how we are familiar with the appearance of our own country on a map, but find it difficult to recognize other countries.

Another group of works was presented as an installation combining two perspective titled paintings, and an item titled virtual. The two perspective works were composed of horizontal and vertical color fields respectively, pierced in each case by one straight line. When extending these two lines outside the

canvases, they meet at a certain point, and exactly at that vanishing point the artist placed "virtual," a small white box with a hole. This mechanism was an attempt to make the viewer aware of the two diagonal lines and the relationship between them, and ultimately, imagine a reversion of inside and outside by peeping through the hole in the box.

When looking at Yoshida's works this way, one understands that they share a particular focus on a reversal of recognition. However, the spatial composition and the degree of perfection of the individual paintings suggest plenty of young talent that is going to blossom far beyond such graphic concents.

PART 3

Satoru KURATA "Memories of Ajewarlae"

On display at Satoru Kurata's exhibition with the title "Memories of Ajewarlae" were nine variously sized oil paintings that together tell one story. The individual paintings depict the protagonist's odd experiences and happenings on Ajewarlae, a fictional island he visited as a child with his family, and were arranged alongside panels printed with the respective corresponding narrations. The visitor thus involuntarily interpreted the painted scenes while referring to the texts, as a result of which the story unfolded with elements of bottomlessly enigmatic mystery regarding settings and behaviors of the characters

The work suggests a remarkable literary talent for writing profound narratives, and looking at it felt in fact like reading a true gem of science fiction mystery. Beginning with the name "Ajewarlae," chosen after making sure that Internet searches won't yield any results, all elements that might conjure concrete images of real things and places were carefully eliminated. For the same reason, characters' faces are generally depicted like animals in manga. Smartly depicting certain things that touch the heartstrings of

each individual viewer, while at once removing as far as possible anything realistic, is an approach that is to be understood as part of Kurata's intrepid pursuit of "poetry and truth."

In spite of the vividly colored, clearly composed images, the work at large is dominated by a somewhat nihilistic mood, which is perhaps due to the fact that the narrative makes the viewer feel the threatening darkness behind the sceneries the protagonist is placed in quite intensely. In any case, the ability to compose such a fictional world without the slightest flaw certainly deserves attention.

→ P.040

→ P.042

Daisuke IDA "Honey, it is my home"

A video of a swarm of bees attacking Douglas MacArthur like dwarves fighting a giant, and a "mobile beehive" modeled after the artist's beekeeping family's house. In Honey, it is my home Daisuke Ida juxtaposes two separate time axes, representing his family's hometown Hiezu today, and the history of postwar Japanese society respectively. According to the artist, Hiezu is the only village in Tottori that keeps growing in population, the reason for which is the opening of a big Aeon shopping mall. While gradually exposing the friction between the locals and new residents as a result of rural development and increasing population, Ida asks himself whether his and the other local people's own ancestors have actually done the same thing in the course of history. On top of this comes the fact that the birthplace of Aeon in Mie Prefecture happens to be where Ida's mother is from, and where the artist himself was

On display in the second exhibition space were small three-dimensional works created with a 3D printer from images found on the Internet. Ida chose Koun Takamura's Aged Monkey and Rodin's Gates of Hell.

two monumental works in the respective histories of Western and Japanese sculpture, whereas the insufficient information provided by pictures collected from the Internet involuntarily resulted in inaccurate objects quite different from the actual sculptures. Created in pursuit of the possibilities and impossibilities in contemporary sculpture with lacking physicality, these works seem at once to be exhibiting distortions and defects as products of an unsound age. Although guite different in concept and intention, both this and Honey, it is my home certainly reflect this artist's introspective approach rather graphically.

Part. 4 Hitoshi NAKANO (Curator, Kanagawa Arts Foundation)

Yuki MURAI "MURAI once in Thousand years"

The desire to express ourselves is something that is rooted in the human nature. Beginning with such everyday life activities as cooking, decorating the home or arranging flowers, in the realm of art our creative ideas are manifested in paintings, sculptures or videos, and furthermore, in architecture and music. Yuki Murai is an artist who conveys in his work the enormous energy that the processes and results of such creative work involve. His concept for this exhibition revolves around a "pursuit of formal potential of painting together with paint as the most powerful medium." Inside the space partitioned by walls, objects transcending the possibilities of painting wriggled like living organisms, painted, or better, loaded with primary colored paint. According to the artist, the exhibition represented a painting performance using large amounts of mixed "Omuraisu paint" that looks just like a scrambled egg when applied. Three works - frui-catastro-ty, expressing magma inside the earth; Cosmic Athlete, and the Super Table tennis Stand painted using a colored table tennis ball - were displayed with the musical accompaniment of Murai's own interpretation of the

first movement of Gustav Mahler's Symphonie No.5. With these three works, Murai created a complete chaos in which one couldn't perceive any boundaries whatsoever. His works are objects that Murai sculpts as lumps of pure energy by casting all his physical and mental power into the creative process without looking ahead. The results project the whereabouts of an aimlessly wandering mind, along with the artist's strong desire to create, and the present state of the vast amounts of stored young energy that necessarily

Sakurama's exhibition with the title "SEVEN" consisted of seven female nude photographs. Displayed on one wall was a photo of a woman doing a back arch, flanked by two pictures of women with both hands up and white cloth around the waist, which together looked just like a crucifixion group. On the second wall was another set of three photographs, showing a woman sitting straight in front of a dark background, and to the left and right of her, two women posing to show their armpits. On the third wall was only one photo, showing a woman gnawing on an apple while exhibiting her underarm hair. The composition of these three walls suggested interpreting the exhibition room as a concert hall, and when looking at the displays as a concert of prelude, concerto and symphony, I felt that the exhibition was minutely calculated to make the different individual pieces gradually swell, before culminating in a finale where all elements melt into one. Sakurama put this exhibition together using the relationship between the human body and contemporary society as a central theme. One example is female epilation. Epilation advertisements are omnipresent on trains, on TV and

Shinako SAKURAMA "SEVEN"

in magazines these days, and this flood of epilation advertising since the 2000s Sakurama considers as a form of "hidden violence against women in contemporary society." Is skin that is exposed by shaving hair beautiful? Does smooth naked skin represent the idea of a perfect human body? The ancient Greeks and Romans reviewed distorted depictions as ideal beauty, and in the Renaissance period, Michelangelo projected the original, natural appearance of a human being in his statue of David (early 16th century, possession of the Galleria dell'Accademia). This includes depictions of hair. Sakurama uses the "epilation" subject to express her doubts regarding acts and concepts of "artificiality" that are overflowing in today's society, and the photographs she uses convey these thoughts in a vivid and straightforward manner.

Emi MIZUKAMI "Undercurrent / Large eddy"

Standing in front of Emi Mizukami's works, I felt as if undergoing a psychological test to pin down aspects of my personal character. Layers of blue, red, black and other colors are applied to form clusters on flat surfaces, whereas the drippy, watery paint runs down the canvases. Among the displays in the two rooms where paintings that weren't mounted onto frames, whereas the sizes and spatial closeness of the works generated an overwhelming force. Reports on events, accidents, and natural disasters in media such as newspapers, TV or the Internet evoke a sense of anxiety as we can never know when we will be the victims that are unintentionally involved in such incidents. Mizukami suggests that, by perceiving the world around us, that perception is translated into rather strong empirical value that is ultimately entrenched in our consciousness. After such recent natural disasters as the East Japan and Kumamoto earthquakes, even if we have never experienced such things first-hand, the actual sensation gradually overlaps with our imagination. By painting these images onto canvases. Mizukami engages in a sort of nonverbal communication between her own and

other people's imagination. The question is what kind of exchange can take place between the artist and the recipient's imagination, and how the artist can enter the minds of others by translating the flood of information into abstract paintings. Mizukami will continue to explore these questions through the medium of painting.

Hazuki KATAGAI "Hazuki Katagai's Machines 2015-2016"

The artist refers to her own works as "devices" or "gadgets". Rather than being visually appealing, they are primarily made to be worn or otherwise used as

Within the history of art, such device kinds of items are not exactly unusual, as they appear throughout the genealogy of kinetic art, up to the works of Rebecca Horn and other contemporary artists. However, in most cases these are attempts to express processes of time or movement in mechanical ways, or mechanisms designed as extension of the human body or its senses. What distinguishes Katagai's work from these examples and makes her truly unique is the fact that she translates all sorts of emotions, lies, love, and other immaterial feelings into the tangible shapes of devices.

In this exhibition, Katagai presents three works. In her Accessories for Wearing Emotions she examines the relationship between one's body and emotions, while in The Truth out of a Lie she materializes lies regarding emotions one shares with others. Finally, Weapons of Love is a work that topicalizes love by deconstructing weapons as a central motif.

While being different thematically, there are several characteristics that all three of these works have in common. One of them is the aspect of reversed relationships. The Accessories for Wearing Emotions for example are external devices that manifest the appearance of inner feelings, whereas their feedback to the body represents a reversion of the direction of emotions that are normally projected from the inside to the outside. Similar reversions take place in the relationships of lie and truth, weapon and love. In other words, such irony of reversion is the structure that supports and at once characterizes the lightness of Katagai's unique style.

In each case, there is no such thing as authoritarian behavior of "works of art". The items on display combine a delicately handmade feel and a sense of nostalgia that reminds us of toys and model kits we used to play with as children. Blurring the lines between "artwork", "toy" and "assembly kit", these items seem to be laughing off the stiff "system" of art quite lightly.

Tomoni SHINTAKU "Mountains of Bento meals from convenience store -Time is money."

In a Japan where all things economy are given first priority, various negative things are going on in the shady parts of everyday life. One of them is the disposal of leftover food. Shintaku, whose education includes next to studies at art university also training at a culinary school, chose this problem as a central theme for his creative work.

According to the artist's calculation, the number of bento (lunch) boxes discarded by convenience stores of a certain chain across Japan every day after their sell-by date amounts to a total of about 510,000 sets (255 million yen). These are indeed startling numbers, and the first thing I want to express here is that I was honestly shocked to learn about this fact.

So how can this topic be addressed in the realm of art? Aiming at discarded "convenience store bento meals", for this exhibition the artist combined a certain conceptual approach and its visual representation. The thoroughly careful way he determines the components of his works and related them to the main theme is probably something that lies in the artist's nature. The motif of the clock suggests the expiry dates, with the sounds of cash

registers' barcode scanners working like time signals. The ridgeline of the mountain of disposed food hints at the changing GDP, while the colors at the panels' sides represent the convenience store chain's three symbol colors.

Excellent in terms of conceptual consistency, the

work was full of expressions beyond logic, which can certainly be attributed to the painted images of discarded food. Rather than aesthetic requirements. the paintings are indeed based on the colors and shapes of various circulating foods and related products (such as fried food, spaghetti, or those little green plastic baran dividers in bento boxes). In other words, these are paintings that mark a clear departure from aesthetic artistic expression. Nonetheless, the images that these objective depictions of food project are so bizarre that they leave an impression that is absolutely beyond description, almost in a surrealist kind of way. Manifestations of Tomoni Shintaku's own individual point of view, these works are completely different from the cynical depictions of food in the consumer society that Andy Warhol made by painting cans of Campbell's soup.

Koji SOMEYA "Harvest Festival"

The walls were paved with works of such a variety of different styles that it was hard to believe that they were all made by the same painter. At the same time, blank canvases and empty frames included for the artist's ongoing public work in front of the visiting public suggested that the exhibition was constantly under development. The show was apparently conceived as an occasion for the artist to reflect on his own work by looking back on his previous creations, and at once trying to define a direction for his artistic activities in the future.

Once we had entered the exhibition that included rough sketches and works made as a student, what were we supposed to look at, and what kinds of possibilities were we supposed to find there? It is possible to look at the individual works one by one. Fruits of Fantasy or Xanadu of a eight tatami room for example captivate and pull the viewer deep into the richly narrative world that Someya creates with the minute, delicately flowing strokes of his brush. However displayed right next to these were totally different types of works, such as depictions of everyday scenes at a park, roughly sketched selfportraits, or realistically depicted female nudes and other human figures, and this diversity eventually made me somewhat lost. Not only did the artist look back on his work, but he dissolved at once such opposing and hierarchical elements as finished work and study, painter and student, past and present, art and everyday, and exposed the past contradictions and uncertainties of a painter.

The confrontation with such inner conflict and confusion must be the essential point of this exhibition the artist titled "Harvest Festival". In order to secure his fertile creativity for the future, an artist surely needs to accept, and above that, perpetuate his contradictions and uncertainties, rather than easily control his work in a reductive (uniform) fashion. This again vaguely reminds me of the continuous coexistence and dialogue between heterogeneous elements that Mikhail Bakhtin advocated in his theories of heteroglossia and polyphony.

Kazuhiro YAMAMOTO (Senior Curator, Tochigi Prefectural Museum of Fine Art)

In contrast to the individual narratives of tanuki (raccoon dog) or manekineko (beckoning cat) figures, these works illustrate a unique painted world based on precisely controlled combinations of colors and confident brushwork.

Motifs generally work as foreground elements. behind which abundant background spaces unfold in a nested fashion between painted image and solid obiect.

These nested arrangements that define the works' multi-layered structures beyond architectural spaces are achieved by two different methods: By solidifying the painted objects, the artist establishes of a chain of spatial vectors that connect the paintings on the walls to the objects placed around them. Or, as precisely demonstrated in the two differently sized types of tanuki, she employs tenfold enlargement and reduction to add temporal vectors of past and present to the spatial vectors, and thereby create a visual magnetic field of sorts through the effect of attractive and repulsive forces.

Witnessing the ratios of enlargement and reduction of small objects on a different level of the exhibition

Eri INAGAWA "Tanuki"

space from that of the extremely differently sized painted tanuki is equivalent to the experience of one's own body expanding and contracting in response to the perception of the respective works' ratios. This is reflected also in the obviously Cézanne-inspired Bather painting and the corresponding hand-kneaded seated figure, whereas the elements of painting and sculpture transform the exhibition space into a magnetic field that pulls the viewer into their close

Jury members' comment: OPEN SITE 2016-2017

Chisato AKAIKE "pathos"

If the locations of our memories are personal "sites" that are closed and unknowable to others, memories turned into paintings are "non-sites" that are open and accessible to anyone.

The states of two females painted with an illustrative touch - one tossed about by torrents of water, the other comforted by the waves - correspond with the generation process of driftwood. The life of trees at their settled locations is interrupted as they are swallowed for one reason or another by the water. tossed about and ossified. On an individual level, the lives of these ossified trees, turned into driftwood. thus came to an unexpected end, whereas on a global and cosmic level this simply means that the process of decay has been accelerated. The process of decay of sorts of living trees becoming driftwood represents an entropic kind of iconography that overlaps with the process of decaying buildings.

While this suggests that these are personal works representing two-dimensional incarnations of personal memories, they may as well be interpreted as visualizations of the energy of decay that erodes buildings and cities. Corresponding also with the

increasingly extreme climate in recent years, they are further elaborated to express a universal providence according to which individual dreams are irreversibly heading from order toward chaos, and finally, to

In the works that combine paintings and driftwood, the paintings are no two-dimensional representations of three-dimensional spaces, while on the other hand, the installations are not supposed to add a third dimension to the paintings. They rather evoke a kind of visual theory according to which the realm between the two-dimensional and the threedimensional contains differentiated dimensions that are flooded with countless images.

Asami SHOJI "during the night"

Asami Shoji's paintings contain opposing vectors that bounce back the viewer's gaze and at the same time lure it beyond the support medium. While demonstrating the glossy medium's permeability and figures, they nurture the permeability of brushstrokes that abandon the gaze underneath the drawn lines. which further overlaps with the permeability of colors of faint brightness and saturation. However rather than rebounding and covering each other, there is a kind of affinity to these elements that allows them to integrate and overtly exhibit each other.

While conventional paintings used to be composed of strokes and colors juxtaposed on an opaque support medium, here the support medium, strokes and colors all coexist on an equal footing thanks to each part's own permeable nature. These three elements form permeable layers that together make up a unified picture.

This permeability that induces a dissolution of the gaze is emphasized by skeletons as permeated bodies. Depicted as skin or as bones, the central motif of the human body here makes us aware of the fact that a painting is something that is executed through the confrontation of an artwork's physical strength with the strength of the viewer's gaze. This we can also grasp from the sizes of the paintings, which are not voluntarily determined by the artist, but painted, almost like X-ray photographs, equal in size to those standing in front of them.

Asami Shoji's work contains new possibilities in succession to Sigmar Polke's efforts opening up the imaged world.

Masahiro MIWA (Composer, Media Artist / Professor, Institute of Advanced Media Arts and Sciences [IAMAS])

What, exactly, are today's artists hoping to accomplish amidst the conditions in the contemporary world and in present-day Japan? I was enveloped with this sense of crisis—a thing that also affects me personally as I came face to face with the numerous projects' plans I was charged with evaluating. Serving as a jury this time around, I believe I was not the only one who felt this way. The differences between artistic genres are inherently negligible, and I don't have much interest in works that attempt to shock or comfort the people of this transient world. The things that really matter are truly solitary, intellectual activities and pursuits by artists with an eye toward the future. As

a result, many of the works I chose may appear plain or uninspired at first glance, but I believe that I have singled out numerous works appropriate to introduce here in Tokyo as it stands in today's world.

Minoru HATANAKA (Chief Curator, NTT InterCommunication Center [ICC])

As a program open to applicants throughout the public sphere, and a program which strives to provide opportunities for people in an expansive range of genres, I feel that we have offered new possibilities for a wide array of participants, including those involved in art, music and the performance arts as well as leaders of lectures and workshops. This diversity, of course, has made it quite challenging to serve as a jury: I had a hard time establishing different criteria for judging each of the individual genres and formats involved as I strove to determine what qualifies as expression rooted in actuality. I tried to choose works that clearly expressed ideas and intents

in consideration of the societal conditions under which participating artists and presenters operated, their expressive intents related to Tokyo as the venue, awareness of modern-day problems inherent in the relevant genres, and other such factors.

Atsushi SUGITA (Art Critic / Professor, Joshibi University of Art and Design)

When constrictive, set forms are taken out of the picture. I feel as if this time's proceedings were an examination not only of the participants being judged, but of the judges themselves. Can specific artistic forms as well as highly specialized, art-related jargon-the various words and phrases that have become standard within the set boundaries of certain activities and relevant venues-stand on their own separate from its functionality related to a specific field or genre? The artist being judged must work to develop the persuasive powers needed to overcome such obstacles, and the judge must at times honestly reflect on his or her restrictive fixation on such

limitations while at others must facing a self that has become indiscriminately entranced or intoxicated by them. We have only just begun to experiment with this type of approach in Japan, and without a doubt we still lack experience. Obviously, this means our experience with producing such output is also insufficient

Seminar on Plannning Contemporary Music for Emerging Artist

Naoko KAJI (Director of Planning and Produce Division, Tokyo Bunka Kaikan)

I had a chance to be involved in the two-part Seminar on Planning Contemporary Music for Emerging Artists from the perspective of someone who works with public cultural facilities—a position far from contemporary classical music. It's true that musicians are people who aspire to express themselves through music rather than words, but without exception I had to read the initial project proposals several times before I could understand them. What's more, I was quite shocked to find that almost all of them dealt with contemporary classical music-the writers' own profession, or the profession they aspire to-in a way that could be interpreted as pessimistic. As I read them, I was thinking the time may be over when young people have aspirations so filled with optimism that they could be considered reckless.

Through the guidance of the teachers, the expressive power of the language was refined to the point where it conveyed a clear image of the concept in one reading; and each of the projects set forth in the improved presentations radiated its own originality

Just as effective as the project designs was the fact

that they connected with the creation of a forum for interaction among young musicians, and that we had the opportunity to see the participants showing enthusiasm, sharing information, and joining together in making a fresh start towards their aspirationsas befits young musicians. It's certain that some astonishing projects will be created.

For me, this was an opportunity to reconsider the question "What is contemporary classical music?"while recalling the young children who listened attentively, with a flexibility transcending adult understanding, to the contemporary classical music included in outreach programs. If young future leaders transmit this music with positive energy, there will certainly be a new generation to receive it gladly. Therefore, the question of what sort of setting we will create may be the issue thrust upon us inflexible

Sugako KUSUNOSE (Setagaya Arts Foundation Music Project Department)

The purpose of this seminar was to prepare and present project proposals, and I think that having the presentations open to the public turned out to be a valuable opportunity for the students.

Something I felt about the presentations was that many of them were similar to explanations of content, and few of them clarified their points with actual performance. One problem is whether you can fully convey what you want to in a ten-minute presentation if performance is included. And if it's performance only, it won't be a satisfactory project presentation. But if you actually perform parts of works within your theme, it's possible to communicate your points in a straightforward way. In that respect, I felt there was still a lot of room for improvement.

I think this was influenced partly by the fact that many of the plans in the workshop were originally designed as lectures or master classes. When I think of the subject of contemporary classical music, I'd like to expect something transcending knowledge and technique, something accompanied by deeper inner/ outer experience. What's more, if you think from a broad perspective encompassing the time and space of history and region and non-musical elements,

rather than looking only at your own instrument or contemporary classical music, the contemporary nature of the music will actually stand out more

I considered things from the position of being responsible for selection—the work of "the public hall project director"-which is a premise of the seminar. There is quite a lot of gravity not only in the information gained from the presentation of a project proposal, but also in the way the project is given form and how much one can enjoy the process of creating it together with the musicians/composer. I also look at these margins in the project proposal presentations and the flexibility of the musicians/composers.

I think that being aware of the "play" aspect of creation, in which project proposal recipients take part as they experience discovery and inspiration. also broadens the scope of a project. As I wrote in my comments last year regarding the "workshop experience for the musicians themselves," I became conscious again of the fact that the project director has the same sort of experience as the presenters.

Ken'ichi NAKAGAWA (Pianist / Conductor)

It would be some consolation if people listened to contemporary classical music in a positive and active way, but even though it's been over 100 years since "The Rite of Spring," there isn't even a clear definition of contemporary classical music. Nonetheless, works in this genre are created on a daily basis. In today's world it's no easy matter to bring a lot of people in to listen to this music, so it stands to reason that everything starts with the question of whether people who plan concerts and workshops are willing to present it. In written proposals and oral presentations given in meetings, language is a necessity. Music is something that "can't be described in words," and giving a presentation on a music project is extremely difficult-especially if it's a project about "contemporary classical music," which sometimes even inspires fear. But it seems that until we overcome this difficulty, the way in which contemporary classical music projects are disseminated will become increasingly half-hearted. So I felt there was meaning-and a ray of hope for the future-in the fact that the young people who took part in this program faced this issue proactively

From the proposals and presentations in the seminar, I understood clearly that plans which were complete only in the participants' own minds had been transformed into language that other people could understand easily-starting with a reexamination of the overuse of technical terms—without any alteration of the original idea. As a teacher, this made me very

It will be wonderful if this program turns out to be a valuable aid in thinking not only about presenting projects, but also about a continuous approach to presenting contemporary classical music to society, and about presenting oneself to the world as a musician. I sincerely hope that the students will take what they gained in this seminar and continue to use it effectively in their activities on a daily basis.

Yuii NUMANO (Musicologist / Professor, Toho Gakuen School of Music)

Presenting your own project plan in front of a big audience is more troublesome than people imagine. Naturally, at the beginning you're probably still in the process of developing both the plan and your presentation techniques, so you might find yourself getting embarrassed, and you're giving a sort of unnatural performance, so it can feel very awkward. But the participants in these projects were undaunted; they got embarrassed with conviction and they performed with conviction. In other words, they persevered and accomplished their goal. This above all is something I deeply respect.

Even though I made some harsh comments, I can honestly say that every project and presentation I saw made me think, "This is really something." I have a feeling that if I'd done this kind of thing when I myself was only around 30. I would have gotten fed up and abandoned it halfway through. This may be a slight exaggeration, but looking at the participants in these projects, I felt quite optimistic about the future

Unfortunately, though--and I realize this is a very self-centered opinion--none of the projects really shook me up or inspired me with amazing new

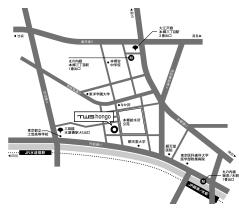
knowledge. In other words, for presentations by young people I found them truly impressive, but from the perspective of an adult standing on the same soil, I was unsatisfied. I hope the participants will take this comment as a provocation and astonish me more the next time we meet

施設室内 General Information

TUI hongo トーキョーワンダーサイト本郷 Tokyo Wonder Site Hongo

〒113-0033 東京都文京区本郷2-4-16 TEL: 03-5689-5331/FAX: 03-5689-7501

開館時間: 11:00-19:00 (入場は閉館30分前まで) 休館日:月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始



2-4-16 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033 TEL: +81-(0)3-5689-5331 / FAX: +81-(0)3-5689-7501 OPEN: 11:00-19:00 (Last Entry: 18:30) CLOSED: Mondays (When Monday falls on a national holiday, closed on the following weekday), Year-end and New Year Holiday



TLUI Shibuya トーキョーワンダーサイト渋谷 Tokyo Wonder Site Shibuya

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-19-8 渋谷区立勤労福祉会館1F

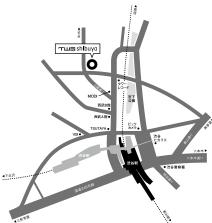
TEL: 03-3463-0603/FAX: 03-3463-0605 開館時間:11:00-19:00 (入場は閉館30分前まで) 休館日:月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始

TWSアートカフェ 24/7 coffee & roaster ※ TWS 渋谷併設

TEL: 03-6455-0920

営業時間:10:00-23:30 (ラストオーダー23:00)

定休日:年中無休(1月1日除く)



Shibuya Workers' Welfare Hall 1F, 1-19-8 Jinnan Shibuya-ku, Tokyo 150-0041

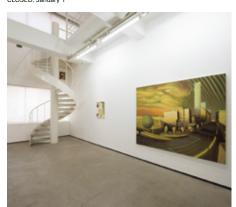
TEL: +81-(0)3-3463-0603 / FAX: +81-(0)3-3463-0605

OPEN: 11:00-19:00 (Last Entry: 18:30)

CLOSED: Mondays (When Monday falls on a national holiday, closed on the following weekday), Year-end and New Year Holiday

TWS Art Cafe "24/7 coffee & roaster"

*Located in the same building as TWS Shibuya. TEL: +81-(0)3-6455-0920 OPEN: 10:00-23:30(Last order 23:00) CLOSED: January 1



TW目 residency トーキョーワンダーサイトレジデンス Tokyo Wonder Site Residency

〒130-0023東京都墨田区立川2-14-7 アーツ菊川1F(オフィス501)

TEL: 03-5625-4433 / FAX: 03-5625-4434

※イベント開催時のみ一般公開

тш≡ residenc

Arts Kikukawa 1F, 2-14-7 Tatekawa, Sumida-ku, Tokyo 130-0023

TEL: +81-(0)3-5625-4433 / FAX: +81-(0)3-5625-4434 *Open to the public when events are held.



TIME Office トーキョーワンダーサイトオフィス Tokyo Wonder Site Office

〒135-0016 東京都江東区東陽7-3-5 東京都現代美術館リニューアル準備室 3F TEL: 03-5633-6373 / FAX: 03-5633-6374 ※2016年12月1日移転

7-3-5 Toyo, Koto-ku, Tokyo 135-0016 (Located in MOT Temporary Office 3F) TEL: +81-(0)3-5633-6373 / FAX: +81-(0)3-5633-6374 *Relocated on December 1, 2016



contact@tokyo-ws.org

Web

[日本語] http://www.tokyo-ws.org/ [English] http://www.tokyo-ws.org/english/

[日本語] Tokyo Wonder Site [English] Tokyo Wonder Site EN

Twitter

[日本語] TokyoWonderSite [English] TWS EN



YouTube Tokyo Wonder Site

Facebook

トーキョーワンダーサイト アニュアル 2016

編集 杉本勝彦

トーキョーワンダーサイト(伊藤まゆみ | 市川亜木子 | 藤井宏水)

インタビュー 内田伸一

翻訳 クリストファー・スティヴンズ (P.002-019, P.028-138 プロフィールを除く)、

アンドレアス・シュトゥールマン (P.154-162)、株式会社オフィス宮崎 (P.163-165)

撮影 加藤 健、佐藤 基、須田俊哉 (bloomy)、髙橋健治、ただ (ゆかい)、トーキョーワンダーサイト

デザイン 溝端 貢 (株式会社 ikaruga.)

印刷 株式会社 シナノ パブリッシング プレス

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 育成支援課

〒135-0016 東京都江東区東陽7-3-5 東京都現代美術館リニューアル準備室3F

発行日 2017年6月1日

Tokyo Wonder Site Annual Report 2016

Editorial Staff Katsuhiko SUGIMOTO,

Tokyo Wonder Site (Mayumi ITO | Akiko ICHIKAWA | Hiromi FUJII)

Interview Shinichi UCHIDA

Translation Christopher STEPHENS (p. 002-019, p. 028-138, except artist profiles),

Andreas STUHLMANN (p. 154-162), Office Miyazaki, Inc. (p. 163-165)

Photo Ken KATO, Motoi SATO, Toshiya SUDA (bloomy), Kenji TAKAHASHI,

TADA (YUKAI), Tokyo Wonder Site Mitsugu MIZOBATA (ikaruga.)

Printing SHINANO PUBLISHING PRESS CO., LTD

Published by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture,

Museum of Contemporary Art Tokyo, Arts Program and Residency Division

7-3-5 Toyo, Koto-ku, Tokyo 135-0016 (MOT Temporary Office 3F)

Publication Date June 1, 2017

Design